

第48回

# 日米学生会議

THE 48TH JAPAN-AMERICA STUDENT CONFERENCE

## 日本側報告書



1996年夏——

*Accepting Personal Responsibility  
to Strengthen Our Global Partnership*

日米から世界へ：  
今、問われる私たちの使命

# 第48回日米学生会議報告書

## ◎目 次◎

### I メッセージ

日本側実行委員長あいさつ .....	廣瀬 葉子	2
米国側実行委員長あいさつ .....	Scott Blacker	3
橋本龍太郎内閣総理大臣のメッセージ .....		4
ビル＝クリントン大統領のメッセージ .....		5

### II 本会議までの道のり

第48回日米学生会議参加者リスト .....		8
準備活動 .....	北澤咲弥花	10
連続講演会 .....	大沢枝里子	11

### III 本会議総括

本会議の日程 .....		18
第48回日米学生会議の総括 .....	北澤咲弥花	19
日米学生会議の存在意義について .....	原 大介	27
日米学生会議に関する考察 .....	佐藤 朋範	29
第48回日米学生会議の成果 .....	見市 礁	31
第49回日米学生会議実行委員長の抱負 .....	藤原 武男	32

### IV プログラム報告

ジョイントオリエンテーション .....	黄 莉香	36
時事問題DAY .....	原 大介	38
マイノリティDAY .....	西野 水季	40
	佐々木健至	41
	森 利彦	43

ボランティアDAY .....	Rachel Brunette	53
参考 ボランティア フィールド・ワークの感想 .....	村田 知子	54
準備活動を振り返って .....	黄 莉香	55
日米関係フォーラム .....	見市 礁	59
ホームステイ .....	村田 知子	67
環太平洋フォーラム .....	原田 芳衣	68
<b>V 分科会報告</b>		
分科と芸術 .....		74
新時代の「民族」 .....		77
国際秩序 .....		81
南北問題 .....		85
哲学と宗教 .....		88
社会参加 .....		90
ビジネス .....		93
経済政策 .....		95
科学と人間 .....		98
<b>VI 特別企画 OBからの声</b> .....		103
<b>VII 会議開催にご協力下さった方々</b> .....		117
<b>編集後記</b> .....		123



## 米国側実行委員長あいさつ ●●●●●●●●●●

The 72 delegates to this summer's 48th Japan–America Student Conference proved to be the living embodiment of our 1996 theme, “Accepting Personal Responsibility to Strengthen Our Global Partnership.”

As Executive Committees and as delegates, we successfully created and brought life to a conference that not only sought the nature of problems surrounding the Japan–America relationship, but which taught us to look inward for solutions. While the challenges we faced during was year long planning and implementation of JASC were ultimately resolved by our entire delegation, what made our experience so special was the personal effort made by each delegate every day. From impromptu creations like the “Standards Task Force” to well planned forums like Pan–Pacific Day, this summer's JASC, more than anyone might have expected, proved to be the product of 72 individuals accepting their own personal responsibility to create a meaningful conference that already is strengthening our global friendship.

JASC united us as participants, but it was also an intensely personal experience. Perhaps more than any conference before us, we questioned the very nature of JASC and wondered if such a conference still and meaning in today's society. What this question took for granted, however, was that “meaning” was something that could be defined collectively. I can't hold anything in my hand as evidence of the value of this summer's conference, but I do know that for me, this year was a process of self–discovery and growth. I learned I was capable of actions and ideas that I had not given myself credit for, I left the conference with a quiet and understated confidence. And at the same time, I looked around at 72 of my new and growing friends, and I knew that they were all having similar experiences. The process of 72 individuals coming to similar realizations about themselves proved to be fertile ground for new and explosive ideas. We were all at our best, and we all grew from one another.

This growth already is causing us to question our roles in society as we graduate from our respective universities. It was so easy for us to speak rhetorically during the conference, to make reference to the future and speak of the positions we would someday take. But to take that rhetoric and create a meaningful life from it is quite another. Not that the conference is over, I believe more than ever that JASC never ends. It is a learning process that began in St. Louis, and which will continue throughout our entire lives. In time, I expect JASC will prove not to be a flower, but rather the seeds from which an entire garden may someday bloom.

Thank you to everyone who made this summer a reality, and on behalf of our entire delegation, I wish the new Executive Committees the best of luck in creating a memorable 49th Japan–America Student Conference.

## ●橋本龍太郎内閣総理大臣のメッセージ●

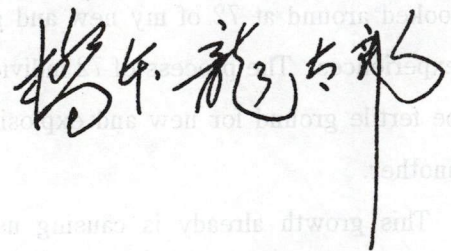
「第48回日米学生会議」の開催にあたり、一言ご挨拶申し上げます。

日米両国は、これまで長年にわたり、試練を乗り越え、経験を共有し、協力関係を発展させてきました。現在、両国は共通の価値観、共通の関心、共通の希望を持ちながら、強固なパートナーシップのもと、21世紀に向かって進んでいます。

先の首脳会談において、私とクリントン大統領は、日米関係は、日米両国、アジア・太平洋地域、そして世界にとり重要な関係であることを再確認いたしました。同時に、次世代を担うひとりひとりの日本人とアメリカ人の青年が友情と心の交流を育むことは、信頼感と理解を深め、両国を更に近づけるという認識を共有していることも確認しました。このような観点から、両国78名の学生が約一カ月にわたり、言葉や文化の違いを越え、率直に意見を交換しあうこの日米学生会議は、まさにそうした意義にかなった場だと考えます。次世代を担う若者が、自由な議論の中で相互の理解を図るとともに、新しい時代の発展と平和を真摯に追求する姿に、私としても深い感慨と期待をおぼえるものであります。

本年度会議の総合テーマ「日米から世界へ：今、問われる私たちの使命」(Accepting Personal Responsibility to Strengthen Our Global Partnership)にある通り、世界に向けてのパートナーシップを実現させるのは、皆さん一人一人の使命感と、理想に向けての飽くなき努力です。この会議の開催が、太平洋の架け橋として新時代形成の一翼を担う皆さんの、未来への第一歩となることを祈念いたします。

会議のご成功をお祈りいたします。



## ●ビル・クリントン大統領のメッセージ●

THE WHITE HOUSE

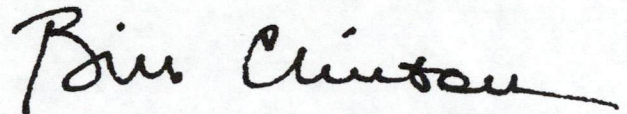
WASHINGTON

Warm greetings to everyone gathered for the forty-eighth annual Japan-America Student Conference.

Our future depends as never before on the bonds that link us with nations around the world, and you can all be proud of your efforts to strengthen these bonds. Your participation in this conference is helping the Japanese and American People to deepen our understanding and respect for one another, bolstering our relationship now and for the years to come. I salute each of you for helping to create a future of peace and prosperity for all our people.

Best wishes for a memorable conference.

Bil Clinton



# 第48回日米学生会議



第48回日米学生会議実行委員





●第48回日米学生会議参加者リスト●

日本側実行委員

大沢 枝里子	筑波大学	第三学群国際関係学類
北澤 咲弥花	東京大学	教養学部教養学科第三国際関係論
田尻 雅	慶應義塾大学	総合政策学部
原 大介	立命館大学	国際関係学部
原田 芳衣	早稲田大学	法学部
廣瀬 葉子	東海大学	医学部医学科
見市 礁	慶應義塾大学	法学部政治学科
村田 知子	東京大学	経済学部
Rachel Brunette	筑波大学	第三学群国際関係学類
湧永 裕子	国際基督教大学大学院	比較文化専攻

日本側参加者

阿部 美千栄	東京大学	法学部二類
岩根 育子	慶應義塾大学	法学部政治学科
遠藤 範夫	早稲田大学	政治経済学部経済学科
大橋 英雄	東京大学	経済学部経済学科
神谷 説子	東京大学	教養学部教養学科第二アメリカ科
川瀬 淳一	上智大学	外国語学部英語学科
北村 薫子	京都大学	医学部
木村 要介	筑波大学	第三学群国際関係学類
黄 莉香	慶應義塾大学	総合政策学部
斉藤 名穂	立教大学	社会学部産業関係学科
佐々木 健至	三重大学	医学部
佐藤 朋範	早稲田大学	法学部
塩崎 彰久	東京大学	教養学部
尺田 恵里子	東京外国語大学	外国語学部ドイツ語学科
高木 暁子	慶應義塾大学	経済学部
竹内 大志	慶應義塾大学	総合政策学部
鄭 平文	立命館大学	国際関係学部
中川 美智子	上智大学	文学部社会福祉学科
西垣 雄一郎	東京外国語大学	外国語学部ドイツ語学科
西野 水季	京都大学	医学部
庭瀬 祐一郎	慶應義塾大学	法学部
藤原 武男	東京医科歯科大学	医学部
ボヴェ 麻衣子	早稲田大学	政治経済学部政治学科
増田 剛	同志社大学大学院	法学研究科公法学専攻
森 利彦	早稲田大学	商学部

## II. 本会議までの道のり

森下 博文	九州大学	医学部
横田 直正	浜松医科大学	医学部医学科
吉野 次郎	京都大学大学院	経済研究科経済政策専攻
渡辺 洋子	慶應義塾大学	法律学部法律学科

### アメリカ側実行委員

Scott Blacker	U. of North Carolina, Chapel Hill
Helen Lee	Princeton University
Daniel McKelvey	Case Western Reserve Univ.
Alexander Milkey	Guilford College
Meghan Murnion	Rocky Mountain College
Malik Rashid	Columbia University
Kevin Saari	University of Kansas

### アメリカ側参加者

Shelene Atanacio	Univ. of California, Berkeley
Michael Brous	Columbia College
Luigi Cagnina	Univ. of Illinois at Chicago
Gregory Caimi	University of Virginia
Emma Chanlett-Avery	Amherst College
Eleanor Clark	Ohio State University
Kiyah Cobb	Howard University
Christopher Ducret	Teikyo Loretto Heights Univ.
Daniel Goodman	Harvard Grad. School of Edu
John Grimaldi	Wake Forest University
Grace Han	Washington University
Akiko Inoguchi	Occidental College
Toshiaki Kameoka	Duke University
Steve Munger	North Carolina State University
Gakushi Nakamura	Princeton University
Nao Tase	Smith College
Kaj Trapp	Univ. of Puget Sound
Keith Partney	U. of North Carolina, Chapel Hill
Ronald Quezon	Univ. of California, Berkeley
Tomo Shibata	Cornell University
Paul Steele	Rocky Mountain College
Carl Watson	Columbia University
Akiko Yamagata	William College
Izumi Yamashita	Wartburg College
Heidi Zhang	Univ. of Puget Sound

## ●準備活動●

北澤 咲弥花

第48回日米学生会議は、昨年度参加者より選出された日米実行委員と、両国にて新たに選ばれた参加者によって構成された。会議に先立ち準備活動としてさまざまな企画やリサーチ、プレゼンテーションなどを行った。準備活動の流れは以下の通りである。

(1) 5月3～5日 第一回全体合宿

(国立オリンピック記念青少年総合センター)

実行委員・新参加者計39名が一堂に会し、実行委員による会議の沿革やプログラムの概要説明の後、実際に全員で各担当分科会やプログラムのグループに分かれて企画に着手した。

(2) 5月～7月 定例会、自主勉強会(毎週、日米会話学院)

本年度会議内容に関連した問題についての議論やプレゼンテーションを行ったり、英語による議論の練習を行ったり、各方面から講師を招聘し講演をしていただいたりする中で、本会議での深く本質的な議論に向けて準備を整えていった。通例のプログラム企画会議や分科会ごとの話し合いの他に以下のような企画があった。

・人種差別についてのビデオ“A Class Divided”鑑賞

米国の小学校教諭の、肌や目の色によって生徒をわざとグループに分けて差別させることによりいわれのない差別の誤りを体感させるという指導を記録したビデオを鑑賞し、人種差別についてのディスカッションを行った。

・プレゼンテーション「部落差別・在日韓国人差別」

日本は米国に比べて単一的であるといわれているが、今なお残る被差別部落問題や在日韓国人に対する差別の問題など、深刻なマイノリティ問題が現存することを指摘。

・HIV・人権と情報センター鮎川氏講演

同センターにてボランティアコーディネーターと電話相談員を務める鮎川氏より、HIV感染者に対する差別の問題や我々の意識改革の必要性などのお話を伺った。

・東京大学教養学部教授・能登路雅子氏講演

会議の大先輩でもあり、現在、アメリカ文化についての研究をなさっておられる能登路氏に、異文化交流について、その難しさと意義を語っていただいた。

・ボランティア体験

障害を持つ子供たちと大学生との交流サークルに参加させていただいたり、滋賀県の障害者教育施設を訪問させていただいたりした。

・自主勉強会

経済学、日米関係論、時事英会話など、参加者有志が自主的に勉強会を開いた。

(3) 7月23～25日 第二回全体合宿

(国立オリンピック記念青少年総合センター)

渡米直前、再び全国の参加者が集まり、本会議に向けての最終打合せを行った。各プログラム

や分科会のミーティングの後、OBの方々をお迎えして団結式が開かれた。日米学生会議創設当時のメンバーの板橋並治氏、田端利夫氏、第7・8回参加者の山室勇臣氏など、大先輩方へ激励のお言葉をいただき、参加者一同、いよいよ始まる本会議への期待に胸を膨らませ、日米学生間の相互理解への一ヶ月の挑戦に全力をかけることを心に誓った。

### ●第連続講演会●

大沢 枝里子

#### 〈私たちの戦略〉

第48回会議では3回の講演会を持った。そのうち第2回までを、会議の潜在的応募者を探すためのもの、と位置づけた。そこで、初回は旬の人であった櫻井氏をお招きし、聴衆の動員数確保を意図した。第2回目の竹中氏では、内容を会議に関連づけたものにするすることで、問題意識の高い学生を引きつけることを狙った。第3回は、参加者が決定した後ということもあり、会議の広報というよりむしろ参加者のための勉強会としての意味合いを強く持った。東郷氏の特派員としてのご経験は、日米両国を常に意識せねばならない私たちの会議に、示唆を与えてくれるものだった。

#### ●第一回 1996年1月30日 ジャーナリスト 櫻井よしこ氏

場 所：東京大学 医学部講堂

タイトル：Disclosure～日本の視点、アメリカの視点～

内 容：当時から話題になっていた薬害エイズ問題に携わる立場から、日本の閉鎖性を強く批判した。奇しくも東京大学の医学部を会場としたため、「権威」が古い体質を改めないことには、情報公開の動きは決して定着しない、との指摘にも熱が入っていた。

#### ●第二回 1996年2月16日 慶應大学助教授 竹中平蔵氏

場 所：日米会話学院

タイトル：環太平洋とこれからの日米関係

内 容：本会議で環太平洋フォーラムを持つことを念頭においた。当時話題になっていた住宅専門金融会社問題への対応の遅さや、大学の質の低下などを切り口に、日本に「変革」への意欲が見られないことを憂いた。アメリカの持つ知的インフラ・軍事力の確かさ、国際弁護士の存在などによる情報のパワー等と比較して、このままでは日本の世界に対する影響力は少なくなるばかりだとの現状認識を示された。その上で、今後のアジアには“Open Economic Association”～開かれた、経済問題に特化した、交渉でなく意見を持ち寄る場～が必要だとの提案をされた。

#### ●第三回 1996年6月15日 ワシントンポスト紙東京特派員 東郷茂彦氏

場 所：早稲田大学

タイトル：The “GAP” ～日米における報道姿勢の違い～

内 容：東郷氏の講演の前に、日米学生会議参加者から、スミソニアン博物館における原爆展中止報道をめぐる日米の報道の差に焦点を当てたプレゼンテーションと、事前に行ったアンケート調査の発表がなされた(資料参照)。東郷氏は、このアンケートを高く評価し、アメリカでもぜひ実施するようにと勧めて下さった。講演は、安全保障・経済・文化といった日米関係全般を捉えたときに、95%はうまくいっているのだが、残りの5%の歪みがクローズアップされている、という氏の問題意識に基づいて展開された。また、メディア自体の差として、個人よりも会社の利益を優先する記者が多い日本と、記者とは言え個人の生活を優先させることが社会的な前提になっているアメリカとの差が、「記事を書いた個人に責任を持たせることができるか(著名記事の普及等)」に現れる、との見解を示された。

### 〈参考資料〉東郷氏講演会における学生からの発表

The “GAP” 日米における報道姿勢の違い

～スミソニアンにおける原爆展中止報道を例に～

同一の事件や事象をめぐる日米の報道姿勢が違うとはよく言われる。一体ほんとうにそうなのであろうか。もしそうだとすれば、どのように異なるのか。

今回はそういった違いのはっきりしている昨年アメリカにおける戦後50周年を記念したスミソニアン博物館での原爆展中止をめぐる日米の報道に注目した。

(事実) アメリカの首都ワシントンDCにあるスミソニアン航空宇宙博物館での原爆展の企画とその中止。エノラ・ゲイの機体の展示にとどめる。

(対照メディア) 新聞 \*は主要対象紙

〈日本〉\*朝日、日経

〈アメリカ〉\*Washington Post, \*New York Times, Wall Street Journal

(検証結果)

日本の論調が原爆中止に遺憾の念を表明するもの(要は中止反対)が多かったのに対して、アメリカの新聞は中止賛成派と中止反対派に論調によって大きく色分けすることが可能。

以下アメリカのメディアの論調による2つの勢力の主要新聞

A中止賛成派 Washington Post, Los Angeles Times

B中止反対派 New York Times, Wall Street Journal

(論調)

A中止賛成派

退役軍人会や政治保守派勢力の後押しを受けたかたちで原爆投下は止むを得ない決定であったと主張。当初企画されたとおりの原爆展を開催は不必要なほど日本を被害者扱いし、原爆によって救われたであろう多くのアメリカ兵の命の重みを軽視している。(Washington Post)

## II. 本会議までの道のり

主要活動団体 American Legion(在郷軍人会) 政治家保守勢力

### B中止反対派

原爆展を中止へと追いやった退役軍人や政治保守勢力の偏向な歴史観を非難。なによりも政治家や特定の利害を持つ人々の間にのみ議論の枠を留めて結論を強引に引き出すやり方を非難。健全な民主主義を阻害しひとつの歴史観を押し付けようとしているという論を展開。(New Yprk Times)

主要主張者 バースタイン スタンフォード大歴史学者

### (参考資料)スミソニアン博物館における原爆中止の経緯

アメリカのスミソニアン協会が、戦後50年を機に原爆展の開催を計画。広島に原爆を投下したB29爆撃機「エノラ・ゲイ」の展示だけでなく原爆は本当に必要だったのか問うと共に、原爆の被害の実態を展示するほうしんであった。

### 1994年秋

American Leagueなどの退役軍人組織が反発。企画の原案は「日本人を無礼で差別的なアメリカ人による真珠湾攻撃に対する復讐の無実の犠牲者として描いている。」として非難。9月には上院の全会一致で大幅修正を促す「スミソニアン非難決議」を可決。協議の結果、反対派の主張に沿った展示内容の大幅修正。

### 同12月

コンセプトの書きかえにともない、広島、長崎に貸し出しを依頼していた「被害者の顔」「焼け焦げた人々」など原爆の悲惨さを示す写真や資料が次々に削除される。そのため日本では「これではヒロシマ、ナガサキの心が反映されない。」として反発や不満が噴出。資料の貸し出しの是非をめぐる議論が繰り返された。

### 1995年1月

スタンフォード大学の歴史学者バートン・バースタイン教授が「ヒロシマ再考」と題した論文の中で原爆投下の正当性を問いなおす。従来アメリカで信じられている原爆投下がなかった場合のアメリカ兵推定犠牲者数22万9千人は多すぎると指摘。これを受けてスミソニアン側は展示の推定犠牲者数を6万3千人に削除。

### 同1月18日

原爆展反対派が猛反発。アメリカ最大の退役軍人協会がスミソニアン博物館に原爆展の中止を正式に要請。同時に81人の議員がスミソニアン博物館のハーウィット所長の解任を求めて署名。

### 同1月30日

スミソニアン博物館は「構想に根本的な誤りがあった」として中止を決定。広島へ原爆を投下し

たB29やエノラ・ゲイの機体の前半分を展示するにとどめる。結局、広島、長崎が所有する原爆資料の展示案は企画倒れになる。

同5月3日

マーティン・ハーウィット、スミソニアン博物館所長辞任。

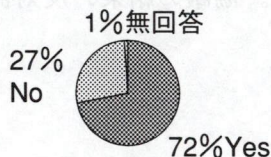
## ●日本人大学生の原爆に関する意識調査の結果●

対象：日本人大学生(男子；75人 女子；59人 計134人)

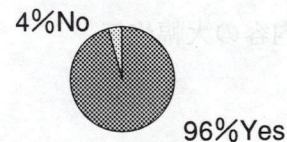
平均居住年数：20.76年

### 〈スミソニアン博物館の原爆展〉

●昨年、スミソニアン博物館で、「原爆展」をめぐる論争が起き、中止されたのを知っていますか。



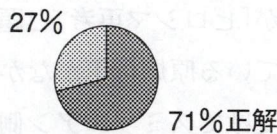
●原爆被害の説明を含んだ「原爆展」を開催すべきだと思いますか。



### 〈太平洋戦争について〉

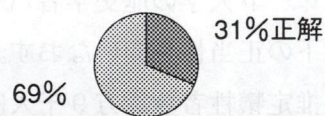
●広島に原爆が落されたのはいつですか。

○年○月○日(正解率)



●真珠湾攻撃が行われたのはいつですか。

(正解率)



●長崎に原爆が落されたのはいつですか。

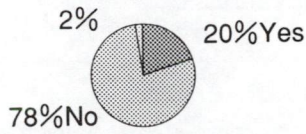
(正解率)



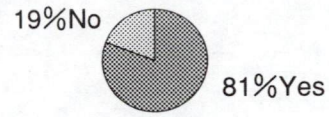


## II. 本会議までの道のり

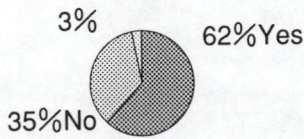
●当時アメリカ政府が日本に原爆を投下したことは、正しかったと思いますか。



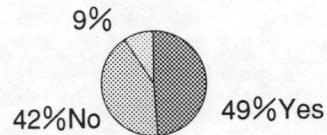
●原爆投下をしなくても太平洋戦争は終わったと思いますか。



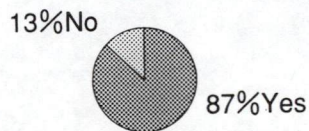
●アメリカ政府は原爆投下について日本国民に謝罪すべきだと思いますか。



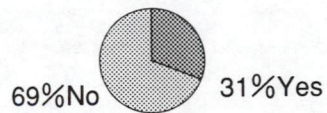
●真珠湾攻撃について日本政府はアメリカに謝罪すべきだと思いますか。



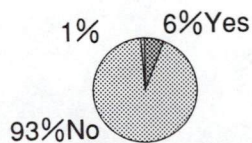
●核兵器は廃絶すべきだと思いますか。



●核を保有することにより、国家間の戦争を防ぐことができると思いますか。



●現在では必要とあれば、核兵器を使用すべきだと思いますか。





## 本会議の日程

1996年 7月21日	セントルイス	アメリカ側参加者集合(セントルイス)
7月25日		日本側参加者合流
7月26日		ジョイントオリエンテーション開始
7月27日		分科会開始、開会式
7月28日		オリエンテーション反省会
7月29日		分科会一色の日
7月30日		時事問題DAY
7月31日		分科会、ボランティアDAY準備
8月1日		ボランティアDAY
8月2日		フリーDAY
8月3日	モンタナ	分科会、モンタナへ移動(モンタナ)
8月4日		マイノリティDAY準備、レセプションパーティ
8月5日		マイノリティDAY、反省会
8月6日		Crow族の居住区へフィールド・トリップ
8月7日		アウトドアの日(イエローストーン、急流下り等)
8月8日		分科会、日米関係フォーラムの準備
8月9日		日米関係フォーラム、反省会
8月10日		ホームステイ
8月11日		
8月12日		ワシントンDCへ移動(ワシントンDC)
8月13日	ワシントンDC	分科会一色の日
8月14日		環太平洋フォーラム準備、分科会
8月15日		分科会、第49回日米学生会議実行委員選挙
8月16日		環太平洋フォーラム準備
8月17日		環太平洋フォーラム
8月18日		フリーDAY
8月19日		日本大使館において閉会式
8月20日		フリーDAY
8月21日		解散

## ●第48回日米学生会議の総括●

北澤 咲弥花

## 1. はじめに

第48回日米学生会議は、日本学生72人参加の下、1996年夏、アメリカ三都市にて開催された。嵐のように過ぎ去った28日間を、こうして総括として文章にしようとしても、溢れ出すさまざまな思いに言葉を失う。

そしてそれは、参加者皆同じであろう。62年度に産声をあげた、「学生の、学生による、学生のための」夏は今年もまた巡り、1996年7月25日、ミズリー州セントルイス・ワシントン大学にて出会った72人の胸に宿った、期待と少しばかりの不安の混じった会議への思い。共に創る会議が進むにつれてそれは、さまざまな困難や誤解の克服を経て、参加者一人一人の心の中に、自分なりの姿で、しっかりと刻み込まれたに違いない。

今ここに、一冊のノートがある。

「1996 JASC(日米学生会議の略)」と表紙に書かれたそのノートには、私の会議中の笑いや涙がいっぱい詰まっている。指でページを繰れば、今でもありありと甦る思い出は、かけがいのない宝物である。

JASCでの話し合いは非日常的な一カ月の団体生活のなかでの机上の空論である、との批判を受けることがある。しかし、会議を終えた私たちには、いつまでも見つめ続けるに違いない大いなる希望や、そのために越えなければならぬ試練が、確かに残った。

共に一ヶ月を走り抜けた証として。

72人全員にとっての会議総括にはほど遠いものであろうが、参加者の一人として、また、実行委員として、私が心に刻んだ思いを記すことで、総括の稿としたいと思う。

## 2. 実行委員会発足

1995年8月、東京。第47回日米学生会議もいよいよ終盤を迎え、来年度の新実行委員が選出された。それぞれに異なる思いはあれど、もう一度JASCに夏を捧げたい、その思いは皆同じであった。

来夏の会議にて再開するまでの間、実行委員は、日本とアメリカとに分けて準備を進めなければならない。私たちは、寝る間を惜しんでミーティングを重ねた。終戦51年目を迎える来年度にふさわしい総合テーマは何か。各人が出した案を壁に貼り、延々と討議した。会議の究極目標である大切な総合テーマであるから、誰も妥協しようとしな。時代背景が求めるものとは何か、日米間に存在する問題とは何か、そして、私たち学生の立場をどう考えるか。総合テーマの議論はすなわち、1996年という年に、「日米」の「学生」が「会議」を行うことへの意義を明確にすることであった。多くの日本人にとってもっとも近い国、アメリカ。しかしその逆は正しいとはいえない。また、自動車交渉や安保論争も活発化し、日米関係は必ずしも「絶対安泰」とはいえない状況にあった。終戦50年の節目にあたり、「平和」を大きな主題に掲げ、硫黄島訪問も果たした第47回会議から一歩視点を変え、新しい日米関係の出発点に立っているという認識、そして、よりよい

## 第48回日米学生会議

日米関係の構築を通して、世界レベルでの貢献を目指そうという認識を持つ、との合意に達した。そして、現在世界を動かす主体ではないが、社会的な利害関係にとらわれない学生という立場でこそ為すべきことはなんだろうか、という、個人レベルでの歩み寄りから始めるべきであると考えた。こうして産みの苦しみを経て出来上がったのが、第48回日米学生会議総合テーマ“Accepting Personal Responsibility to Strengthen Our Global Partnership”「日米から世界へ：今、問われる私たちの使命」であった。

総合テーマを高々と掲げても中身が伴わなければ意味はない。私たちは、総合テーマにふさわしいプログラムや分科会などの構造的な議論に移った。今日の日米学生会議にて話し合われるにふさわしいと思われた10のテーマを選び、分科会を組織した。また、個人レベル、二国間レベル、グローバルなレベルの三段階に合わせ、「マイノリティディ」「日米関係フォーラム」「環太平洋デイ」を会議日程に組み入れた。全てが手探りの状態で、議論が停滞したり対立したりすることもあったが、「素晴らしい夏を創ろう」との一心で時間の許す限りの話し合いを終え、会議のアウトライン案としての「東京アグリーメント」を完成させ、再会を誓って両国実行委員はそれぞれの国にて準備活動を着手した。

### 3. 準備活動(前編)

東京・四谷の小さな事務所にて、日本側実行委員は膨大な仕事を前に茫然としていた。実施要綱の作成、財務活動、講演会などの広報活動。それぞれの役職についたものの、どの程度分業体制をしけばよいか知る由もなかった。情報の共有を合い言葉に、つくば市から京都府まで散らばった10人の実行委員の活動は、決していつもの効率的に捗ったとは言い難かったが、海の向こうのアメリカ側実行委員との近いを果たすべく、そして、新しい参加者と共に会議の内容を實際に作り上げる日を待ち望みつつ、会議の下準備に半年余りを過ごしたのであった。

### 4. 準備活動(後編)

5月の全体合宿にて、日本全国にて選考を行い決定した29人の新参加者と、実行委員とが一堂に会した。会議の骨組み、下準備は実行委員が用意するが、それに肉付けをし、色彩を与え、結実させるのは実行委員を含めた参加者全員の力による。今年も筑波大学から九州大学まで、日本全国から29人の個性溢れる仲間が集まった。専攻は社会科学系ばかりではなく、医学、文学など多岐にわたった。それから本会議に向けての約3ヶ月間、毎週の定例会、ジャーナリストを招聘しての講演会、自主的な勉強会、機関誌の発行、電子メールでの意見交換、フィールドトリップ、合宿などを通して、お互いの理解、そして会議への準備を進めていった。渡米の日は刻一刻と迫っていった。

### 5. 本会議(1)～ミズーリ州セントルイス・ワシントン大学～

7月25日、日本側39人を乗せたバスがセントルイスのワシントン大学のキャンパスの中へ入っていった。突如として私たちの目に飛び込んできたのは、寮のある丘の上から、歓声をあげながら転がるようにして駆け寄ってきたアメリカ側の参加者たちであった。実行委員にとっては、太

平洋を隔てて1年間を過ごした同志との再会であり、また、参加者全員にとって、これから1ヶ月を共に過ごす仲間との、感激の出会いの瞬間だった。ぼうっと立ち尽くす間もなく、スーツケースが次々と彼らの手によって寮の中に運び込まれてゆく。70人余りの出会いの光景は、光溢れる夏の陽と共に今でも私の臉の裏に焼き付いている。笑い声、叫び声、ちょっとおっかなびっくりの挨拶の声。

第48回日米学生会議が、いよいよ幕を切って落された瞬間である。きっと参加者誰もが、あの感動と興奮と胸の高鳴りを、いつまでも忘れることはないだろう。

翌日から、自己紹介、カルチャースキット(日米双方が、互いのステレオタイプ化された文化についての劇を上演)などが行われ、私たちはお互いを少しずつ理解していった。廊下や食堂や部屋での語らいもはじめはどことなくぎこちないものであった。突如として同居を始めた70数人との相互理解のプロセスは、勇気のいることであり、容易いものでは決してなかった。カルチャースキットでは、日本側は現代風の女子高校生や大学生、サラリーマンの姿をいささか誇張気味に演じ、アメリカ側は東海岸、南部、中世部、西海岸の人々の典型的なステレオタイプを演じた。誇張されているために一層、異文化間の溝を目の前にたたきつけられたかのような後味が残った。しかし、会議を終えて私が強く感じるのは、二国間の文化の違いを概念的にどこかから聞き知ってしまったために、かえって個人間の相互理解の回り道につながってしまうケースが多いということである。異文化を意識し、ステレオタイプを学ぶことは逆に、個人の多様性を必要以上にグループ化して定義し、かえって理解を難解な誤ったものとしてしまう危険性をはらんでいる。そしてそれは同時にこう言い換えることもできる。つまり、文化の違い、言語の違い、そうしたものととらわれることで、もっと根底になる人間として共通の何かの底力を忘れがちになってしまうのである。いささか抽象論気味で、理想論でもあるが、数々の誤解や意見対立、「もうわかりあえないのでは」という絶望感にときには打ちひしがれながら、逃げ隠れできないこの団体生活の中で真っ向からぶつかっていった私たちになら、許される認識ではないだろうか、と考える。

数々の誤解と意見対立・・・個性豊かな70以上の個人が、共に生活し、ひとつの会議を創りあげていく過程において、それは不可避の事態であった。会議2日目にして、セクシュアル・ハラスメントに対する認識の違いから生じた誤解と、分科会における実行委員のリーダーシップに対する参加者の不満が報告され、「団体生活のルールはどこまで設けるべきか」「JASCの実行委員の果たすべきリーダーシップとはなにか」という二つの大きな問いに私たちはぶつかることとなった。これらの問題に関する記述は本報告書の別稿にある通りだが、現在の日米学生会議が内包する根源的な問題のひとつ、すなわち、学生の企画・運営による会議であるがための理想と限界とのジレンマを露呈する問題であった。

一方、会議プログラムは着々と進められた。貧しいコミュニティの子ども会の運動会を手助けたボランティアデイがとくに印象深い。その日出会った子どもたちはそのほとんどがアフリカン・アメリカンであり、人種による貧富の差がいまだに根強いことを視覚的にも否が応でも見せつけられた。そして、子どもたちの天真爛漫な底抜けの明るさに学ぶことも数多くあったが、悲

しい出来事もあった。チケットをねだるので金を払わなければ入場できないと告げたところ、チケットにこっそり手を伸ばした子どもや、「私が黒人だからわざとそう言うのね」と言った子どもがいた。そしてリーダー格の大人たちが、子どもたちに乱暴に当たり散らしたり体罰を加えるのを見た者もいた。私たちはそれを見ても、問題の根深さを痛感たままなすすべを持たなかった。参加者の一人はこう言ってため息をついた。「汚れを知らない心を、いわれのない差別に対する怒りや絶望が、根拠を伴わぬまま征服してしまう。未来に対する希望を与えてくれるような手本となりリーダーが、このコミュニティには欠如している。悪循環が続いているのを見て自分の無力を思い知った。」夕方、笑顔で手を振る子どもたちに見送られて出発した私たちのバスに、拳大の石が投げ込まれた。何に対する怒りが、憎悪が、そうさせたのか。私たちにも、そしておそらく本人たちにも、明確にはわからない。ただのいたずらだったのかも知れない。しかし、陽射しの照りつける夏の日のボランティア体験は、重い課題を私たちに突きつけ、事後ミーティングは延々と続いた。

こうして第一の開催地セントルイスにてすでに、私たちは多くの予期せぬ壁にぶつかりながらも、率直な話し合い、常に問題解決指向の姿勢を忘れないように努力していった。それは楽な作業ではなかった。参加者間の理解と、私たちをとりまく社会における問題への理解、その二次元での取り組みは、私たちを悩ませた。しかし、憑かれたように私たちは前進をやめなかった。総合テーマにもある“personal responsibility”を、本当の意味で果たすことの難しさを日々実感しつつも、その意義をかみしめていたからである。ひとつの理想を全員で追っている、そんな確信に満ちていた。

### 6. 本会議(II)～モンタナ州ビルングス・ロッキーマウンテン大学～

第二の開催地ビルングスは、どこまでも続く地平線の彼方にうっすらと雪をたたえたロッキー山脈が見える、美しい土地であった。各分科会の話し合いも順調に軌道に乗り、大自然の中で議論はさらに白熱した。まず行われたのは、今年度のメインプログラムのひとつであるマイノリティデーである。差別を乗り越えることを目的としたこのプログラムでは、ネイティブ・アメリカンへの差別について、また、同性愛者への差別について、それぞれ講師を招き講演をいただき、続いて参加者によるプレゼンテーションがなされた。トピックは多様で、まず最初のグループは、準備期間中に日米それぞれで同時行ったアンケートをもとに、「どんな差別があるか」「差別を生むものは何か」「ステータスを決定するものは何か」「差別に対して何ができるか」の3つの問いに対する日米の回答を比較した。とくに印象的であったのが、身近な差別としてアメリカ側は人種差別、同性愛者への差別が上位2つを占めていたのに対し、日本側は性差別と障害者差別があがっていたこと、また、ステータスを決定するものとしてアメリカ側ではトップに人種がランクされたのに対し、日本側は「金」が1位であったこと、そして、差別を生むもの、そして、その解決策として両国ともに「家庭での教育」と「マスメディア」が上位に共通してランクしていたことである。差別を助長しているものと、解決策となりうるものが同じであるという認識を、かなり異なった類の差別が存在する2国が共通して持っているという調査結果であった。

次に、実際に妹がレイプされて殺されたという経験を持つ参加者が、その後アフリカン・アメ

リカンの貧しいコミュニティにみずから入って犯罪防止活動を行っている、というスピーチをした。ショッキングだったが見事なスピーチであった。当時、妹を殺した男を憎む心は黒人差別へとつながっていったが、自分の怒りはその男を犯行に駆り立てたいわれのない恐れと憎悪と同じものであることに気づいてから怒りは消え、さらに根源的な、人種差別という悲劇に立ち向かうために活動を始めたのである。白人であるというだけで特権を享受し、黒人であるというだけで貧困と差別にあえいで憎悪が衝動的犯罪を生んでしまうアメリカという国をよくしよう、と、みずからの怒りを方向転換したのである。妹がいつも言っていた言葉です、と述べてから彼は静かにこう締めくくった。“Look at people with kind eyes and a soft heart.”

続いて、アフーマティブアクションについて(アメリカ側)、在日韓国人の現状について(日本側)、アイヌ問題について(日本側)、宗教的マイノリティに対する差別について、(アメリカ側)、同性愛者について(アメリカ側)、障害者差別について(日本側)、ハンセン病について(日本側)、被差別部落問題について(日本側)、児童虐待について(アメリカ側)、それぞれプレゼンテーションがなされた。

夜、場所を変えて、さまざまな差別についての短い劇が上演された。被差別部落出身者の結婚、いじめによる自殺、学校内での人種間の対立などがリアルに演じられた。互いの国に固有に存在する差別であっても、質問や討論を繰り返すうちに、根本的な原因はかなり共通しているのではないかと感じられた。そして、根拠のない差別や、弱者に対する虐待の実状に憤りを感じながらも、自分の中にも存在する差別の心を認識させられたのが“Cross the Line”と言うゲームであった。全員が部屋の真ん中に引かれた白い線の同じ側にたち、「私は差別を受けたことがある」「私は異なる人種の相手と結婚できる」などのステートメントに対し「はい」と答える代わりに一步ラインを踏み越えて振り向く。必ず真実を答える義務はないが、反対の答えを持つグループ同士がラインをはさんで向き合うことになる。シンプルだが本質をつく質問、沈黙の中での自分への問いかけ、自分自身にも存在する差別や偏見の心を直視するきっかけになったのであろうか、その後のディスカッションは単なる理想論にとどまらない現実的かつ問題解決指向のものとなった。

続く日米関係フォーラムも、安保問題、国連における日米のパートナーシップ、戦争認識の日米比較、原爆論、経済摩擦など、日米の「今」を表すさまざまなトピックについて日米学生が共同でリサーチやプレゼンテーションを行った。この日印象に残るのは、戦争認識についてのアンケートの発表である。「原爆の投下の日」を正答できたアメリカ側参加者が少なかったとの指摘に、「本質は日にちを暗記することではない」との反論があり、議論が白熱し、ややもすると険悪な雰囲気さえ生まれそうになった。自国の過失にはあまり触れないというのは歴史教育の深刻な問題点であるが、もっと掘り下げて考えるなら、歴史を語るということ自体がそもそも主観的要素を除外しては行われ得ないのだから、歴史を教わる者は常にそれを認識していなければならないとの指摘もあった。そして、とくに戦争を語る際は、どうしても加害者－被害者の構図にとらわれてしまいがちであるが、過去の過ちから私たちが学ぶべきは怨恨ではなく、互いを責めることなく、事実を事実としてしっかりと見つめて明日につなげることであろう。それなのに、戦後四半世紀を過ぎて生まれた私たちがいまなお、過去を清算できずにいる……。やりきれない思いに参加者は呆然とした。こうして毎日共に暮らし、互いを理解し合い、尊敬しあうまでにな



った大切な仲間、しかしいったんこうして国家レベルの戦争という害悪に議論が及ぶと、生まれる前のことであるのに現在の私たちの間にまで溝をもたらしてしまうのだ。自国の歴史なのだから、たとえそれが生まれる前のことであってもしっかり直視する必要はあろう。しかし、個人として、人間として、愛するようになったてからでは、個人の主観を否定し、国家のイデオロギーのために人々が殺しあう戦争が起こってしまったという事実がただただ悲しく感じられるばかりであった。と、その時、部屋の最後列でじっと聞き入っていたジャック・シェレンバーカー氏(JASC Inc. President)が静かに立ち上り、私たちに語りかけた。私はこの部屋で唯一、原爆投下の日に生きていた者である。その日私はそれを、ラジオのフットボール中継の合間のニュースで聞いた。ひと事であるような不思議な気持ちだったのを覚えている。広島、長崎での凄惨を知るすべもなかった。味方と敵、という認識しかなかった。しかし今は違う、君たちはこれから自国のためだけでも、日米関係のためだけでもなく、世界のために羽ばたいて行ってほしい。それが許される、必要とされている時代だ。私たちはジャックの重い重い言葉を懸命に聞いた。そしてジャックが再びゆっくりと椅子に座ったとき、参加者全員の間には確かな共感と信頼だけが残った。私たちはその実感をしっかりとかみしめ、心に刻んだ。

ビリングスでの生活は、このように私たち全員を見えない絆で一步一步結びつける毎日であった。そしてそれを彩ってくれたのが、美しい雄大な自然であった。インディアン居留地へのフィールドトリップでは、しいたげられながらも独自の文化を守ってきたネイティブ・アメリカンの人々の暮らしが息づく大地を見、白人の軍隊と戦って勝利した記念碑の立つ丘に立ち、どこまでも続くグレートプレーンズをわたる風に吹かれた。フリーデイには、イエローストーン国立公園、ラフティング、ハイキングのどれかを選び、大自然に遊んだ。ミーティングやディスカッションを終えた夜は、降る星空に抱かれた。“Big Sky State”の愛称を授かった360度の壮大なパノラマの下、芝生に寝ころんでいつまでも語り合った。

### 7. 本会議(III)～ホームステイ～

ホームステイは参加者が数人ずつに分かれ、ビリングス周辺の家庭に2泊するというものだった。出発の朝、2回目のパッキングを終え、寮のラウンジでめいめいが自分のホストファミリーの迎えを待った。市内の家庭に行った者もあれば、車で延々数時間、信号も対向車さえない道を行った先にある放牧場のオーナーにお世話になった者もあった。私たちは大平原の明るくあたたかい人々との3日間を、アメリカのホスピタリティーを堪能したり、とにかくむさぼるように睡眠をとったり、大学の食堂での食事に慣れた味覚をびっくりさせるような郷土料理に下鼓を打ったり、それぞれのやり方で楽しみ、いよいよ最後の開催地であるワシントンDCへと、たっぷり充電された心と身体で向かったのであった。会議日程はすでに3分の2を消化し、参加者はそれぞれいろいろな思いを胸に抱いていたであろう。会議がいつのまにか終盤に入りつつあるという事実は、私にとっては衝撃であった。第48回日米学生会議は、61年間の伝統に加わった新たな1ページであると同時に、私たち一人一人が20代前半というこの時期に全力をかけた夏でもあるのだ。体力的にはおそらく限界をこえていた。連日連夜のミーティング、リサーチ、ディスカッション、そして、プログラムの合間には時間を惜しんで仲間と語り合った。毎日が、そこで起こる

全てが、自分にとっての挑戦であった。JASCの全ての瞬間は異質な空間だった。違う土地で違う生活を送っていた70数人が、今、ここに集っているということが、紛れもない現実であるのにまるで奇跡であるかのように思えた。つまり、日米学生会議という名のもとで出会った仲間と、こうして同じ生活を送り、さまざまな問題について話し合う過程でお互いの心を通いあわせている、そのことが私にとってはかけがいのない奇跡であるように思えたのである。ワシントンDCのアメリカン大学にて3日ぶりに全員集合した一人一人の顔には、完全燃焼への気合いがみなぎっていた。

#### 8. 本会議(IV)～ワシントンDC・アメリカン大学/ユースホステル～

最後の開催地ワシントンDCでは、環太平洋フォーラムにて各方面の講師や留学生を交えて議論を交わしたり、それぞれの分科会あるいは全体で米国首都ならではの政府機関などを訪問したりするなかで、あっという間に日々が過ぎた。すっかり日常化した仲間との生活が間もなく終わりを告げることはにわかに信じがたかったが、環太平洋フォーラムは「個人レベルの理解」「二国間の理解」をへて「グローバル・パートナーシップ」を目指すものとしての最後のメインプログラムであったし、分科会での議論も締めくくりに段階に入った。何かと「最後の」という言葉を耳にする機会が増え、JASCの1ヶ月が確実に終わりに近づいていることを認識させられた。

私たちはこの頃から「今年のJASCをどう締めくくるか」と考え始めた。第48回日米学生会議の歴史に何を残せるか、今後に残された課題は何か、という問いかけを何度も自分に繰り返した。JASCは異質な空間である、と前述したが、1ヶ月で得たものを、会議終了後のそれぞれの未来にどう生かすか、社会にどう還元していくか、その過程でこの夏の真価が問われるということもまた事実である。そしてこのころ、参加者の数人から、JASCそのものの存在意義を疑問視する意見が出されたことは、単に今回のJASCが参加者一人一人に果たしうる意義を考えることのみならず、JASCの存在意義そのものを根本から問い直すべき時期に来ていることを示していた。1934年、満州事変を機に悪化した日米関係をみずからの手で修復すべく太平洋を渡った先輩たち。創立当時から幾千人もの日米学生が追い求めてきた相互理解という目標。議論のトピックこそ変化したものの、私たちは歴史と伝統をただ継続するだけで、1996年ならではの意義を追求し、その実現のために要される構造上の変革を思い切る勇気に欠けていたのだろうか、と、会議終盤にさしかかってはじめて考えるに至った。思えば、さまざまな予期せぬ誤解や対立や先入観に幾度となくぶつかりながらも解決策を探し、乗り越えてこられたものも全て、JASCを愛し、その存在意義を信じ、その歴史に加わっていることを誇りに思っていたからであった。参加者のほとんどはその思いを信じて疑わぬままであったが、同じ時を過ごした数人が実際にJASCの存在価値に疑問を感じたということは、慣習にしがみつかず時代に即した構造的な変革を行っていくべき時期に来ていることを意味した。この素晴らしい機会をこれからの学生たちにも残してゆかなければならない、そうした使命感が私たちの胸を貫いた。なぜ今、日米なのか。なぜ、学生が話し合うのか。単なる理想論にならないためにはどうしたらよいか。そうした根本的な問いから始め、1ヵ月という期間、約80人という人数、費用、参加者選考方法というハード面と、総合テーマ、分科会、プログラムなどの内容についてのソフト面、双方について議論が交わされた。1ヶ月間

## 第48回日米学生会議

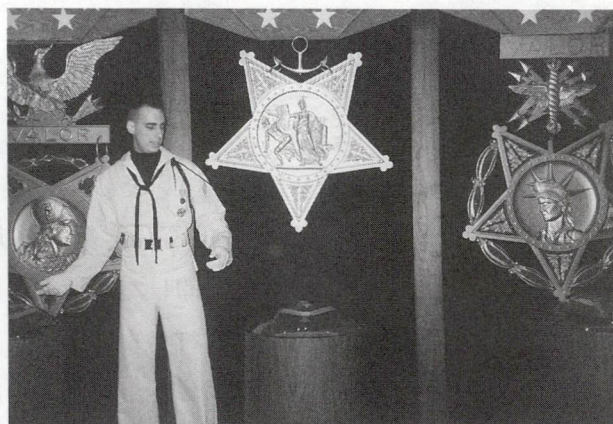
参加して後のことは次の実行委員になった者に任せてきたこれまでの姿勢を改め、全員で話し合った。JASCを愛するようになっていた者、とりわけ、今年度の実行委員にとっては、身を切られるようににつらい瞬間もあった。時代の要求とはいえ、JASCが今までと同じ流れのうえに続いていくべきではないと認識するのは難しかった。しかしそれは、JASCがより意味深いもの、時代にマッチした現代ならではのものとなるための過渡期の苦しみなのであり、自分が参加したこの年の会議において、おそらく何年も前から存在していたであろう変化への必要性をはっきりと具体化と実行に移すことができたことは、それ自体非常に有意義であったこともまた事実である。私たちは程なく学生ならではのポジティブ・シンキングを取り戻し、JASCの未来のために知恵を出し合って、新たに実行委員となった勇敢な18人を全員で祝福と共に送り出した。

最後の夜、広い部屋に全員が円を描いて座り、一人一人が思いを語った。見慣れた顔が並ぶ。思い出を語る友の一言一言を心に刻みつける。こうして全員が集うのはこれで最後だろうと静かに悟る。

翌朝、飛行機など時間にあわせて、一人、また一人と仲間が去ってゆく。アメリカ全土から日本全国から、今年も学生が集い、1ヶ月を共に過ごし、そして、それぞれのコミュニティへと帰っていく。時差ボケどころではないJASCボケした頭が、もとの生活に容赦なく順応させられ、JASCは思い出となる。

しかし、私たちにはかけがいのない仲間が残った。言語や文化の違いと、さらに根本的な個人の多様性とに邪魔されて誤解や対立に直面したときも、恐れずに率直に何もかもを言い合うことで乗り越えた仲間だ。1996年という同じ年に、同じように何かを求めて日米学生会議に参加し、逃げずに前向きに、常に問題解決指向を忘れずに戦った仲間だ。“Accepting Personal Responsibility to Strengthen Our Global Partnership”「日米から世界へ：今、問われる私たちの使命」の総合テーマのもと、共に学びあい、高めあう力を得た私たち。1ヶ月を笑い、悩み、正々堂々と懸命に過ごした日米学生会議での経験の真価が問われるのは、これからだ。

編集注) 文中の「JASC」とは、日米学生会議(Japan America Student Conference)の略です。



ペンタゴンへのフィールド・トリップにて

## ●日米学生会議の存在意義について●

原 大介

このエッセイは私たちが「日米学生会議の存在意義は？」という自己問答から抜けられない理由—①と日米学生会議の持つ可能性—②について考察することを目的とした。①、②とも以下の図式に表わされる。

「若者の国家意識の変容—国家の名を揚げての会議」

- ①—私たちはいつも「日米学生会議の存在意義は？」という自己問答を繰り返してきた。本当は、そんなことを考えるのはつまらないと思いつつも常にこの問いを気にかけて、この問いにつきまといわされてきたのである。それは結局、日米学生会議という名と私たちの国家意識のズレからくる。私たちにとっての「日本」「アメリカ」その「境界線」があいまいなのである。
- ②—私たちは国家の名を揚げた会議の下に集まっている。現存する国家と、国家の規定を常に受けざるを得ない私たちという関係の縮図がここにもある。だが、ここで起きていることは実際の国家と個人の関係よりずっと先をいっている。「例えばここには国籍による参加規定や権利規定はないし、『スワロウテイル』的な民族—言語関係の崩壊があるし、個人が最も大切にされている。私たちの中で国家概念、さらには言語概念、民族概念は変容していて、そんな私たちが日米学生会議の名の下に集まっているのである。ここに日米学生会議の可能性がある。

①、②で言わんとすることはこう書くとより分かるだろう。左と右の距離に注目してほしい。

「私たちの過ごしたあの場—第48回日米学生会議」

「私たちの過ごしたあの時間—第48回日米学生会議」

「私たち —第48回日米学生会議参加者」

結局のところ、私たちの感じることのできる日米学生会議はそこにしかない。

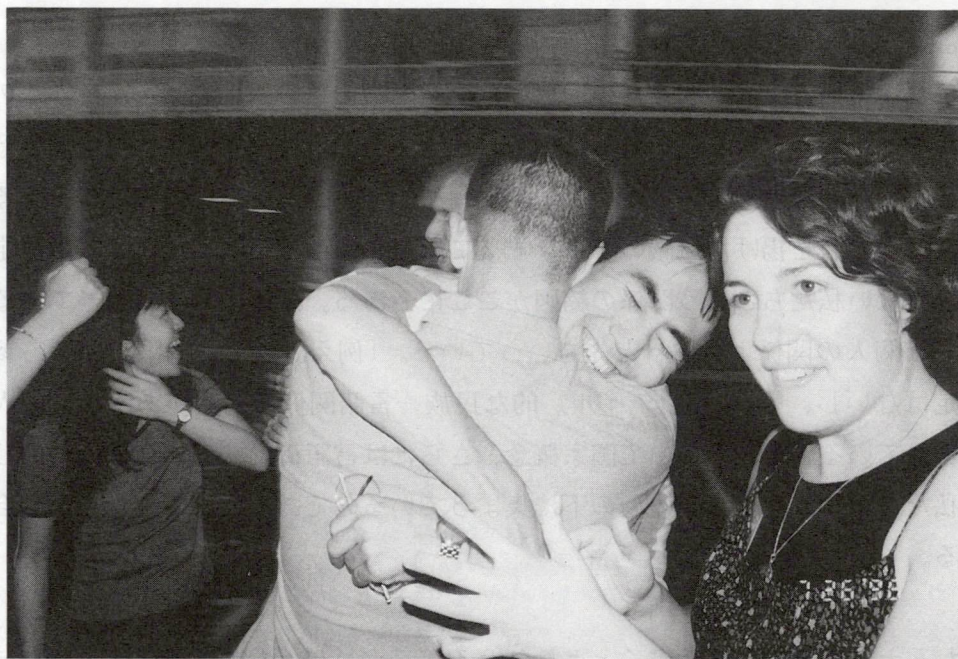
考えてみて欲しい。日米学生会議が創設された時、日本にポップが存在していただろうか。私たちはコカコーラを片手にポテトチップスをつまみながら『フォレスト・ガンプ』をみるし、アメリカ人のDJがいるクラブで「ヘース・ホー」とHIPHOPに体を揺らすけど、その当時の日本は大日本帝国だったしその領域下の臣民は天皇の赤子だったのである。そんな時代の学生と私たちの国家意識が同じであるはずがない。(現代世界の最高権力者たちはおおよそ戦前生まれである。私たちの世代が社会的権力を握る年齢になった時、世界はどう変わっているんだろう。日米学生会議はその一端を見せていると私は思う。)

言うまでもなく、ポップの拡がりには戦後の米国の軍事的経済的覇権に支えられていた。日本は何度も米国からのポップの波をかぶり、その蓄積の中から私たちは生まれてきたのである。こうした状況は日本だけでなく、米国の企業・軍隊が進出している地域を中心として起きている。そ

## 第48回日米学生会議

の結果、私たちはある種の感覚を共有し、この共有された感覚が従来の国家概念、民族概念、言語概念を変容させているのである。

さて、以上に述べたことは現実世界を正確に把握していないかもしれないし、そのことを目的ともしていない。実際、世界では共通感覚の共有と同時進行で国家や民族、原理主義への回帰が行っている。なお、ポップについての定義をここではしなかったが、興味のある方は村上龍『アメリカン・ドリーム』を読んでほしい。



日米の実行委員は再会を喜び合う

## ●JASCに関する考察●

佐藤 朋範

私はEC選挙に先立つ討論の場でJASCの存在意義を明確に否定した。その会議の報告書のために文書を書くのは自己矛盾である。

だが、思う所を伝えられる最後の機会であるので筆をとることにした。EC選挙を混乱させてまで論議を求めた事実上の責任者として、所見を再確認したいと思う。

## 1. 「知識」より「的確な伝達技術」

「勉強会」の知識が、定例会での勉強が、何か役に立っただろうか。その運営における労苦をそばで見てきた遠藤範夫には悪いが、彼の経済勉強会が、会議に直接役立ったとは思えない。会議のレベルが、彼のレクチャーに追いついていなかった。

この壮大な徒労を防止するにはどうするか。「十分な予習」などしないのが一つの方法だ。つまり、事前の準備はざっとしたものに止め、会議中に一生懸命勉強し、その結果を要領よくまとめる、というやり方をとるのだ。

従って、準備期間は知識の習得よりスキルの習熟により力点を置くべきだ。プレゼンテーションの練習、アカデミックライティングの習得、スピーチ、ディベートの訓練……。

例えば、英語のアカデミックペーパーの基本的な構造に習熟していないデリゲーションがいる。簡単な説明や短時間の文法指導では不十分だ。

日本のそれと違い、英語のアカデミズムではそのための教育が系統的に行われている。そのノウハウを持ち込んで、準備期間中に練習をするのだ。つまり「知識量」よりも「思考の整理と発表の仕方」に準備の重点を置く。

「別に勉強しに学生会議に来るわけじゃない。交流しに来るんだ。」と言う人たちにも、こういうスキルは有用だろう。飲んで騒ぐだけが「コミュニケーションスキル」ではない。

## 2. 「自己責任」と「無責任」の境界線

ペーパーを書かなかった人がいる。時間をまもらん人がいる。私も他のことはいえない。

「きまりは守れ」と会合で指摘した際、「自己責任の問題。細かい事を言うな。」とする意見があった。だが本当にそうなのか。

時に「細かい事」が根幹に関わってくる。

落ちていくゴミ一つから全体のモラルに思いを致すことができるか。これが組織の長の条件としてよく問われる。事実、細かい行き違いや見えない緩みの蓄積が、EC(Executive Committee以下ECと表記する)やデリゲーションの無用の摩擦につながるケースが頻繁にある。

「自己責任」も安易に使いたくはない。自由裁量と危険負担が表裏一体になっている厳しい概念だからだ。つい例外や温情を過剰に忍ばせれば、甘えや不公平の温床になる。「離日時に集合時刻遅れた君は日本に放置されるべきだった。それが自己責任だ。」

そう皮肉られても、仕方がない。

### 3. 「テーブル」は不要である

最も長い時間を占めながら、そこでの努力が自己満足に留まるのが「テーブル」である。

フォーラムには全体への発表がある。だがテーブルの成果は報告書でのみ公表される。テーブルには十分な発表の場が欠けている。

テーブル内での議論が充実していればいい、自己満足で十分だ、という意見もあるが、失当だ。第一に、成果を他のデリと会期中に共有することは、お互いの知的研鑽に役立つ。第二に、公開の場での評価を受けることは、テーブルの議論を引き締める。報告書なら中身のある議論をしなかったテーブルでも後から粉飾できる。だが、会期中のプレゼンテーションはいい加減な議論の蓄積ではごまかせない。

「成果の公開と評価」という圧力がなければテーブルの質は低下し、時間の無駄に終わることになろう。それなら廃止した方がいい。

### 4. 「EC」は最終責任者である

JASCは皆で作るものだ。ECに寄りかかっているのはJASCは上手く行かない。

だが、ECは単なる世話役ではなく、最終的な執行責任者たるべきだろう。実務全般に関して知識を持つ以上、責任を負い、権限を有するのは当然である。ECとデリ、という区分は当然存在させるべきものである。

「皆で作るJASC」という言葉を尊ぶ余りECが腰砕けになつては、JASCでのリーダーシップは消滅する。

### 5. 「アカデミズム」より「交流」か

「何も、JASCに来て勉強する必要はない。アカデミズムは図書館で充足すればいい。」確かにアカデミズムの充足には、HJASCの議論より図書館のほうがよほど効率的だ。

だがアカデミズムを図書館に託したとき、JASCに何が残るのか。相互交流と交歓か。

JASCは戦雲迫る時代に、開戦を回避せんとする学生の蛮勇から生まれた。そこでは、全てではないにしろ、当然アカデミックな議論が中心を占めた。生半可「交歓」で眼前の戦争を防げることができると考えた馬鹿はいるまい。

単なる「交流・交歓」を主眼とするなら、私とその苦闘をそばで見た経済勉強会は徒労だ。日本の歌を披露する急造仮設合唱団の方が、毎晩の宴会の方が、はるかに役に立つ。

だが、喫緊の事態を前に平和を取り戻さんとした「蛮勇」を引き継ごうと考えるなら、歌と酒で満足しては掲げた旗のみが空しい。

もし麗々しく「会議」を名乗り続けるなら、アカデミズムは軽視できまい。JASCが会議であろうとする限り、生半可な友情、交流や交歓のみで充足するなら、余りに志が低い。

## ●第48回日米学生会議の成果●

## 見 市 礁

第48回日米学生会議の総合テーマは「日米から世界へ：今、問われる私たちの使命」(Accepting Personal Responsibility to Strengthen Our Global Partnership)であった。私たちのこの会議での目的、理念は全てここに集約されていると言っても過言ではない。これまでの47回の日米学生会議を振り返り、私たちを取り巻く状況をしっかりと見つめ、それでは1996年の夏に私たちがすべきことは何か、と考えたとき、この総合テーマが完成したのである。この総合テーマには3つの思いが込められている。「個人間の相互理解」、「二国間の相互理解」、「グローバルパートナーシップ」である。個々人として互いの違いを認識し、それを受け入れる。その上で一つのことに協働して取り組む。このプロセスを経て始めて個人間の真の相互理解が達成されるのである。そして、これをベースに、世界の中の日米関係、世界の中での日米の役割を探っていった。日米関係を単なる二国間関係の行きを越えた国際社会を動かす原動力の一つであると認識し、世界という大きな枠組みを意識した中での日米の新たなパートナーシップの形を模索してきた。「日米はどうあるべきか」を考えることにより、最終的には「日米を通して世界に何かできるか？」という観点からの議論を交わすことを目的の一つとしてきたのである。

こうした相互理解を達成するためには、集団の中、また社会の中で各個人がそれぞれの役割を認識し主体的に参加することが不可欠となる。日米学生会議において各参加者は各々のPersonal Responsibilityを十二分に認識し会議に取り組んできた。マイノリティディを初め、日米学生会議存続是非、分科会統廃合、個人的な問題等さまざまな議論が会議中に巻き起こった。会議中に起こった一つ一つの議論に対して参加者は目を背けることなく、自問自答し、それぞれの意見を全体に投げかけていった。最近「個人主義」の時代と言われている。しかし、常に自分のことだけを考えていたのでは、隣の人間を理解することは出来ない。アメリカ人を知らずしてアメリカという国を理解することは出来ない。アメリカはアメリカ大陸から構成されているのではなくアメリカ人によって作られているのである。そんな状態では国際協力も中味のない資金だけの協力に終始してしまう。各参加者は日本、アメリカという国籍を越えて、1対1の個人として各々を捉え、その中で互いの意見をぶつけてきた。全参加者とも相互理解の土台を築いてくれたのではないかと思う。

私たちは「日米関係フォーラム」、「環太平洋フォーラム」を通して環太平洋地域の中での日米、世界の中での日米の役割の重要性をこれまで以上に実感した。確かに冷戦崩壊以後日米関係の相対的な重要性は低下しているかもしれない。しかし、東アジアの安定的な成長の支援など「日米関係」に課された役割は未だ重く、現在においても「世界で最も重要な二国間関係」に変わりはない。問題は、日本人、アメリカ人がこの重要性を認識しているかどうかである。私たちは学生であるが故、何のしがらみもなく、幅広い視点から日米関係の問題点やその重要性を理解することができた。10年後、20年後こうした貴重な経験を積んだ私たちが、更に日米、否、世界各国との関係を進展させ、日本を「世界の人々から好かれる国」に近づけた時、その時こそ第48回日米学生会議の真の成果が生まれる時である。



## ●第49回日米学生会議日本側実行委員長の抱負●

第49回日米学生会議実行委員会

日本側実行委員長 藤原 武男

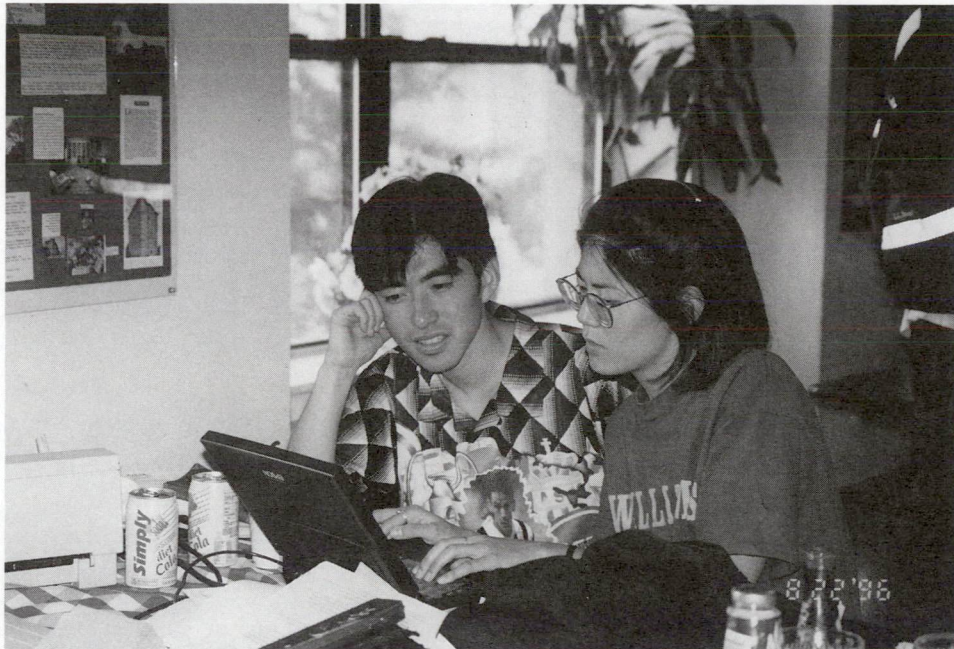
第48回日米学生会議はワシントンDC・アメリカン大学で幕を閉じました。一ヶ月間の共同生活を日米78名の学生で共にしゆく中で得られた最大のものは、形になるような成果ではなく、77人の人と顔を合わせ、議論し、ぶつかり、すこしでも理解しあえたという黄金の思い出につきると思います。

第49回日米学生会議も48回をふまえ、さらに日米学生会議の意義を明確にし、一人ひとりの参加者が本当に来てよかったと思える会議を作り上げてゆく所存です。

さて、本会議創設の原点は何と言っても平和への希求にほかなりません。平和ほど尊いものではなく、平和ほど幸福なものはないでしょう。私の好きな先哲の言葉に「平和への道はない。平和そのものが道である。」とありますが、平和とは決して戦争のない状態ではなく、創造し追求しゆく過程といえると思います。故に我々は、今再び原点に立ち返り、国や宗教や人種を越えた人間同士の相互理解と相互教育の積み重ねによって、一人ひとりの心の中に平和の砦を築くことを目指したい。そしてそれは間違いなく一人の人間からはじまると信じます。

我々は49回のテーマにアジア太平洋を揚げましたが、アジア太平洋時代とは単に文明の重心が移動したことではなく、様々な文化・文明が人間を中心に互いに尊重しながら共生していく文明形態を模索しゆく時代ともいえると思います。時代の焦点はますます「人間」にあたっているからです。日米の学生がアジア太平洋を自分の時代として捉え、自分たち何ができるのか知恵を絞り、お互いに啓発しあい、共同作業し、協力してゆく。この過程の中で、それまで二国間だけでは捉え切れない日米が一人の人間として個人レベルで、また多角的な視点を持った地球レベルで、さらに見えてくると考えます。そしてそれが本当の日米相互理解を、また地球市民としての萌芽をもたらしてくれるでしょう。さらに、会議が終わってもこの経験を参加者が社会に還元し続けてゆくことで、迂遠ながら、着実な平和への広がりを展開してゆくことができるのではないのでしょうか。

日米学生会議は新しい時代の先駆者として、熱き情熱を存分に傾け、ぶつかり合い、そして乗り越えてゆきたい。そこで築かれた逞しき英知、また麗しき友情、そして美しき信頼が21世紀の大いなる機軸となりゆくこと信じて一。



次回会議の日米の実行委員長  
「期待してるよ！」



第49回日米学生会議実行委員

# 日本語学

香林 英

## IV. プログラム

## ジョイントオリエンテーション

黄 莉香

〈日時・場所〉 7月26～27日、セントルイス ワシントン大学

〈企画目的〉

最初の訪問地セントルイスでの2日間を利用して、実行委員が企画したプログラムを中心に、参加者全員がリラックスした中で交流を深めることを目的としたオリエンテーションが行われた。

〈プログラム内容〉

\*スカベンジャー・ハント(大学内探索ウォークラリー)

\*カルチュラル・エクステンジ・スキット(文化交換寸劇)

\*リーダーシップ・ワークショップ

(緊急時のグループ統率法、リーダーに必要な諸条件について)

\*スクエアダンス・ラインダンス(ダンス大会)

\*リフレクション(感想交換会)

〈オリエンテーションをふりかえって……〉

オリエンテーション1日目の朝は、スカベンジャーハントと題し、予めチームごとに配られた命令カード(芝生で人間ピラミッドをつくれなどと書いてある)をもとにワシントン大学を探索した。まだ出会って間もなかった私たちは、互いにたった一言“**What's your name?**”と話しかけるのにさえ緊張し、ほんのちょっぴり相手がほほえみかけてくれるだけで、とびきり上等なプレゼントをうけとったような感覚を覚えた。

午後からは寸劇を通して日米互いの現代文化を見せあった。アメリカ側は、南部・西部・中部…と、広大な国柄故に地域によって人種、文化、生活が異なることをクイズ形式で発表し、日本側は、大都市で近年顕著に見られる満員電車で通勤する「会社員」、ポケベル、ルーズソックス必須の「女子校生」、塾や家庭教師をつける「小学生」、合同コンパにはまる「大学生」等の日常生活、ある家族の1日として発表した。寸劇後互いの文化やライフスタイルの相違について話し合ったが、とりわけ問題になったのは満員電車の中で痴漢が発生するシーンで、日本側は、車内が込み合っているが故にしばしば女性から疑いの目で見られてしまう「男性」に力点を置いていたのに対し、アメリカ側参加者の一人からは、なぜこんな深刻な話がコメディになりうるのかという、フェミニズム思想にもとづく批判を強くうけた。このような社会的な性差についての認識の差は後述するコミュニティスタンダードタクスフォースの結成につながった。

翌日のリーダーシップ・アクティビリティは10人ずつほどのグループごとに真っ白な画用紙が渡され、各々が、リーダーとしてふさわしいと考える姿を表現する、というものだった。グループ内で意見を出し合い、「創造性」「判断力」「広い視野」「柔軟性」などリーダーとしてのあるべき姿を話し合うプロセスはどのグループも似通っていたが、面白かったのは、グループによってはそれを樹木の絵で表現したり、顔型に中央に切り抜き、人間の脳として表現したり、またどの面も

## IV. プログラム報告

等しく重要だということを表示しようと立方体のボックスを作ったりと、実際目に見える形で生み出されたものはどれもが互いに驚くほど違っていたことだった。リーダーに対する知識の重要性を認識すると共に、個々の自己表現の多様性を実感した日だった。その夜、全米でヒットチャートを繰り返したマカレナのラインダンスや二人一組の4ペアが四角を作って踊るスクエアダンスを楽しむと、2日に渡ったオリエンテーションは幕を閉じた。



Cultural Presentation(文化紹介)の1コマ：ジョイントオリエンテーションにて



3日米のリーダーシップ観の違いについて発表：ジョイントオリエンテーションにて



スクエア・ダンスを楽しむ参加者：ジョイントオリエンテーションにて

## 時事問題 DAY

原 大介

〈日時・場所〉1996年7月30日 セントルイス ワシントン大学

〈企画目的〉

我々日米学生会議のメンバーは次世代を担う存在である。社会に出る前段階にあるわれわれが利害に囚われない学生であるという立場ゆえにできること、また求められることは我々が社会に出てその中枢を担いある程度の権力を与えられる時にどのような社会を築きたいのかその未来図を描くことであろう。

当企画では、未来図を描くにはまず現在自分たちが立っているその歴史的地点を検討し正しく認識することが第一歩であると考え、時事問題という現代社会の特徴を色濃く反映する出来事／事件を取り上げ、これを検討し個々人が意見を表明する場を設けることでその第一歩を踏み出すことを目的とする。

〈企画内容〉

1. トピックの検討、リサーチ
2. トピックごとのグループディスカッション
3. グループディスカッション報告

〈トピック内容〉

セクシャル・ハラスメント、エイズ問題、中国・台湾・香港問題、従軍慰安婦問題、住友・大和銀行問題、インターネットのプライバシー問題、尊厳死、銃規制、環境問題等

〈結果〉

「当企画は成功であったか」という問いをコーディネーターである自分自身に問いかけてみる。この問いは何をもって成功と呼ぶかにより多少答え方が変わってくるだろう。まず、①「企画目的を達成したか」という観点からは今の時点ではYESともNOとも言えない。なぜない、この巨大で複雑な現代社会を正しく認識し未来への指針を立てようという試み自体にどこまで達成すれば成功といえるかという明確なラインなど存在しないからであり、またある哲学者が言うようにそもそも「正しい認識」というものが存在するかどうか疑わしいからである。ただし、我々が社会にでてその中枢を担った時にこの日の議論を思い出し、未来の自分達自身がこの日の議論に何らかの影響を受けていると感じたならば成功と呼んでいいのではないか、と思う。次に②「当企画は会議の日程のなかで次へと繋がって行くものとなったか」という観点からはっきりYESと言える。というのは時事問題というトピックスの性格が会議初期において議論されることに向いていたからである。これがどういうことかということ、例えば「ユスティニアヌス1世の即位についてどう思う？」という種類の問いかけをされても、相当この分野に興味や知識がないとなにも答えられない。沈黙を強いられるのが落ちである。しかし、時事問題と僕達が考える問題が持つ性格はその「現代性」にあるのであり、あるものは時事問題に何らかの形で否応無しに巻き込まれて

いるかもしれないし、またあるものは積極的に関わっているかもしれない。また時事問題に直接的な関わりがなかったとしても日頃さまざまなメディアを経由して情報を得ているため何かしらの問題意識をもっていることが多い。こうした時事問題の性格は積極的に参加できる議論を作り上げるためには適しており、実際どのディスカッショングループも議論が盛り上がっていたように見えた。また当企画が終ってから何人かのメンバーから「この日を機会にディスカッショングループが一緒だったメンバーとよく話しをするようになった」というような声や「英語での会話に慣れていないため米国に来てから消極的になっていたのに、普段よく考えている問題についての議論だったから積極的に意見が言えた」というような声が聞かれた。これらのことからこの企画が、会期当初において各メンバーの距離を縮め会議の雰囲気を作っていく上で一役かった結果となったといえるだろう。

結局のところ、今の段階で当企画の成果として言えることはその後の会議の雰囲気づくりに大きく貢献したということだろう。しかしこの事実は、例えばそれが本来の目的からは副産物だとしても、一カ月の間、団体会議を行っていくという点からみて実に重要な役割だったといえる。

## マイノリティ DAY

西野 水季

〈日程・場所〉 8月5日・6日 モンタナ州ピリングス ロッキー・マウンテン・カレッジ

〈内容概観〉

第1日目は、午前中、大学などからマイノリティ問題に詳しい方をお招きしての講演、午後から、学生が、自らの体験や、独自の調査に基づいて行うstudent presentation、更に夜には、日米がいくつかの差別問題について、skitを行い、より具体的に問題点を明確にするという、盛りだくさんなスケジュールであった。2日目には、モンタナという地の利を生かし、Native AmericanのCrow族のReservation(先住民族の居住地)に赴き、墓地やアメリカ政府との戦争の記念碑などを見学した。また、この日の夜、全体で反省会の時間をもうけ、この2日間の活動で得られたマイノリティ問題現状への認識をふまえて、我々にできる問題解決の方法を話し合った。

初日の講演では、同性愛に関する話があり、冒頭に、私たち聴衆全員に紙が配られ、利き手と反対の手で、円を書いてみてくださいと言われた。講演者は、そうすることで、自分が自然だと感じない形で生きることを強いられることの苦痛を訴え、同性愛者に対する理解を求めたいという意図があったようである。シンプルだが、端的で、的を得た表現であり、同性愛に対する、少し違った角度からの見方を示しているようで、とても印象に残った。

続いてのStudent Presentationでは、日米双方から10名あまりの発表があった。とかく、アメリカ側にのみ多い問題としてとらえがちだったマイノリティ問題だが、日本側からも、障害者差別やアイヌ民族についての問題と言った、まさに見過ごされがちな社会的“マイノリティ”を取り扱った発表があり、アメリカ側の学生だけでなく、日本側の学生にも、現状を再認識するよい機会となったと思う。

夜の寸劇では、アメリカ側は同性愛と、移民に対する差別を、日本側は、いじめと、部落差別を扱った。また、最後に、joint skitと称して、抽象的な、昔話風のストーリーによって、差別を引き起こす人間真理と、その解決法を示唆する発表をおこなった。

二日目のreservationでは、あいにく、討論の時間がもてなかったが、同じCrow族の文化を保存している、Western Heritage Museumにおもむき、Native Americanの方と質疑応答をする機会をもてた。が、ほとんどの若者が、Crow独自の宗教や言語を捨てているという現状を聞き、アメリカ社会への同化は時間の問題ではないかという感想を盛った学生は少なくなかったようである。

最終日の夜に行われた反省会は、マイノリティ問題の解決のため、各人が心がけることをあげていくという形をとり、“Do not judge others according to your own criteria” “Be proud of yourself” “Respect yourself, love yourself”などがあげられた。

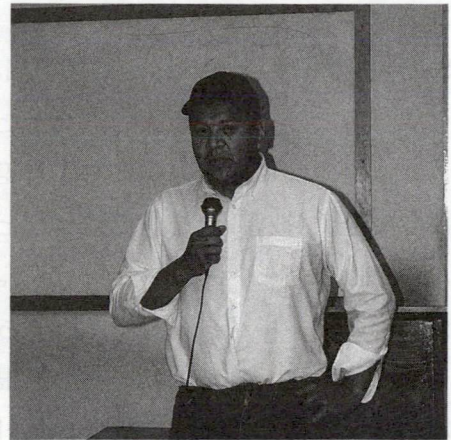
以上、現状認識、解決法の模索、理想の社会へ、という3段階のステップを経て、マイノリティ問題に関わってたわけだが、当所より、アメリカ側の、一方的な差別体験の告白の場になるこ



とだけは避けたいとして、できるだけ客観的に取り扱おうとしたため、最後の反省会などは、あまりに理想主義的であったかもしれない。しかし、人種差別と言った問題を、アメリカだけの、いわばよその問題としてとらえるのではなく、日本側はアメリカ社会の問題点を日本社会に照らし合わせ、アメリカ側もまた、同様に、互いに見過ごしてきた問題への再認識や、解決に取り組む共同意識などが生まれ、参加者一人一人にとって、意義深い2日間だったと思う。



Crow 族訪問



Crow 族の方のスピーチ

### アメリカの現状及びマイノリティーDAY全体に関する考察

佐々木 健至

僕がこだわったのは現状把握だった。具体的な事実を当事者の口から語ってもらい、それを皆で共有すること、そこから話がはじまると思ったからだ。しかし実際には、それは不十分に終わってしまったと思っている。

マイノリティーDAY全体を通して一番印象に残っているのは、当事者が語った事実そのものだ。とりわけ、Sの話は興味深かった。彼の発表に衝撃を受けた僕は、後から個人的に話をし、さらにアメリカの人種問題の根の深さを感じた。

彼が語った事実は以下の通りだ。姉(白人)が黒人に殺された。家族を始め親戚一同が黒人(全般)を憎むようになった。が、自分は憎しみを克服し、今、犯罪を防ぐために、貧しい黒人の子供の教育に一生懸命取り組んでいる。しかし、自分が差別心を克服できたのは少し特別で、その理由は、殺された姉が生前、犯罪を減らすための運動をしていて、こんな言葉をよく言っていたからだ。“Look at angry people with kind eyes and soft heart.”ここで黒人を恨むのは姉の本意に反する、それよりも自分が活動をして、犯罪を減らすことに少しでも貢献しよう、と思ったのだ。しかし普通は、あるコミュニティの誰かが人種の違うある人に殺されたら、そのコミュニティ全体がその殺人者の属しているコミュニティ全体を憎むようになる、自分の家族の場合も例外ではなかった…。

彼は、差別心や憎しみを克服することは簡単ではない、と語った。僕は多分そうなのだろう、

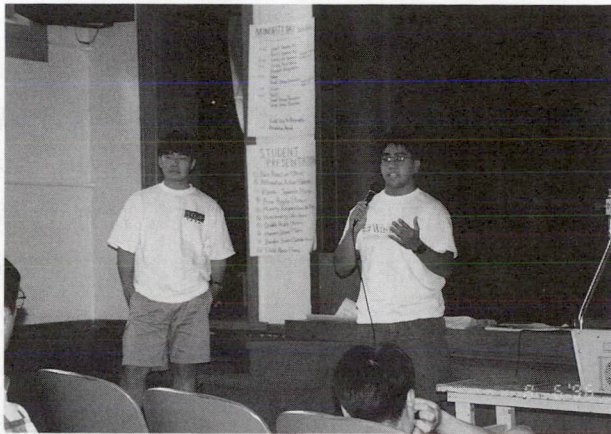
と思ったが、実感はなかった。ただ、何かをきっかけにして生まれた憎しみや差別心は、そう簡単にはなくなれないというのは、想像できる。感情はいつでもコントロールできるわけじゃない。実は日米学生会議の中でさえも、ある宗教的な理由から嫌悪感を抱きあっている人達がいたという。Sは実際個人的に話をして知ったそうだ。僕はSの名指した当事者と、直接そのことについて話をしたわけではないが、まあ、Sがそのような内容について嘘をつくとは思えないので、本当の事なのだろう。参加者同士が個人としてでさえ克服できない人種問題がある、やはり根は深いなと思った。

S以外にはマイノリティー問題の当事者と何人か話をした。それを通して僕が感じたのは当事者と第三者との間にある深い溝だった。僕の頭の中で初めから深かった溝がさらに深くなった。例えば、目の前にある人種に対する差別心をもっている人がいて、彼がその人種を差別する理由を自分の経験(被害等)を基に語ったとしたら、第三者である自分は、特に相手の心に踏み込むようなことは、何も言えない。「分かるよ、君が怒るのも。だけど、もう少し寛容になろうよ」とは言えないのだ。いくら正論であっても、具体的な事実を前にして、第三者の言葉ほど軽いものはない。もちろん、客感的に差別の無根拠性を説くことはできるわけだが、それは合いての心には届かない。少なくとも、マイノリティー問題とは無縁に暮らしてきた僕の言葉は、相手にとって軽い。

さて、繰り返すが、現状把握は不十分だったと思う。その結果、resolution period (プログラムの最後に、自分たちができることを宣言する時間)での皆の言葉が、どことなく表面的、抽象的だったのではないだろうか(あの時の皆の発言が表面的だったという感想は、多くの人が漏らしていた)。例えば、上述したSの話を皆が共有していたら、解決策として“他者に対して寛容になる”“個性を尊重する”などという甘い発言はなかったかもしれない、ということだ。

マイノリティー問題一般に当てはまる解決策が本当にあるのかどうかは知らないが、問題を特定しない発言が結構あったと思う。しかし、それらは、厳しく言えば発言のための発言、言わばただの言葉遊びに終わっていたものが多かったと思う。僕は、やはり本当の解決策は個別的、具体的であるべきだと思う。第三者だってできることはある。例えば、日本の部落差別においては、部落リストを作って就職差別をしている会社には就職しない、とか、あるいは、まあ一旦は就職しておいて、自分が権限をもったときは、首を覚悟で上司に就職差別廃止を訴える、とか。前者よりは後者のほうが効果的か。また、差別の現状を広く国民に知らせる事が解決につながると信じるのならば、政治家になり、国会中継中にマイクをぶんどって差別のことをぶちまけるとか…

これらを実際にやる人は、まずいない。自分の人生をかけてまでマイノリティー問題解決を願う第三者は、おそらくいないであろうから。結局、これらのアイデア(?)も、言葉遊びに過ぎないかもしれない。いや、余計にたちが悪いかも知れない(上述したことは、resolution periodの時点では全然まとまっていなかったのだから、言うことはできなかった)。だが、僕が言いたいのは、それくらいしないと現実是不変というぎりぎりの所を考えるべきだということだ。やはり、しっかりと現実を見つめるべきだ(もちろん限られた時間でできる範囲でだが)。そして、そのためにまず必要なこと、つまり具体的な事実を友達の口から聞く事ができるという点で、日米学生会議のマイノリティーDAYは意義があると思う。未来は今年よりも、現状把握に重点を置くのも僕はよいと思う。



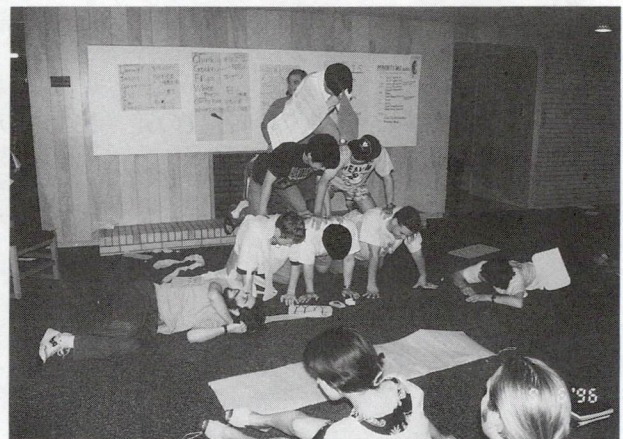
マイノリティー Day にて



マイノリティー Day にて



マイノリティー Day での寸劇



マイノリティー Day での寸劇

### 第48回 日米学生会議 マイノリティーDAYアンケートについて

森 利彦

背景) 我々は、ある社会における少数派もしくは社会的弱者と呼ばれる人々と接する際に気をつけなければならない点は主に2つあると考える。一つはいわゆる社会的倫理の視点。これは、すなわち「身体の不自由な人をいたわりましょう」という考え方である。このような考え方は、ある種、社会のスタンダードとして存在しているように思う、誰でも、困っている人がいたら助けるのは良いこと、と言い替えば、社会的に評価されるべきことというのは分かっているのである。だがここで見逃してはならないのは、誰が身体の不自由な人をいたわるかという見方は含まれてはいないという点である。いたわる側の政府の社会福祉政策であるかもしれないし、ボランティアの人々かもしれないが、必ずしも自分ではないのだ。

もう一つの点は、実際に自分が身体の不自由な人をいたわれるかという視点である。この点に関しては、実に様々に意見が分かれるところであると思う。自分では出来ないという人もいるだ

## 第48回日米学生会議

ろうし、いい格好をしているように見られたくないという人もいるだろうし、様々である。

我々が今回実施したマイノリティー問題に関するアンケートは、主にこした2つの視点を意識して作成された。社会のモラルやスタンダードに対してどう思うかという問いと、自分はどうかという問いである。このアンケートは日米両国で実施したが、質問内容は多少の変更はあるもののほぼ同一のものを使用した。質問内容は7種類、50項目にわたる。質問形式はYES、NO形式を採用。調査対象は大学生、院生に限定。結果として、日本側565名、アメリカ側77名の回答を得ることが出来た。

総括) 全体的な傾向としては日本側、アメリカ側ともに社会の視点と、自分の立場の場合では回答に変化が見られた点は興味深い。例として3、4の性に関する質問と17、18の障害者に関する質問、24、25の在日外国人、39、40の宗教等が挙げられる。こうした違いが分かった点だけでこのアンケートの意義は達成したといえる。また、50問にわたる長いアンケートにも関わらず、回収率が8割を越えたことなどは成功した点と言えるだろう。

反省点としては、日米の回答数の差。加えてアンケートの厳密性という点で、日米で同時期に行われなかった事が挙げられる。今後はアンケートの媒体をインターネットにすることで、多くの回答を得たい。

### マイノリティーDAY

日本側

アンケート結果

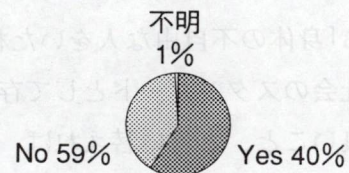
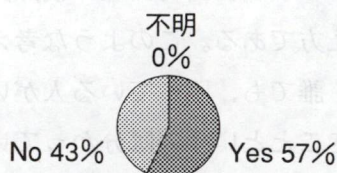
実施人数 1,000人

有効回答 565人

回収率 56.5%

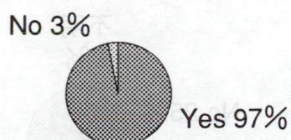
1. ジェンダーという言葉の意味を知っていますか

2. ヘテロセクシュアルという言葉の意味を知っていますか

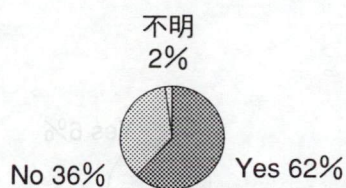


## IV. プログラム報告

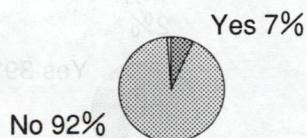
3. 日本の社会では、ホモセクシュアルに対する偏見があると思いますか



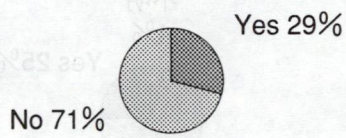
4. あなたはホモセクシュアルに対する偏見があると思いますか



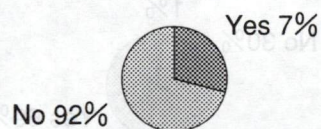
5. 現在の日本の社会は、男女平等であると思いますか



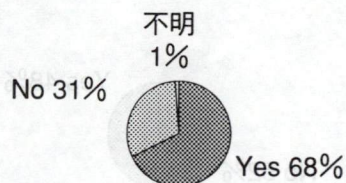
6. あなたは性別によって社会的差別を受け不満を感じたことはありますか



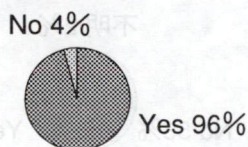
7. あなたは性的いやがらせを受けたことがありますか



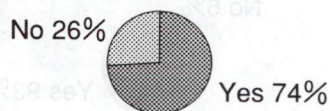
8. HIVとエイズの違いを知っていますか



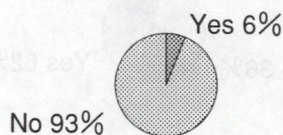
9. HIV感染者に対する差別は存在すると思いますか



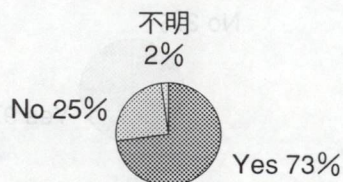
10. エイズについて学校等で教育を受けたことがありますか



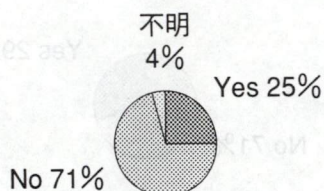
11. HIV感染者は隔離するべきだと思いますか



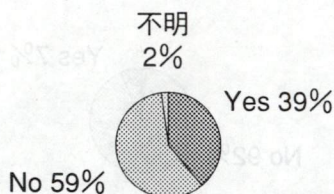
12. 日本の社会では、薬害と性交渉など、HIV感染経路の違いによる差別があると思いますか



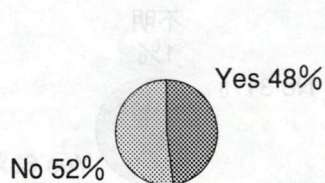
13. あなたは、HIV感染経路の違いで人を差別しますか



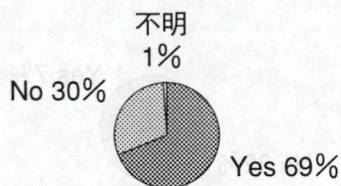
14. あなたの友人がHIV感染した場合、その友人とのつきあい方が変わるとおもいますか



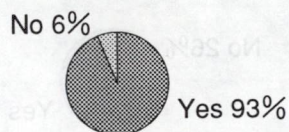
15. あなたはHIV感染の可能性を自分の問題として考えたことがありますか



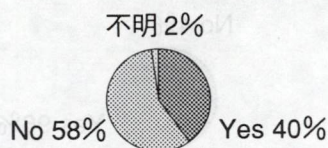
16. らい病(ハンセン病)患者が法的に隔離されていたことを知っていましたか



17. 車椅子の人が困っているとき、手を貸したほうがよいと思いますか

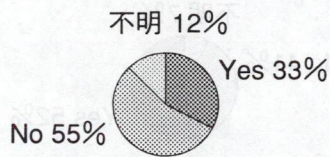


18. 車椅子の人が困っているとき、手を貸した事がありますか

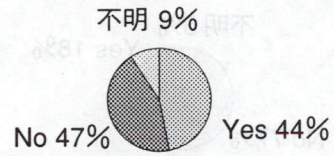


## IV. プログラム報告

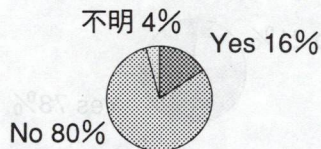
19. 出産前にあなたの子供が障害を持っていると分かった場合、出産に賛成しますか



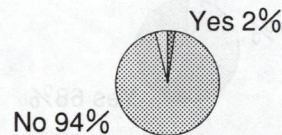
20. 障害を持つ子供は養護学校に通うほうがよいと思いますか



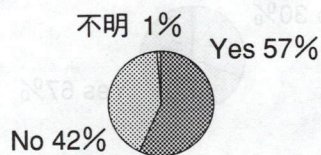
21. 公共施設における設備は障害を持った方々に対して配慮がなされていると思いますか



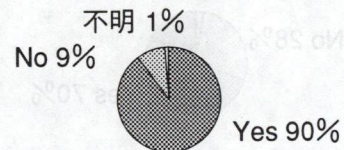
22. 障害を持つ人に対する職業保障は十分だと思いますか



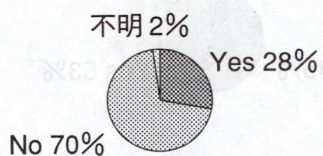
23. あなたには日本に住んでいる外国人の友人はいますか



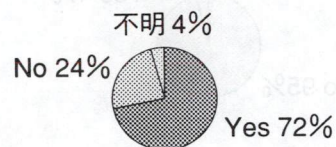
24. 日本の社会では、出身国による外国人の差別があると思いますか



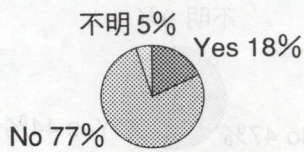
25. あなたは出身国によって外国人を差別していると思いますか



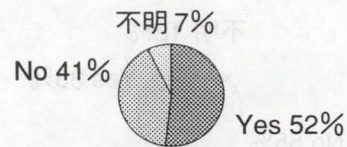
26. 在日韓国人等、外国籍の人の選挙権の獲得には賛成ですか



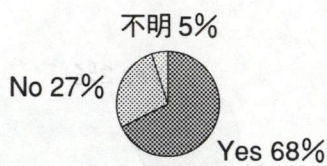
27. 在日韓国人等、外国籍の人に対する雇用  
機会の制限は正当だと思いますか



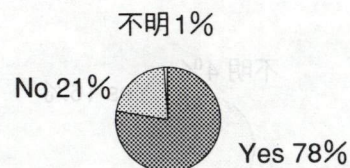
28. 日本は社会にもっと外国人労働者を受け  
入れるべきだと思いますか



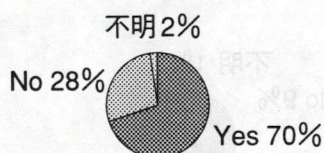
29. 不法外国人労働者に対して医療などの社  
会福祉をするべきだと思いますか



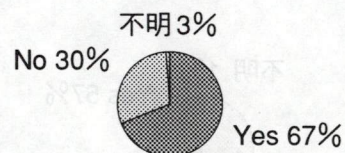
30. 同和という言葉を知っていますか



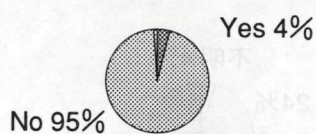
31. 日本の社会では、結婚において、居住地  
区による差別があると思いますか



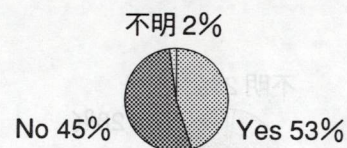
32. 日本の社会では、就職において、居住地  
区による差別があると思いますか



33. あなたは居住地区で人を差別したことが  
ありますか



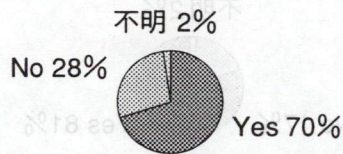
34. アイヌ民族等、日本における民族問題に  
関心がありますか



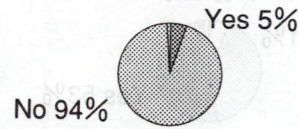


## IV. プログラム報告

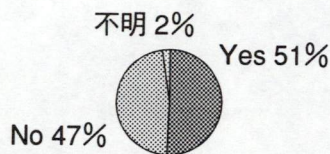
35. 日本の社会では、民族の違いによる差別があると思いますか



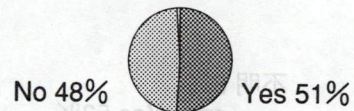
36. あなたは民族の違いによって人を差別したことがありますか



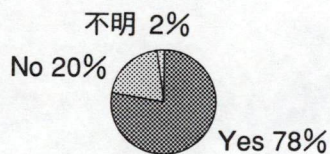
37. いじめにおけるいじめる側を体験したことがありますか



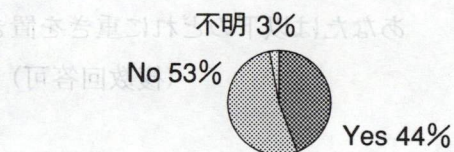
38. いじめにおける苛められる側を体験したことがありますか



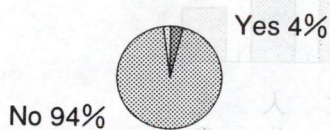
39. 日本の社会では、宗教では、宗教および信仰を持つ人に対する偏見があると思いますか



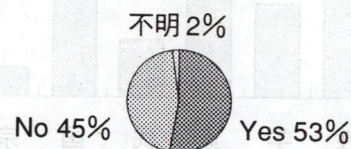
40. あなたは宗教および信仰を持つ人に対する偏見がありますか



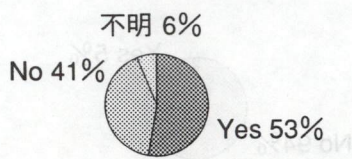
41. あなたは宗教および信仰を持たない人に対する偏見がありますか



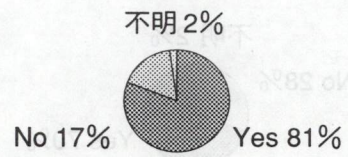
42. あなたは自分の信じている事と異なることを信じている人に対して寛容ですか



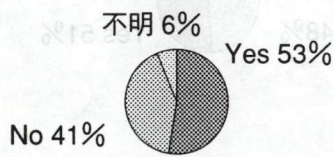
43. 宗教団体に対して、国が法的に関与することに賛成ですか



44. あなたは自分のアイデンティティーについて考えたことがありますか

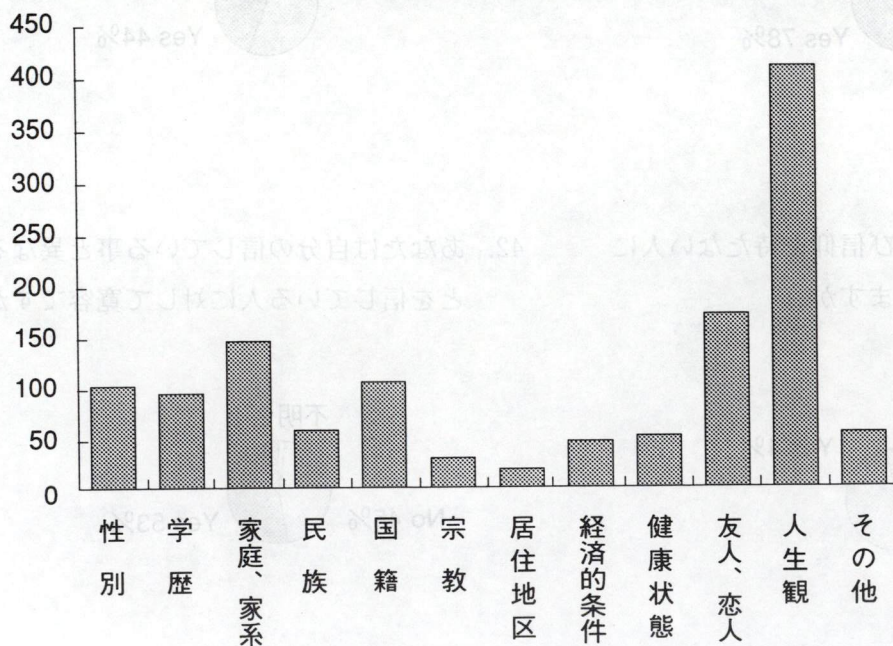


45. あなたはアイデンティティークライシス(自分のアイデンティティーとしていたものが揺らぐこと)を経験したことがありますか

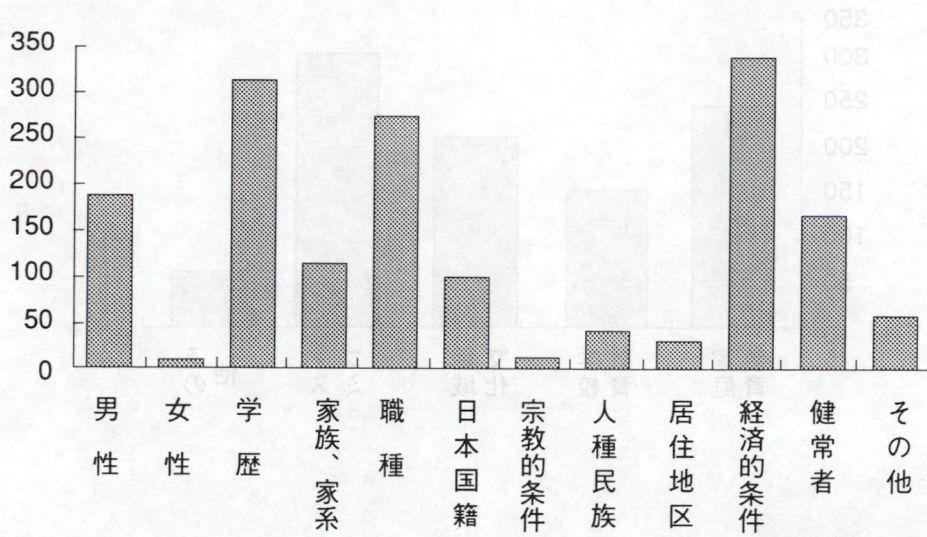


46. あなた自身のアイデンティティーを問われた場合、あなたは以下のどれに重きを置きますか

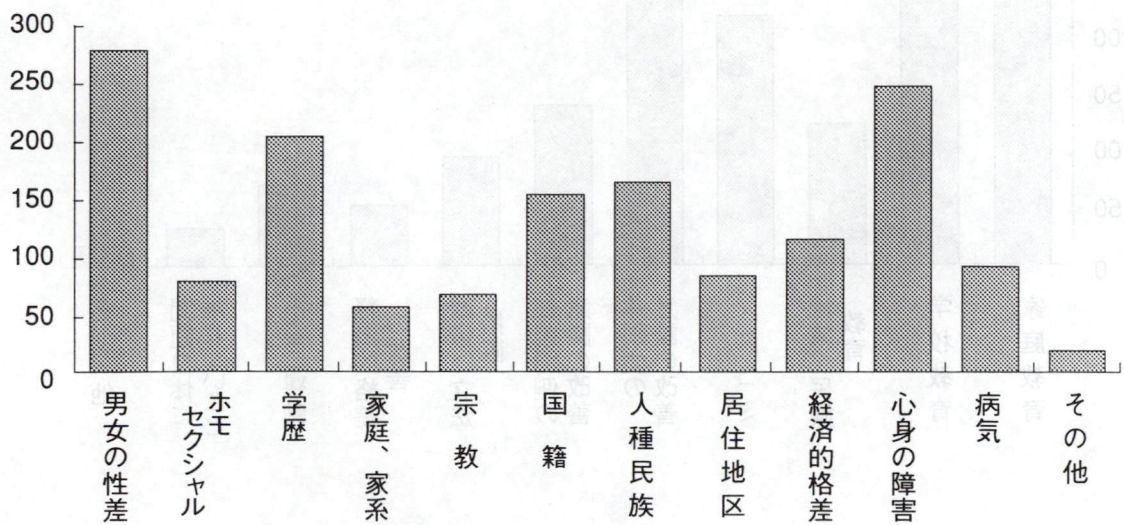
(複数回答可)



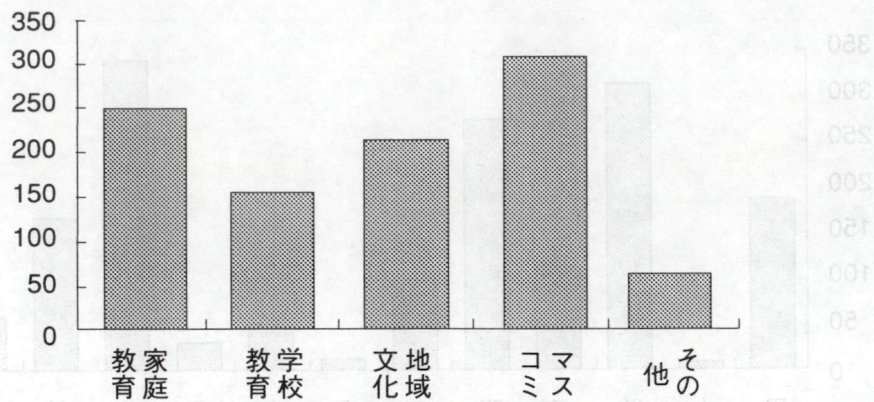
47. 日本の社会のなかで優位に立つ人は、どのような条件を満たす人達だと思いますか



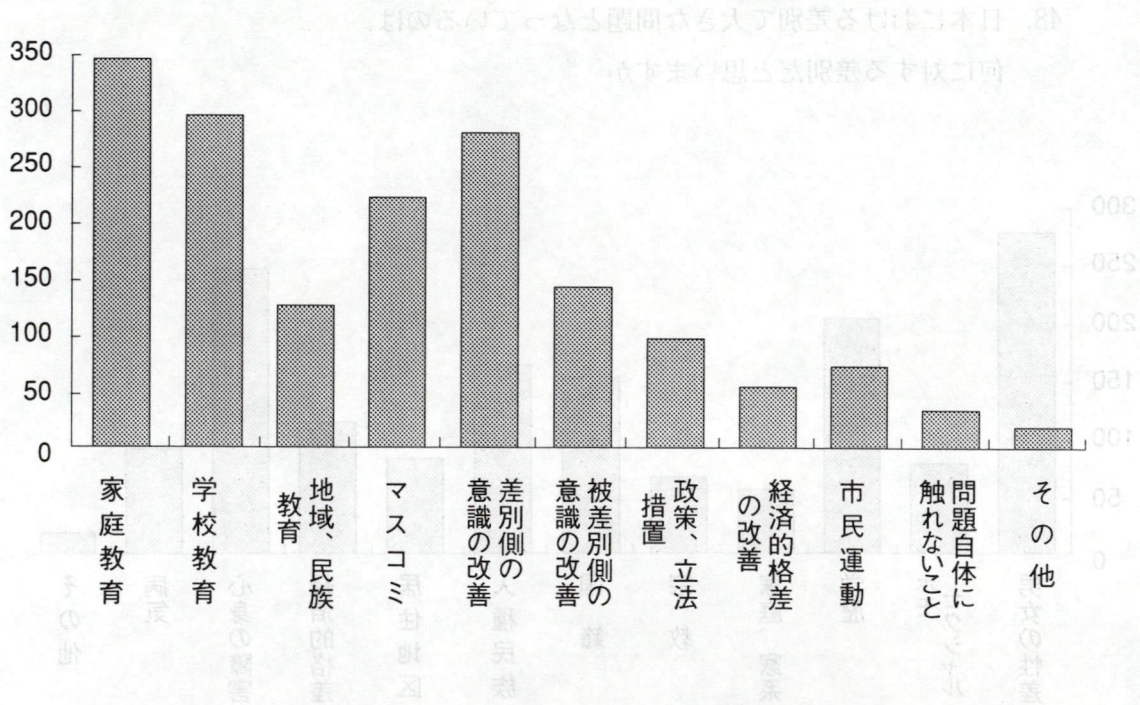
48. 日本における差別で大きな問題となっているのは、何に対する差別だと思いますか



49. 日本における差別と被差別の構造は次のどれによって主に形成されていると思いますか



50. 差別・被差別の問題を解決するためには、どのような方法が有効だと思いますか



## ボランティアDAY

Rachel Brunette

<日時・場所> 8月1日 セントルイス

<企画内容> Herbert Hoover Boys and Girls Club 夏休み運動会に参加

<企画目的> 会議を通じて、机の上の議論に終始することなく、総合テーマの中の、社会に対する「私たちの使命」を実感することを意図した。

<準備段階を振り返る>

ボランティアDAYは、第47回会議(前回の会議)でボランティア活動を経験した両国の実行委員が、「自ら社会に対して働きかけることの大切さと難しさを知った企画であった」と、その意義を認め、今回に継続されたプログラムである。第48回では、アメリカ開催であるため、アメリカ側実行委員が、私たちをボランティアとして受け入れてくれる団体を探すことになった。日本開催の第47回で、「多人数を受け入れる体制ではない」「一日だけでは困る」といった理由からその受け入れ先を探すのに大変な苦労があったのを知る日本側実行委員は、すんなりと78名もの学生を一日のみの条件で歓迎してくれた「アメリカ社会」に、少々驚いた。同時に、ややおおざっぱな言い方だが、ボランティアが根付いているアメリカと、まだまだそうではない日本との差を改めて感じた。

私たち実行委員は、こうした認識の差が本会議でマイナスの方向に現れ、参加者がこの企画から得るものが、“ボランティアをすることがいいことだと分かった”等の、レベルに留まってしまふことを避けたいと考えた。そこで、準備期間中、ボランティアについて考えてもらう機会を多く持った。こう文章にしてしまうと、簡単なことのように思われるかも知れない。しかし、ネット上で(ここ何年か、日米学生会議では、参加者間でメーリングリストを作り、情報交換をしている)ボランティアの意義について「鬭論」をしたり、例年にない頻度で、ボランティア活動のためのフィールド・トリップを企画したのである。ボランティアが身近でないなら、こちらから近づいてみよう、ボランティアを批判するのは自由だけれど、お互い納得する理由を言い合おう。そんな空気があった。準備活動の報告に、こうしたボランティア活動を経験した参加者の声を載せたので、それもぜひ読んでいただきたい。

<企画を振り返っての感想>

私たちは宿舎であるワシントン大学からバスに乗って、会場であるフーパー高校を訪れたのだが、高校周辺地域の緊張した雰囲気、少なからず驚いた。傾きかけた家、鉄格子のある窓、昼間だというのにたむろする成人男性、バスの中の私たちに投げかけられる、鋭く敵対的ともいえる視線。この地域の住人の多くが黒人だという事実を知らされ、「アメリカの現実」を見た思いだった、と後に述べた日本人学生もいた。

しかし、そんな私たちを、会場の子供たちは暖かく無邪気に迎えてくれた。運動会の売店の手伝いやゲームに参加する間に、一日はあっというまに過ぎた。今まで日本人を見たこともないで

あろう子供をおんぶしていたある日本人学生は、こんな声を聞いたという。「僕、今度日本に行きたいな！」

日米間に様々な政治経済問題が横たわる現在、私たち学生に出来ることは限られてもいる。しかし、ボランティアとして互いの国のふところに入り込むこと、そこで束の間でも理解しあえる感動を分かち合うことの意義を、今回学んだように思う。

### 参考) ボランティア フィールド・ワークの感想

村田 知子

先日のボランティアは私の中に、新たな問題意識を生むよい機会になった。

私が訪れた「風の子会」は、在宅障害者(おもに脳性マヒ)の訓練所である。「風の子」とはいうものの会員は皆、成人だった。脳性マヒについてよくは分からないが、人によって障害の程度はまちまちである。知的障害をもつ人もあれば言語や手足のみ不自由な人もある。

11時過ぎ、会員が次々、高浜の実習所に集まる、大半はdoor to doorの送迎サービスを受けているようだ。この日の出席者は10名前後。これに対し、職員5名。ボランティア1名に私たち。

風の子会の1日は朝会で始まる。朝会といっても、誰が訓示をたれるわけでもない。連絡事項の確認をするだけである。この日は、私たちのために、会員の自己紹介があった。正直なところ、私はこれがたまらなく辛かった。障害の重い人は、まず体をまっすぐにできない上に話すこともできない。ゆがめた体のところからか、絞りだすようにして発する言葉は「奇声」になってしまう。必死で何かを伝えようとしているのだが、その姿が、私には痛々しく感じられるのだ。

昼食は、会員、職員、ボランティアと一緒に、おしゃべりをしながら和気霽々とした雰囲気でもいただく。食事には介助を必要とする人もいる。私も隣に座って介助する。1対1であれば、自分も食事をとりながら十分お手伝いできる。しかし、これが人手の足りない日であると、1人で複数の人を介助することになる。こうなると、介助する側もされる側にもイライラがつのり、険悪なムードになるという。「障害者は気分が不安定になりやすい。だから少し構ってもらえなかったりすると、愚痴を言ったり、淋しいと泣いたりする人がでるんです。うちは、ボランティアさんが手薄なんです。今日はよい雰囲気だ。いつも今日みたいに人がいっぱいいいればいい。」会員のひとりである天海さんは言う。

天海さんは27歳。この会の中で一番障害が軽いそうだ。カラオケが好きで、CDの歌詞カードをひたすらパソコンに打ち込んでいる。はじめ、カラオケの話しかしないのに辟易したが、ひとたび風の子会の現状について語り始めると、彼の話は実に明快かつ冷静で、私は聞き入ってしまった。

「天海さん、お仕事はなさらないのですか。」失礼を承知で聞いてみた。「ここが仕事です。」風の子会員には、訓練所に来ると日給1000円がでる。彼はこうしたお金の管理をしている。とはいえ経理職に対する報酬はなく、他の会員同様、日給1000円を受け取るのみである。彼は足が悪いため、外に働きに出るのは困難だという。「それでも、何か家に持ちこめる仕事があるのではないかしら」「いや、頭がついていかない。」

風の子会での仕事を否定する気はない。ただ、彼には役不足な気がしてならない。生き馬の目

を抜く社会人の世界を考えれば、彼の今の生活の場、つまり風の子会は比較にならないくらいのおんぴりと時が流れている。一度ここにどっぷりとつかってしまったら、おそろしくて再び外の世界にでるのを躊躇してしまいそうだ。彼はここから「出られない」のかそれとも「出ない」のか。世間に対する遠慮が彼にはありはしないか。人にはそれぞれの事情があるわけで、何も知らない私が推測でものを言う資格はないが、彼に対し「もどかしさ」を感じたというのが私の率直な感想である。

高校1年の夏、老人ホームを訪れるワークキャンプに参加し、貴重な経験をした。以来、老人問題には常に関心を持ち続けている。地塊将来、誰もが必ず直面する問題であり、避けては通れないと思う。

翌年、同じキャンプで、精神薄弱児の施設を訪れた。ここでの体験も忘れられない。しかし、障害者の問題は依然どこか自分と関係ないところの問題のままであった。というより、無意識のうちに避けたしまっていた感がある。障害者やその家族のことを思うと「背負っているものの違い」をひしひしと感じ、無力感に襲われる。そんな自分が嫌だったからかもしれない。

そんなふうに、問題を遠ざけていた私であったが、自分と同年代の若者や、本来なら働き盛りであるはずの彼らが、風の子会の小さな訓練所で、遠慮がちにコミュニティーをつくっている現状を目のあたりにし、障害者の問題はぐっとせまってきた。

彼らはもっと市民権を得てよいはずである。もっと堂々と生きてほしいと思う。そのために、私は何をしたらよいのか。まずは、こうしてひっそりと生きる人の存在をまわりの仲間知らしめることだろう。そして、それから？ひとりで考えていたら、視野はひろがらない。障害を持つ彼らとじっくり話すべきだろう。

また、近い日に風の子会を訪ねてみようと思う。

### 準備活動を振り返って

#### 黄 莉香

##### ●活動内容

小学校の一角にある、障害を持つ子ども達用の校舎(訓練室とよばれていた)およびその近郊の公園で、学生数人対子ども1のペアを組んでの交流(学生の方が多いのが現状)と、生活面でのケア。具体的には食事を共にする、トイレを手伝う、一緒に遊ぶ、など。

##### \*時間的な流れ

- 11:15 小学校到着。玄関で、靴と靴下を脱ぐ(室内は裸足)
- 11:30 わかたけサークルの人と顔合わせ。ペアになる子ども達のケアの仕方が伝えられる。
- 11:40 お母さんに連れられた子ども達と出会う。(ほとんどの子が車椅子)
- 12:00 子ども達と遊ぶ
- 12:30 お昼ご飯。(たいてい母親の手作り)自分で食べれない子は学生が手伝う。
- 1:10 歯磨き、おトイレ。お弁当箱を洗ってあげる。

- 1 : 30 近くの講演でペアごとに、子どもとあそぶ。遊具で遊べる子もいれば、車椅子に座ってるだけの子もいた。
- 2 : 00 全体で遊ぶ。おにごっこダンス。
- 3 : 00 おやつ。子どもによってはビスケットはミルクで溶いてあげる。
- 4 : 00 親御さんが迎えに来る。見送る。その間室内掃除する学生も。
- 5 : 00 ミーティング。6 : 30くらいまで。

### \*全体の印象

活動終了後に、今回が活動初回の人たちの感想を述べる機会が与えられた。率直に言うてしまうと、一日ぽっきりの交流では、私たち学生会議からの参加者は、子ども達の心をつかむことはできなかったし、何をしたらいいのか、どう関わったらいいのか、わからないことづくめで、不安を多く感じた一日だったのだ。最初に自己紹介がなかったので、周りの学生たちも私たちをお客さん扱いすることもなく、よって、わからないことはこちらから聞かなければ、初めてなのだろうと気を使ってもらうこともなかった。サークル内の内輪のミーティングにも暗黙の了解のうちに参加することになっていて、(私たちに直接関係ないことなのにな)と、いらだちを覚えてしまう人も少なくなかったはずだ。しかし、だからといって同時にこの日の経験が、無駄だったと思った人も少なくなかったという結論には至らない。以上を一口にまとめるならば、その日受けた感想をポジティブに述べたものも、ネガティブに述べたものも、互いに考えさせられる点が多く、日常味わうことのない環境にカルチャーショックを受けた一日だったという事である。

### \*この日私が考えたこと

最近、「ボランティアは自己満足の世界であり、援助をしたいものはすればよいし、援助を望むものを受ければいい。」という意見がネット上(日米学生会議のネット)でよく見られる。「他人の精神世界は自己の理解に及ばないものだから、立ち入ることもでない。」というメールもにく目にする。今日の経験は、私にこうした意見に対する一つの見方を与えてくれたように思う。

### \*ボランティアは自己満足か

私は、この日レオ君という小3の子とペアになった。始めのうち彼は、私を見ていなかった。私の言ってることの半分にも反応していなかった。こっち向いてよと言ってもダメ。話しかけてもダメ。

(あーあ。つまらない。)

私は彼のこういう態度に決して満足しなかったし、かえってフラストレーションはたまりまくりといった感じだった。

彼は私が訪れることを望んだわけでもないし、私もさして土曜の体調のよくない日にこのような活動をするのを、心底願っていたわけではなかった。

こうした活動を途中で投げ出すことなく持続しているサークル、ボランティア団体などに対して、私は彼らの原動力には自己満足以上のなにもかのが存在していると仮定せざるを得ない。あるいは、彼らの自己満足は、活動した直後ではなく、どこか先延ばしにした時間軸の中に存在しているのではないかと思わずにはいられなかった。

活動がそろそろ終わる頃、少しばかりレオ君の性質をわかりかけた私は当初の気持ちとは相反



し、いつのまにか、「もう少し一緒にいたら仲良くなれたかも」という密かな期待の念が生まれてきた。自己満足ここにありか？だとすれば、喜びを現在に求めるか、未来に求めるか。

結局のところ、ボランティアの自己満足はショートケーキのいちごを、最後に食べるか先に食べるかくらいのの違いで、本質的にはメールで議論どおりさして趣味もボランティアも変わらないものなのかもしれない。

しかし、趣味とボランティアの決定的な違いというのは、実は活動そのものの性質にあるのではなく、その後の影響力にあるのだと思う。両者は同じ自己満足という言葉でくくられたとしても、前者が、自己の精神世界での満足感に留まることが多いのに対し、後者は、常に、他者との交わりを積極的に求め、社会や、他者に、何らかの影響を与える欲求につながっている。競馬も、競艇も、競輪も、パズルも、切手集めも、確かに自分を満足させる重要なものにはなり得るけれど、その後、他者への好影響、よりよい社会作りを実現するには至らない。ボランティアは、今日の活動で言うならば、この活動によって、障害を持つ子ども達と共に生活する学生たちの存在を日米の学生が知った。それは今後ボランティアをどう社会や個人々の生き方の中に位置付けるかと考えるきっかけになるだろう。他のボランティアでも、例えば非行少年の悩み事を電話相談で聞いてあげることによって、犯罪を未然に防げるかも知れない。外国人労働者のために、英語以外にも対応できる相談窓口をも受けることで、不法就労が減るかもしれない。そうした、間接的な力強さがあるのだと思う。

自己満足。はっきりそうではないと否定はできないけれど、それ以上の力をもつものだ、というのが渡しの結論だ。

### \* 誰のためのボランティア活動か

障害を持つ子ども達との交流活動の場合、援助の対象は、子ども自身の自立や、社会参加だけではない。今日の活動で、私は改めて今日の活動が自分一人では生活することのできない子ども達をわか子にも「母親、父親の生活時間の確保」に貢献していることを実感した。周知の通り、小学校に上がる頃、肉体的に健康な子ならば、昼間は学校に行き、夕方は友達と遊ぶ。しかし、身体や精神に障害を持つ子供達は、重度の差はあれ、その時間、両親と過ごす時間が圧倒的に多くなる。確かに他人事ではあるのだけれど、私はそうした障害を持つ子の両親にだって、日常をもう少し自由に過ごす時間はあるべきだと思うのだ。「自分の人生なんだから、他人が関与する必要はない。関与してほしいとも思わない。」そう思う人の援助は必要ないと思うけれど、それだけが万人の価値観として、誰もが自分だけで立つべきだとは思われず、結局、私はこれからも、何らかの形で他人に対して行う援助活動は必要なものだと考えていこう。それは、自分自身の生き方でもあるし、偽善的な言い方をすれば、あらゆる人に、いろいろな生活の可能性を広げる機会をもってもらうためである。

### \* 他者の精神世界に入り込もうとすることは無意味か

レオ君と一緒にいると、時間がゆっくりと流れる。

私はそばでただじっとみつめる。歌を歌うレオ君。声は聞こえないけど、彼の頭の中では、曲の歌詞が一定のリズムを持って繰り返されている。

他人の声に反応することは少なくとも、一緒に歌ってよと、手を打って催促してくる。

## 第48回日米学生会議

ほっておかれると、すねるレオ君。

彼は彼の精神世界では、確かに一人で生きている。

しかし一人の生活者として、彼は一人では生きていけない。

彼は、一見何者をも受け付けられないようにふるまっている。

しかし、彼の歌は誰かに教わったものであり、誰かと共に歌うために記憶されたものである。彼は、結局周囲の人に影響を受けて生きている。帰りがけ

「レオ君は一日中げんこつやまの歌ばかりを歌っていました。」とお母さんに報告したところ、「もっと、いろんな歌を知ってるんだけど、誰もがこの歌だと一緒に歌ってくれるものだから、みなさんといるときはこの歌って決めてみたい。」ということだった。

私たちは他者の心を完全に理解する事なんてできない。入り込むことだってできない。

でも、ひとたび出会い、同じ時間を共有し、互いを知ろうと興味を持ったたとたん、お互いは、無関心でいられなくなる。他人ではいられなくなる。

今日町ですれ違った名も知らぬ人に、また明日であったとしても、おはようの挨拶をする気にはなれない。

だけど、今日出会った子ども達になら、何の抵抗もなく手を振りたい、声をかけたいと思うだろう。

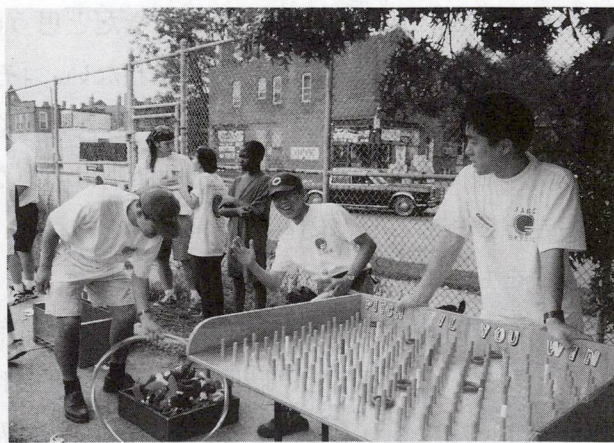
そこに、精神的な部分の歩み寄りが生じるからだ。心と心が、近づいたという実感があるからだ。(目に見えないから「実感」という言葉は適切じゃないか。)

完全なる理解はできないけれど、限りなく近づくことはできるのだ。他人の考え方を自分の都合のようように変えることはできないけれど、一生懸命、影響を与えて、その結果、自分の望むような行為を相手がしてくれることはあり得る。相手を理解しようとすることは決して無意味なんかじゃない。

それが私なりの結論。



ボランティア Day にて



ボランティア Day にて

## 日米関係フォーラム

### 見市 礁

〈日時・場所〉 8月9日 モンタナ州ビリングス ロッキー・マウンテン・カレッジ

〈企画目的〉

現在日米間で引き起こされている問題や日米間の違いに対して、表層にとらわれず問題の根幹を理解し、互いの状況を理解することにより、真の両国における相互理解を目指した。

〈企画内容〉

日本側アメリカ側各々3～4名、合計6～8名で構成されるグループが、政治、経済、文化の分野に分かれ、それぞれが設定したテーマについて事前にリサーチを行い、フォーラム当日に発表を行った。

〈構成〉

午前セッション：政治、経済、文化の分野に分かれてそれぞれの分野の中で4チームのグループがそれぞれの設定したテーマに基づいてそれぞれの分野の中でプレゼンテーションを行う。

午後セッション：3分野それぞれの中で選ばれた代表グループが全参加者の前で同様のプレゼンテーションを行う。

夜セッション：それぞれの分野の者同士で再度、フォーラム当日行われたプレゼンテーション、ディスカッション等について反省会を開く。

〈政治分野〉

#### 1. スモークグループプレゼンテーション

##### (1) The US-Japan Security Treaty ～日米安全保障問題～

日米安全保障条約の締結背景と現在の存在意義とのギャップを指摘し、現実に即した安保再考を求めながらも、立場としては存続を主張(庭瀬祐一郎、慶応大学、ボヴェ麻衣子、早稲田大学、その他)。「安保条約が両国に恩恵をもたらしていることは事実。まずそれを肯定してから細かい点で歩み寄ることが必要」(マリック・ラシッド、コロンビア大学)

##### (2) Differences in Political Systems～政治システム比較～

日本の総理大臣(塩崎彰久、東京大学)とアメリカの大統領(エレノア・クラーク、オハイオ州立大学)にTVレポーターがインタビューする、という設定。当選した理由は何か、という問いに対し総理大臣は「党の協力あってこそ」と答え、総理大臣の実権の弱さを示唆。また、大統領として何をしたいか、という問いに対し「モラルを守る」と答えた大統領だが、実際には強大な権威を握っている、という指摘も興味深かった。

国会によって選出される総理大臣は、国民の人気よりもむしろ政府内の立場を重視するが、大統領は直接選挙によって選出されるため国民の信望が何より大切であるということ、多様性の連

邦国家をまとめるために強大なリーダーシップとカリスマ性が必要不可欠であることを指摘。

「休日に何をするか」という問いに対し、総理大臣は「サッカーをする」と答えたが、これはその程度の直属部下しかいないということを示している。また、失墜した大統領がその理由を「国民のことばかり考えていた」とうそぶいたが、これは「死ぬか犯罪を犯さない限り辞めない」言われる米国の大統領を風刺したものだだった。

日本側・米国側ともにいかに互いの政治システムについて無知であったかを痛感。「まず、根本的なシステムの違いを学び、理解し合うことが第一歩である」(カト・トラップ、ピュージェットサウンド大学)

(3) Partnership between Japan and the US in the United Nations Political Negotiation ～国連における日米のパートナーシップ～

OHPを使い、まず国連の概要や歴史と日米の立場を説明(ロン・クエゾン、カリフォルニア州立大学バークレー校・北澤咲弥花、東京大学)。次に、日本の常任理事国入りについて賛否両意見を提示(原田芳衣、早稲田大学・木村要介、筑波大学)。また、国連の財政危機について、アメリカの支払いが滞っていることなどに触れながら説明(スティーブン・マンガー、ノースカロライナ州立大学・大沢枝里子、筑波大学)。

(4) How People Response to Social Conflict ～社会問題と国民～

I. 国籍、II. 差別、III. 労働の3つの視点から、日米の社会問題を劇にして演じた。I. では、在日中国人の家族の食卓にて、「なぜわたしは日本人ではないの?」と泣く子供(黄莉香、慶応大学)に対し、「祖国に誇りを持ちなさい」と教えることができず悩む両親(ケビン・サーリ、カンザス大学・山形亜紀子、ウィリアムズ大学)の姿、そして逆に、米国に生まれればアメリカ人となることのできる国籍取得制度を有しながらも民族同士の軋轢が耐えない米国の現状を表現した。II. では、在日外国人がどこの国民でもないような感覚を味わっていることを指摘、マイノリティへの寛容と制度変革が必要であるとした。また、米国では、不法移民・就労問題について、偽造のグリーンカードなどを使ってアメリカの吸引力に引き寄せられてやってくる中南米の家族の必死な姿を描いた。忘れてはならない指摘が、「自らの意志とは無関係にやってきた唯一野存在が、アフリカン・アメリカンである」(カーヤ・コブ、ハワード大学) III. では、パキスタンから偽造ビザで日本にやってきたパキスタンの若者の、劣悪な労働条件に苦しむ姿を描いた。

## 2. ディスカッション

日米両国、または両国間に存在するさまざまな問題点を学んだ上での政治グループのディスカッションは、本音が飛び交う白熱したものとなった。カール・ワトソン(コロンビア大学)、庭瀬祐一郎(慶応大学)の二人が議長を務めた。ここでは、ダイアログ形式でディスカッションの内容を記録しておくことにする。

〈「实际的解決策」は現実的か?〉

北澤：今日のフォーラムでは、米国の差異が多く指摘された。しかし、共通点には焦点が当たらなかった。このディスカッションでは、「比較」ととどまらず、そこから派生に相互関係について、实际的解決策を見つけたい。

カール：もはや、差異に気付くだけでは不十分。

スティーブン：お互いに過去の過ちに対して謝罪を求めるのももう止めよう。

山形：それはそうだが、過去に何が起こったかを知ることはやはりもっとも重要。忘却を許してはならない。

大沢：「实际的解決策」というが、それは理想主義に過ぎないのでは。

ケビン：米国人には今でも、マッカーサーがそうであったように日本を植民地であるように考える感覚が残っている。だから、日本の自動車業界が我々を凌ぐようになると必要以上に動揺したりするのだ。昨年度の会議にも参加したが、日本文化に触れ、日本の歴史を知り、日本に対して全く新しい感情、日本を愛する心が生まれた。家族が原爆を正当化するのをきいて、以前ならば何とも思わなかったのに彼らに怒りの感情を抱くようになってしまった。

カール：原爆は絶対的に過ちであったと思うが、それでもやはり、人間というものは実際に自分の手を汚さずして心から謝罪することはできないのではないだろうか。だからこそ、責任の所在にばかり言及するのはもうやめよう。

庭瀬：そうだ。「今」、私たちに求められている解決策をさがすことが最も生産的だ。今を生きるのは私たちがなのだから。

北澤：实际的解決策と言ったのは、なにも政策を打ち出そう、とか、明文化されたルールを制定しよう、と言う意味ではない。差異ばかりではなくもっと「相互関係」に焦点を当てようと言うことだ。

井ノ口明子(オクシデンタル大学)：責任の言及ではなく、今私たちが生きる冷戦後の世界をきちんと客観視すること。そして、善悪の区別など明白なのだから、あとはこうした機会に本音で話し合うことだ。

西垣雄一郎(東京外国語大学)：アウシュビッツを訪れたときに出会ったユダヤ人の男性が、「過去を忘れてはならないが、固執ばかりしているのはアンハッピーだ」と言った言葉が忘れられない。

原田：情報、知識というものは、伝達される過程で個人の主観によって多分に変化してゆくものであること、そして主観とは人それぞれ全く異なるものであることも忘れてはならない。この日米学生会議では、さまざまな民族的背景や教育をもつ学生が集まり、そこからくるパーセプション・ギャップを理解した上で話し合いを持てる数少ない場であると思う。

〈歴史教育について〉

アレックス・ミルキー(ギルフォード大学)：文化グループの、原爆についてのアンケート結果発表で、投下の日を答えられたアメリカ人が少なかったという指摘について、アメリカ人の多くは「知識がない」ことが「認識が薄い」と解釈されたと感じ、侮辱されたような気持ちになったらしい。その瞬間、今まで日米の皆が国境を感じずにいたムードが崩れ、反発の気持ちが部屋に生まれた。しかし、皆に言いたい。「何か決して乗り越えられない悪いもの」を発見してしまったような気持ちになってはならない。(1)ギャップが存在することを知る、そしてそのあとに、(2)それを埋めるためにともに協力しあう、そういうチャンスが与えられたのだと思うべきだ。

カール：日付を暗記させること自体が、アメリカでは考えられない教育方法であり、そこにも

## 第48回日米学生会議

パーセプション・ギャップが発見できる。

カイ：本当の歴史教育とは、歴史を作るのも語るのも人間であり、それぞれの感情の上に歴史が伝えられていくと言うことを認識し、常に双方の視点があること、それらは往々にして全く異なる立場をとることを、まず教えることなのではないだろうか。

カーヤ：わたしは黒人であり、アメリカという国が、いかにその明るい部分のみを鼓舞しようとする国家であるか、以下にその暗い部分に対しては目をつぶっているかをイヤというほど見てきた。アメリカの歴史教育も問題が山積みだ。

山形：いつか友だちにもらった手紙に、「子供の心で読んでね。そして、批判の心でも読んでね」と書いてあった意味が今、分かった。ひとつの事実に対しても、さまざまな見方が存在しうることを伝えようとしていてくれたのだ。誤解を避けるために。

黄：そして、何かについて理解することは、同時にそれ以外の分野の知識を必要とする。

庭瀬：このフォーラムでも、政治・文化・経済に分かれたが実は密接に関連している。

北澤：まずはじめに越えるべき壁は、「無知」である。今日こうしてさまざまな事実を学んだのだから、その次の段階に進むことができるのだと思う。

原田：ステレオタイプ化は危険。個人の視点を尊重しよう。

〈「個人」の理解、その先〉

アレックス：今日のフォーラムは、われわれの差異を提示したのではなく、これから共に働いてゆく材料を提供してくれたのだと考えよう。その過程には困難も伴うだろうがそれだけが世界を動かすのだから。

ロン：私はフィリピン系アメリカ人だから、この会議への参加を親戚に言ったら「日米より米比を学んでほしい」と言われた。でも、そうした国家のレベルでのみ考える時代はもう終わった。個人から変化が起こる。

エレノア：日本にホームステイしたとき、太平洋を隔てた国の人々とこれほどまでに親しく心を通わせることができることに感動した。「英語は世界の公用語なのになぜわざわざ日本語を学ぶのか？」と聞かれることもある、でも、個人のレベルで人々とコミュニケーションする手段として日本語を学ぶことは私にとって重要。

スティーブン：グループとして人を見るのはもう止めよう。アメリカ人、日本人、そうしたグループ分けではとうてい収まらない個々人の素晴らしい特性が皆にある。魚を食べて育とうと、コーンフレークで育とうとそんな違いは浅薄だ。

原田：それはそうだが、個人的に親しくなることが政治的、国家レベルでの関係を直接改善するとは思えない。

カール：でも、はじめの一步はいつも個人間の関係である。今日学んだことを、ここで終わりにするのではなくそれぞれのコミュニティに持ち帰って生かそう。普遍の人間性が、最後にはステレオタイプを超えることを実証してゆこう。

庭瀬：違うもの同士の衝突によって新しくよりよいもの生み出せると信じて、その衝突への恐れをまず消し去ることから始めよう。

### 3. 私たとに課された使命

両国の間に横たわる制度的・文化的・精神的差異を、様々な形のプレゼンテーションによって見せつけられたあとのディスカッションは、時には感情的になりつつも全員がひとつになって誤解やパーセプション・ギャップを乗り越えようとする熱意にあふれていた。日米安全保障体制に対する認識、政治システム、国連への貢献、社会問題、すべてが根本的に異なっているような気持ちになり、「結局、心から理解し合うことなど無理なのでは」と挫けそうになる一方で、この日まで寝食を共にし、リサーチを共に行ってきた仲間との結束を思うと到底締めるべきではないように思えた。「差異を並べ立てたり、きれいごとを言うだけではなく、実際的な解決策を」との願いは誰もが持ってはいたが理想論に過ぎないとの指摘もまた一理あった。しかし、無知を乗り越えるべく知識を身につけること、そして、それぞれの知識にも歴史的に培われた主観が加わっていることも認識し、自らの歴史観を構築すること、それが第一歩であり偉大なステップであることを全員が認めることができた。そして、衝突を恐れずにステレオタイプによる誤解を乗り越えてゆく決心に、日米学生の心はひとつになった。

「相互理解をすすめよう」こうした結論は、どこかで聞いたことのある有り触れたものかもしれない。学生時代というモラトリアムにあるからこそ平気で口にできる理想論だという批判は当然あるであろう。(実際、私たちの中でもそうした疑念は残っている。)学生の提言が社会を動かし、政治を変える時代はもう終わったのかもしれない。しかし、少なくともこの日のディスカッションは、理想論に逃げようとする消極的な姿勢で為されたのではなかった。全員が、明白な差異や根深い誤解を目の当たりにしながら、それでも自ら培った個人間の信頼関係を信じ、前向きに力強く「共に立ち向かうこと」を謳った。そこには、「アメリカ人」「日本人」の区別はなかった。あらゆる浅薄な論理やステレオタイプから生じた誤解に惑わされず、自らの価値観を築こうとする決意だけがあった。

(経済分野)

### 1. Internet and Business ～インターネットとビジネスの結びつき～

ビジネス、ライフスタイル等の面で様々な可能性の叫ばれているインターネットについて日米の比較、将来性について発表した。まず、現時点での日米両国のパソコン、ワークステーション、ホストコンピュータなどのインターネットに接続している通信インフラストラクチャーの普及がどれくらい進んでいるかについて比較した。また、インターネット上での新しい決済手段として商業的利用の期待が高まっているサイバーキャッシュについて、その実用例が示された。そしてインターネットの企業組織内でのコミュニケーションツールとしての可能性について日米学生会議での活用を基にして探っていった。

### 2. Difference of Market Structure ～日米の財市場の構造の違い～

日米の貿易不均衡の構造について日米の財市場の違いという視点から原因を探った。日米の市場の大きさの違いが各国企業の海外進出姿勢に違いをもたらした点、日米の行政システムや流通機構の違いが互いの国への企業進出度に違いをもたらした点、について指摘。そして、日米の国民の消費性向の違いが貿易不均衡の一端となっている点についても取り上げた。日米企業の接客

態度の違いについても発表を行った。

### 3. Banking Deregulation ～銀行の規制緩和～

アメリカ金融業界の規制緩和を手本に日本の金融業界の可能性を探った。まず、近年日本で多発した金融機関の破綻とその背景に焦点を当てた。高度経済成長期に日本独自のメインバンクシステムの下で銀行と企業の特徴的な関係が築かれてきたが、今日引き起こされた欠陥として大蔵省と金融機関の不透明な関係、護送船団方式の中で育った各金融機関のリスク管理の甘さ、会計情報の開示システムの不十分さが指摘された。そして、金融機関の不良債権処理の過程で金融機関の大型合併、淘汰や、アメリカでも起こったような機能の特化(例えば中小金融機関のリテールへの特化)など、金融システムの構造変化がさらに続くのではないかと言及した。

### 4. US-Japan Trade Capital Friction ～日米貿易摩擦～

日米貿易摩擦の諸原因をマクロ的な視点から解説した。日本側は日本市場の貿易障壁の低さを関税率の低さなどを例にあげて指摘。また、マクロ経済的な視点から貿易黒字そのものを問題視すべきでないことを強調した。

(文化)

#### 1. Commercial of U.S. and Japan ～テレビコマーシャルに見る日本とアメリカ～

テレビCMに見る日米の現代文化を探った。両国のテレビCMの規制に基づいたCM(アルコール飲料やタバコCMの有無及びその表現法。比較CMの手法など)、CMに描かれる男女の役割の違い(薬のCMではアメリカは男性が女性をいたわっているものが多かったか日本は逆パターンが多い)、ストレス解消のための商品(アメリカはガム、日本はドリンク剤)とそこに描かれるビジネスピープルの様子、人種の多様性、ステレオタイプなど、様々なポイントを挙げて比較した。僅か数十秒の世界から見えてくるものは予想以上に多く、身近でありながら普段とは異なる視点で互いを捉えることが出来た。

#### 2. Children's Capital Role ～子供の役割～

子供に関わる問題、特に教育と犯罪が日本とアメリカでどのような現状にあるかを比較し考察を加えた。

アメリカの教育：独自の考え方、事実に基づいた知識、権威に対する尊敬心 INDIVIDUALITY (個性)

日本の教育：共同作業、協調性、社交性、「がんばる」「甘え」 EQUALITY(平等)

アメリカの少年犯罪：殺人・窃盗の件数がほぼ一定の数字を保つ。犯罪者の年齢ピークは15歳から25歳。犯罪の原因は年齢、家族構成、家族の抱える問題(社会的・経済的)、居住区域、Parental Responsibility Laws。

日本の少年犯罪：性格の二面性。違法性を逃れる狡賢さ。集団によるいじめ、万引き、十代の売春(援助交際)、麻薬



### 3. Post War Education ～日米の戦後教育～

戦後50年を過ぎた今、日本とアメリカの歴史の教科書は、第二次世界対戦(特に太平洋戦争)をどのように記述しているのか、高校の歴史の教科書を比較検討した。アメリカの教科書は、真珠湾攻撃の記述が詳細であるのに対し、日本は真珠湾攻撃から戦況、原爆そして終戦までの過程が淡々と綴られており、それはまるで暗記のための事実の羅列のようであった。また、日米の学生を対象に行ったアンケートでは、原爆の悲惨さを訴える日本人学生、真珠湾攻撃の残虐さを訴えるアメリカ人学生、と、両国の学生とも被害者意識は強かったが、戦時中の加害者責任に話が及ぶと、認識の甘さが伺えた。

### 4. Feminism ～日米のフェミニズム～

アメリカのフェミニズム史、日本におけるフェミニズムに関わる問題(森山官房長官の土俵入り拒絶、宇野元総理辞任問題、セクシャルハラスメント批判に対する加害者からの逆襲、女性言語の変化など)、フェミニズムと文化の問題、美人コンテストの賛否など、多角的な視点からの発表が行われた。

\*文化のグループでは、政治・経済以外は何でも扱えたが、一つの決議を出せないというデメリットがあった。しかし、一つの項目の下に日米両国で異なった文化的アプローチがあることを理解したことで、そこから逆に見いだされた共通点も多かったのではないだろうか。「日米関係」というと、やはり政治・経済問題がすぐ頭に浮かぶが、そのような問題は、お互いの文化的背景を認識し、理解し合ってこそ解決の糸口を見いだせるのではないだろうか。

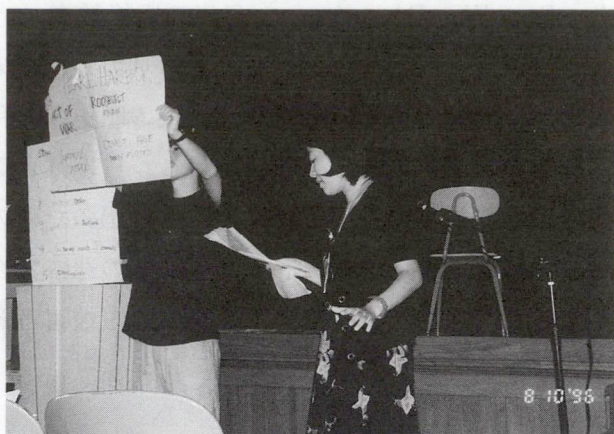
#### まとめ

日米関係フォーラムにおいては、参加者一人一人が各グループの中で主体的にリサーチ、プレゼンテーションに取り組めた点が、非常に意義が大きかったのではないだろうか。それぞれのテーマに対して日米の学生が互いの意見を闘わせ、協同して取り組む。こうした中からこそ相手の違いをしっかりと受けとめ、互いの長所を上手に引き出す姿勢が見に付いていくのではないかと思う。それぞれのグループがそれぞれの視点からプレゼンテーションを試みており、聞く側にとっても新鮮なものであった。

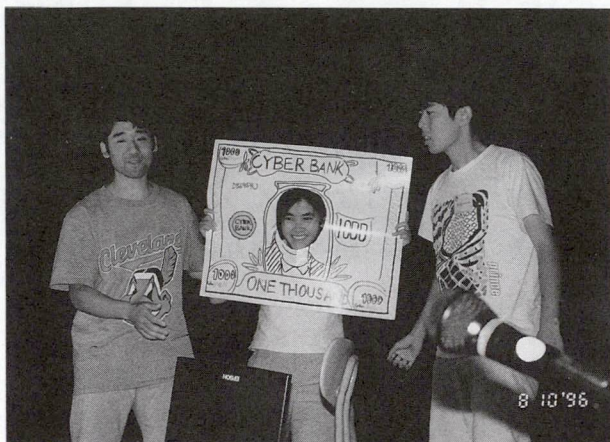
また、唯一の問題を指摘するならば、どのグループも現状の把握に留まり、何らかの提言が出来るかどうかは今後の課題である。



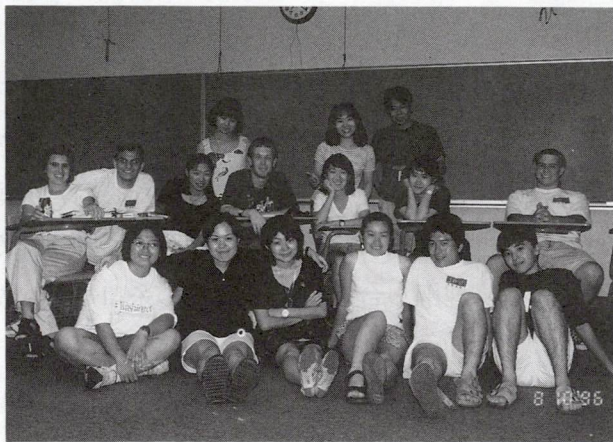
モンタナでのレセプション・パーティ



学生へのアンケートに基づいた発表：日米関係フォーラムにて



サイバーキャッシュの未来は？：日米関係フォーラムにて



日米関係フォーラムの1コマ

## ホームステイ

村田 知子

(8月10日～12日)

昨年好評だったホームステイを今年も実施することになった。

ホームステイ先は主に、ピリングス市内およびその郊外であったが、ホストファミリーを見つけるのが予想以上に困難をきわめ、米国側実行委員が本会議開始後も電話で交渉を続けた。地元テレビニュースでも呼びかけ、参加者全員の受入先が決まったのは、前日9日の夜。2人から多い所では5人以上の組で各家庭を訪れた。

ロッキー山脈のふもと、大自然のなかでの人々の暮らしぶりに触れることは、驚きの連続だった。市街地を離れ、砂利道を組め間に揺られること小一時間、こんなところに？と思うような山奥にぽつんと家がたっている。「土地はただ同然だったけど、電気も、道路も自分で引かなければならなかったからねえ…」そうって笑うホストファミリーの夫婦に「なぜあえてここを？」と問えば、一言「田舎が好きだから」。

理解しがたいと思ったが、夕食後、心地よい風を受けながら川べりまでドライブを楽しみ、野原を駆け抜ける鹿の親子を見たり、裏庭にごろんとねころんで、次々に飛ぶ流れ星を数えていたら、少し彼らの考え方が分かった気がした。

週明け再び集まった参加者達は、まだ興奮さめやらぬ表情で、それぞれに楽しい体験を披露しあった。同時に、もう何年も離れていたかのように、互いに再会を喜び合い、JASCの結束をあらためて認識するのだった。

会議中は、外部との交流がほとんどない。とかく緊張感を無くしがちな会議中盤、76人の大所帯を離れ、温かい家庭で週末をすごしたことで、再び新鮮な気持ちで会議後半に臨むことが出来たように思う。

この企画実現にむけて東奔西走してくれた米国側実行委員に感謝している。



ピリングスのフェスティバルにて：ホームステイ

## 環太平洋フォーラム

原田 芳衣

日時：8月17日

場所：アメリカン大学

講師：Ms. Ronda Bresnick Senior Liaison Officer, Asian Development Bank

小池洋次氏 日本経済新聞社ワシントン支局長

Ms. Serena Wong First Secretary, Embassy of Singapore

### ◆Time Table◆

10:00~12:00 第一部学生によるプレゼンテーションと講師によるパネルディスカッション

13:00~16:00 第二部小グループによるディスカッション

### ◆企画の趣旨◆

冷戦の終結を期に、EUに始まる世界的なブロック化の動きが一段と促進されつつある。その中で、日米を包括するアジア・環太平洋地域は世界の貿易量の7割以上を占める巨大な貿易圏である一方で、地域を構成する国々の政治・経済事情は多種多様であり、協力関係の構築には他の地域以上に繊細な手段が要求される。未だ手探りの状態で進められる環太平洋ブロック形成のプロセスにおいて、数少ない先進国である日米のウェイトは大きい。

多くのアジア諸国が現在開発途上で急速な経済発展を始めているのに対し、日米は既に世界最大の経済大国であり、これらの国々をリードし地域において指導的な役割を果たしていくことが期待されている。安全保障面においても日米安全保障条約を柱とする日米の軍事協力関係は、経済的発展の基盤となる地域の安定に大きな影響を与えるものであり、現在では二国間を超え、地域全体で考察すべき問題へと変化しつつある。

当フォーラムは、第47回日米学生会議で開催されたAPEC DAYを引き継いだ形の企画であると共に、第48回日米学生会議総合テーマである「Accepting Personal Responsibility to Strengthen Our Global Partnership ~日米から世界へ：今、問われる私たちの使命」に基づき、環太平洋地域における日米のあり方を模索することにより、会議の集大成として両国の「Global Partnership」とは何か、という問いに対するひとつの解答を描き出すことを目的とした。さらに会議全体で唯一の公開企画であり、環太平洋地域の諸国から集まった外部参加者とともに上述した問題を論議することにより、未完成ながらも今後世界の中心的動力となっていくであろう環太平洋ブロックに対する共通のビジョンの提示と、その構築に向けての前進を図っていくことが望まれる。

### ◆当日の企画の内容◆

当フォーラムは第48回日米学生会議参加者78名と、会部参加者約20名とによる公開企画の形式で開催された。

### ■第一部：学生によるプレゼンテーションと講師によるパネルディスカッション

午前のセッションでは、日米学生会議参加者有志数名の協力による、Security, Business, Human Rightsの3つのテーマについての学生プレゼンテーション、そしてそれに基づく講師のパネルディスカッションを行った。

#### 〈SECURITYグループ〉

安全保障に関するプレゼンテーションでは、アジア・環太平洋地域におけるアメリカの軍事的プレゼンスをテーマに、アメリカ、日本、アジア諸国それぞれの立場から問題を検証した。二国間条約を軸に、環太平洋地域における軍事的影響力を保持しようとするアメリカと、その強力な影響力に懸念し、牽制するアジア諸国との間で生じる不協和音や、その中で日米安保をめぐる様々な国内問題を抱えつつもアメリカよりの立場を示す日本の意見をそれぞれ参加者の学生が代弁する形で発表した。

#### 〈ECONOMYグループ〉

いずれも急スピードでの経済成長を続けているアジア諸国の中で、先に先進諸国からの注目を集めているのは、人口、領土、資源、全てにおいて強大な中国である。経済グループでは、日米それぞれの投資を中心とした中国への経済的関心と、そのアプローチの方法の違いを検証した。

#### 〈HUMAN RIGHTSグループ〉

アジア諸国と欧米諸国の価値観の違いが最も顕著に表れた問題のひとつに、人権が挙げられる。とりわけ近年ではアメリカをはじめとする欧米諸国が経済的援助を人権問題と関連させて取り扱うことに対し、アジア諸国からの激しい非難を浴びている。グループプレゼンテーションでは、シンガポールでの事例などを示し、元来西洋の産物である「人権」という概念を東洋的な価値観の中で普及させていくことの困難さや、欧米諸国からの人権思想の押しつけの弊害について述べ、アジア的な価値観への理解を深めることを今後の課題として提示した。

### ■第二部：小グループによるディスカッション

昼食後の午後のセッションでは、外部からの参加者約20名を加え、Security, Economy, Environment, Human Rights, Cultureの5つのグループに分かれてのディスカッションを行った。

#### 〈SECURITYグループ〉

議論の焦点を、アメリカのアジアにおける軍事的役割と、強大化する中国の脅威の2つのテーマに絞った。環太平洋地域の安定のために、アメリカ軍の存在が現実的などのような役割を果たしてきたのか、また果たしうるのか、それぞれの国の視点から考察した。議論の中では、各々の「軍事」そのものに対する捉え方の違いも浮き彫りにされ、個々の国内での温度差生む一要因として認識された。中国については、台湾の独立問題や、スプラトリー諸島問題を切り口に各々の意見交換を行った。

#### 〈ECONOMYグループ〉

APECでは、ボゴール宣言において2020年までに環太平洋地域における全ての関税障壁を取り払うことを目標として掲げた。しかし、一足飛びの自由化をめざすアメリカと、参加国それぞれの多種多様な事情に柔軟に対応すべく段階を踏んだ強力関係の構築を訴えるアジア諸国との確執の中、自由化へ至るまでの具体的なプランは未だ見えてこない。アジア市場の発展に伴い、今後環太平洋地域ばかりでなく、世界経済に大きな影響力をもっていくことになるであろうAPECへの取り組み方は、日米両国に共通する大きな課題である。ディスカッションでは自由化プロセスについてのそれぞれの考えや、期限を決めて進めることの有効性などについて話し合った。

〈ENVIRONMENTグループ〉

アジア諸国の急速な経済発展に附随して、開発にともなう環境破壊が近年深刻な問題として取り上げられている。環境のディスカッショングループでは、エネルギーと開発という2つの視点から、発展途上国において先進諸国による経済的融資や援助の結果引き起こされる環境破壊及びそれに関連する諸問題の解決策を考えた。具体的には経済援助のための共同の国際機関の創設、国際的融資における利子の引き下げや、環境保護水準の設定と母国側の制裁措置の設置、リサイクル産業など投資の対象を特定したプログラム援助の実行などが提案された。

〈HUMAN RIGHTSグループ〉

グループディスカッションでも引き続き人権問題を扱った。西洋的な視点のみに偏ることのないよう、中国の一人っ子政策をテーマにとり、中国側、欧米側にわかれてディベート形式での議論を行い、問題への理解を深めた。人権の普遍性が語られる一方で、社会安定を目的とした一定の人権制約の政策的必要性や、人権の一環ともとれる主権の不可侵制などのポイントが挙げられ、後半ではそれらの視点をもとに更なる意見交換を進めた。特に人命に関するような重大な人権抑圧に対して、内政へどの程度の干渉が許されるのか、という点について話し合われ、そのようなケースでは各国の主権を尊重しつつもある程度の介入は必要とする見解が多かった。

〈CULTUREグループ〉

政治・経済問題におけるアジア諸国とアメリカ、日本の不協和音の前提となっているのは、互いの文化に対する知識とその違いに対する認識の欠如である。文化のグループでは、それぞれの国の言語や教育、さらには映画や文学などの身近な市民文化をリサーチ、紹介し、メディアからはあまり知り得ないアジア諸国の姿を探った。ディスカッションを通して、アジア諸国と欧米諸国の基本的な情報量のギャップを強く認識し、留学の奨励や文化事業交流による是正の必要性などが提案された。

ディスカッション終了後は、第47回日米学生会議で創設されたAPEC NETホームページのプレゼンテーションと、各参加者が今後も議論と意見交換の場を持ち続けられるよう、環太平洋地域に関連するニュースグループの紹介を行った。

### ◆結果と感想◆

「環太平洋」という直接の日米問題から離れたところがテーマをとることにより、「日本」と「アメリカ」という枠組みから「日米」へと視点を移行することが出来た。互いの違いへの認識を積み重ねてきたそれまで1ヵ月の議論から更に前進して、今度はより多くの共通点を発見し、各参加

## IV. プログラム報告

者が日米のより強固なパートナーシップの可能性と必要性を見いだしたことと思う。

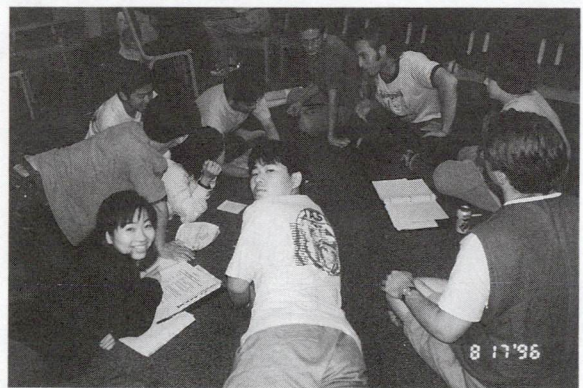
また、特に日本側参加者にとってはリサーチや議論を通してアジア的価値観と欧米的価値観の中間に立ち、日本の微妙な立場と独自性を改めて感じる場面も多く、自らの国を客観視する機会に恵まれた。

今後この企画は、昨年に引き続き日米学生会議ホームページ、APEC NETの中でこの場に参加できなかった学生達の間にも紹介され、幅広く意見を交換しあう機会を提供していく。また、来年度日本で開催される第49回日米学生会議では、環太平洋地域における日米の役割を会議のメインテーマとして掲げており、本年度の当企画での成長が何らかの形で生かされていくことを期待したい。

最後にAmerican Universityの皆様をはじめとする、この企画を実現させるためにご尽力下さった全ての方々、及び多忙なスケジュール中、貴重なお時間を割いておいでいただいた講師の方々に、この場を借りて深くお礼を申し上げたい。



環太平洋フォーラムの講師の方々：  
左より Ms. Ronda Bresnick, Mr. Hirotsugu Koike, Ms. Serena Wong



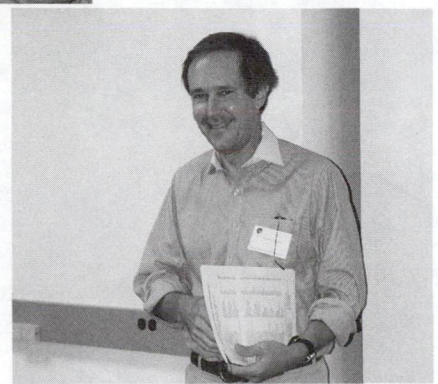
環太平洋フォーラムに向け、話し合いは続く



グループディスカッション



グループディスカッション



特別ゲスト、ジャーナリストのジェイムズ・ファロー氏





## 文化と芸術 (Art, Culture and Communication)

テーマ：事象の深層を探る

目的：

多様化された近現代の文化現象、社会問題、時代性、付随する諸問題を分析し、その深層にある人間文化の本質を考察する。事物の本質を見極められる「知」の探究を目指し、フィールドトリップやグループワークを通じて体験的にも文化の相互理解をはかる。

メンバーと論文タイトル：(\*印はコーディネーター)

湧永 裕子*	"Structural Understanding of Modern Japanese Literature : The Search for the Self and Harmony"
神谷 説子	"So Many Changes, So Little Time:A glance at Our Communication"
森下 博文	"The Significance of Artistic Creation : In Relation to Art Therapy"
川瀬 淳一	"The Communicative Aspect of Music and Language"
Kevin Saari*	"Basic Maintenance : Acting Training and Cultural Tradition"
John Grimaldi	"The American Self and Personal Responsibility in American Literature"
Emma Chanlett-Avery	"Japanese Women's Language : Re-defining the structure"
Christopher Ducret	"Japan Through Western Eyes"

議論内容：

我々、文化と芸術テーブルは、文化という事象の本質を探るべく、以下のような様々な視点からアプローチした。

神谷は、アメリカの友達とのコミュニケーションが、遠距離電話、FAX、E-mailと変わっていったことを例にとり、コミュニケーション手段の変化が文化に与える影響について発表した。特に、E-mailによるコミュニケーションの特徴を詳しく分析し、その不完全さに言及した。ペーパーの題名にもあるように、マスメディアは、今変化の最中にあり、短時間で、大金変化が見られた分野である。

Chrisは、西洋によって作られた日本に対するイメージについて述べた。戦前から、西洋的な価値観に支配され、その中で独自の日本的価値観を作ろうとして来た日本であったが、彼は、あるイメージの善悪を判断しようとしたのではなく、そのイメージが、我々の生活全般や社会や二国間関係に与える影響を考察しようとした。また、日本に対する西洋のイメージを観察することによって、西洋が自分達の文化をどのように捉えていたのかをも垣間見ることが出来るというのが、彼の意見である。

湧永は、日本の近代文学の歴史の中で繰り広げられてきた、自我(Self)やアイデンティティと

いう概念の変化について述べた。芥川龍之介等に見られる、自己の内面世界と外部の社会とのギャップによる自殺から、志賀直哉のように、個人的アイデンティティから、異なる価値観をも含んだ調和的アイデンティティへと、日本は、近代化の波の中で、文化的価値観をも大きく変えてきた。負の側面として日本の帝国主義思想を取り上げたのが興味深い。

Johnは、アメリカ文学に見られるアメリカ的自我の概念について、特に、Self-responsibleということの意味に焦点を当てた。48回会議の総合テーマが、“Accepting Personal Responsibility ~”であったため、自分に責任を負うとはどういうことなのか、改めて考えさせられた。エマソンが提唱したMan Thinkingという考え方(利己的な自我に陥るのではなく、周りの環境との調和の上に成り立つ自然との共生こそが求められるという考え方)を紹介し、自然観察眼の鋭いホイットマンの詩を朗読した。

川瀬は、音楽に意思疎通は可能か、という問いに答えるべく、言語との比較を通して、音楽のコミュニケーション的側面について発表した。我々の意思疎通の75%は、non-verbalであるというデータを根拠にして、音楽にUniversalな意味での意思疎通は可能である、というのが、彼の意見である。

音楽と言語は、目的や規則においては大きく異なるけれども、音楽には、同時性、多様性があり、確かに我々の五感に訴えることができるのである。

Emmaは、日本の女性が用いる日本語の構造を分析することによって、日本における女性の立場、社会的地位について言及した。彼女自身の日本語に対する思い入れの強さがうかがえた。女性の方が敬語を用いる頻度が高いという事実から、日本社会では、今だに女性が男性に従属しているのではないか、という推測を導いた。

森下は、Art Therapy(芸術療法)の事例を通して、芸術的創造ということの重要性を述べた。河合隼雄氏の論文を例に挙げ、氏が実践したという箱庭療法を紹介した。無意識的感情の表現、自分の才能の再発見、内面での変化、カタルシス効果等、芸術療法の効用は大きいようだ。我々も、議論の時間を使って、実際に芸術療法を試してみた。(何でもいいから頭に浮かぶものを画用紙に描いてみるというもの。)

Kevinは、演技トレーニングの様式に関して、アメリカ文化に根差した様式と、古典的な日本の様式とを比較して、文化的伝統を守ることの意味、聴衆とのコミュニケーションに至るまで、さまざまな事象に言及しながら、舞台俳優に必要とされるトレーニング様式について述べた。彼自身が、劇団の演出をしているということで、経験をもとにした話を聞くことが出来た。

さて、個人のプレゼンテーションのトピックについては以上であるが、テーブル全体としての構成を紹介しておく。

神谷とChrisが、「コミュニケーションの変化とその影響」

湧永とJohnが、「日米における自我の概念のとらえ方」

川瀬とEmmaが、「自己表現の変化」

森下とKevinが、「文化と芸術の展望、文化理解の可能性」

このような構成のもと、各々のトピックスをもとに、議論を進めていった。

## 第48回日米学生会議

### フィールドトリップ等：

- ①Dr. Marvin Marcus(ワシントン大学教授/アジア・日本文学専攻)をゲストスピーカーとして招き、「日米における自我の概念のとらえ方」の議論に加わっていただいた。
- ②セントルイスのローカルテレビ局である、チャンネル5 KSDKを訪問。スタジオを見学の際、実際のニュース収録に立ち合わせてもらった。その後プデューサーと、「マスメディアの役割の変容」「放送倫理」等について議論した。
- ③モンタナ州のNative American Museumを見学。(哲学と宗教テーブルと一緒に)「日本人とアメリカ原住民の宗教観、哲学、家庭観の比較」について議論した。

### 成果/感想：

全体を通して、なかなか奥深く幅広く議論が出来たように思う。体験的な文化の相互理解という当初の目的の一つも、フィールドトリップやグループワークを通して、ある程度達成されたと思う。他の分科会に比べて、内容がより我々一人一人の内面に密着しているため、誰でもとっつきやすい半面、普段なかなか面と向かって議論しない分野であるかもしれない。どんな社会問題を考える際にも、人間生活の本質である文化的視点を抜きにしては、大切な側面を見逃すことになりかねない。社会制度、構造、物質のような外面的なものに目を向けがちな現代であるからこそ、人間文化の深層にある内面的なものに目を向け、事象の本質を見極めるための一助をしていけたら幸いである。



文化と芸術分科会



歌で交流：会議中のある日

## 新時代の「民族」 ～対立から受容へ～ ETHNIC ACCEPTANCE TABLE

### 〈分科会のテーマと目的〉

Ethnic Acceptance分科会は、民族間の差異を受容し、共生してゆくための実際の解決策を探ることを目標とした。表面的な理想論に終始して結論を出したと思ひ込みがちだった前年度の“Ethnic Coexistence”(国際社会における民族の共存)分科会の反省と、あらゆる差別・偏見を生み出す人間の本質的な潜在意識が共通して存在するに違いないとの考えから、ケース・スタディを進めながらもひとつの実際解にむかって議論を進めるよう努力した。

今年度はメンバーのバックグラウンドも多様で、以下の8名のプレゼンテーションに続くディスカッションが行われた。途中4カ所へフィールドトリップとして訪れた。

### 〈メンバーと論文タイトル〉 (\*印はコーディネーター)

#### I. エスニシティの根本原理を考える[第一段階]

- (1) Rethinking Ethnicity Multiple Consciousness—Tomo Shibata, コーネル大学
- (2) Ethnicity as a Fiction—北澤咲弥花, 東京大学\*
- (3) 〈フィールドトリップ〉 International Institute, 教会

#### II. ムース・スタディ[第二段階]

- (4) The Ainu as a Minority People—庭瀬祐一郎, 慶應大学
- (5) Complexity within Asian Americans—Grace Han, ワシントン大学
- (6) Who Are Foreigners?—黄莉香, 慶應大学

#### III. 実際の解決策をさぐる[第三段階]

- (7) Sexuality and Christianity—Izumi Yamashita, ウォーバーク大学
- (8) Solving the problem of Ethnic Prejudice through the Institution of Education—Paul Steele, ロッキー・マウンテン大学
- (9) 〈フィールドトリップ〉 UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)、  
ホロコースト・ミュージアム
- (10) More Constructive Field from Surgical Ways to Internal—Medicine Wa  
—西垣雄一郎, 東京外国語大学
- (11) 最終ディスカッション

#### I. エスニシティの根本原理を考える[第一段階]

個別のケース・スタディに移るまえに、「エスニシティ」についてその根本的な概念を話しあった。第一日目に、「エスニシティ」という曖昧な言葉について全員のその時点の考えを提示した。アジア・アメリカンとして差別を経験し、エスニシティは再定義され差異を許容しあう概念と

なるべきだという意見、日本に生まれ育ったエスニシティを考えずにいたが、イスラエルやアメリカを訪れて驚いたという意見、それに対し、在日中国人として日本にも歴然と存在する差別を主張する意見などさまざまであった。

Tomo Shibataのプレゼンテーションは、従来のエスニシティの概念を再考し、我々はひとつのアイデンティティに縛られることなく多元的な価値観をもつべきだとしたハリスの説を提示した。多くの日本人にとってそれは難しいのではという意見に対しては、旅行やこの学生会議のような経験から克服可能であるとされた。単にお互いを理解いあおうと言っても本質的解決にはつながらない、という現実的問題提起が最後になされ、アイデンティティ同士が互いを脅かさないかたちで保持されるにはどうしたらよいか、という問いが8人に共通して残された。

北澤咲弥花のプレゼンテーションはさらにエスニシティという概念そのものの虚構性を、それを構成するファクターを一つ一つ検証することによって証明しようとするものであった。まず始めに、「あなたはどのエスニック・グループに属するか、それはなぜか」という問いかけがなされた。

- ①Izumi Yamashita (アメリカの大学に留学中) : 外見からアジア人であるが、アメリカに1年暮らしてもはや「日本人である」とは言えないと思うようになった。
- ②Grace Han (台湾系アメリカ人) : 台湾系のアメリカ人であるが、文化的には台湾の影響をより強くうけている。しかしアメリカにしか住んだことはなく、混乱している。
- ③Tomo Shibata (高校よりアメリカ在住) : アイデンティティ・クライシスを経験したが、今は日本人の女性であると自覚している。
- ④黄莉香(在日中国人三世) : 中国人と日本人の間にいるような気持ちでいる。またはどちらでもないのかもしれない。国籍は中国だが、文化的には日本人だ。
- ⑤西垣雄一郎(日本人) : 日本人だと思うが、理由はわからない。
- ⑥庭瀬祐一郎(日本人) : 日本人に生まれ育ったためとしか言えない。
- ⑦Paul Steele (プエリトリコ人の母をもつアメリカ人) : 中流の白人のアメリカ人であるが、母が中米出身でそのために混乱することがある。
- ⑧北澤咲弥花(日本人、在米経験2年) : 日本人であるが、そのまゝにひとりの唯一無二の人間としてアイデンティティを確立したいと思っている。

エスニック・グループに分ける根拠となるファクターには、肌の色などの外見的な生得的要素と、宗教や言語などの文化的要素が混在しており、支配者が支配の正当化のために行ったグループ分けが今でも残存しているだけであるとの指摘には、支配者だけでなく人間は本質的に共通項を求め、異なるものを排除するものであるという反対意見も出された。「地球人である」としたのは個人のアイデンティティが見出しえないというのである。差異に目をつぶるのではなく、それを認識したうえで優劣評価をしないためにはどうすればよいか、という根源的なずしりと重い問いがのこされた。

フィールドトリップとしてセントルイスのInternational Instituteという移民に対して英語指導や雇用補助などを行う公立機関を訪れた。アメリカ中部という土地ながら、ボスニア・ベトナム・中国などから、さまざまな理由により難民として仕事も家ももたず移民してきた人々が教室で

初等英語を学ぶようすは、我々を複雑な心境にしたが、巨大な力で移民をのみこむアメリカという国のすがたと、その精神を実際に実現するために働く草の根レベルの人々の存在を知った。その後訪れた教会でも移民のコミュニティへのうけいれの手助けをボランティアとして行った人々の献身的努力に触れて、心が動かされた。

## II. ケース・スタディ[第二段階]

エスニシティの根本原理と問題点を共有した我々は、3人のケース・スタディをもとに、現存するエスニック・コンフリクトを考えた。

庭瀬祐一郎は、日本も存在する問題のひとつとして、アイヌの人々の現状について紹介した。均質的民族などといわれる日本に実は多くの少数民族や民族差別が存在することを我々はもっと自覚すべきである。アイヌの人々にアイヌ文化の教育を受ける公的機会がないこと、国化政策によって多くのアイヌ人たちは、アイヌであることを隠して東京や大阪に住んでいることなど、日本人にとっても初めて知る事実であった。アメリカに住むアジア系の人々は、グループをつくりますます孤立してケースが多いが、彼らには祖国があるのに対してアイヌの人々はそのぶん化が否定され、隠され、消滅していつていることは衝撃的であった。小学校教育から、アイヌ民族やその文化について教科書に載せるなどの提案がなされた。

Grace Hanは、アメリカにいるアジア系の人々について、その中でも日系、中国系、韓国系などの間で、コンフリクトや差別が生じていることを指摘した。

黄莉香は「在日」とよばれる人々について発表した。日本に生まれ育ったにも関わらず、なぜ法制度的にも感情的にも外国人扱いされるのか、という問いかけから始まり、日本国籍取得に長い時間と「審査」が要されること、公務員や教師など職業に制限があることなどの現状を知ることにより、その利不尽さにメンバーは言葉を失った。しかし一方で、アメリカでは、国籍取得などの法制度は日本に比べはるから容易であるにも関わらず、同じように感情的なレベルでの差別が存在することをどう説明するか、という問題にも当たった。

## IV. 実際の解決策をさぐる[第三段階]

エスニシティと一口に言っても、さまざまなレベルでの問題があり、ディスカッションを進めるにつれて問題の根深さが認識されていった。そんな中、Izumi Yamashitaは少し視点を変え、厳格なカトリック社会に留学中の経験から生じた疑問として、同性愛者を宗教的信条から否定し排除することに異議を唱えた。民族問題とは直接関係のないトピックスだが、ひとつの価値観に固執するあまり他を許容することができなくなることの危険性を指摘した点で重要であった。

Paul Steeleは、民族的偏見を克服する実際の解決策のひとつとして、教育の改革を主張した。学校では、ひとつの価値観を教えこんだりものごとの優劣を教えるのではなく、多様性を客観的視点から多く提示して生徒たちに考えさせる方向に転換すべきであるとした。歴史上の偉人として教えられるのはアメリカでは白人ばかりであることも問題であるとした。「人種のるつぼ」と言うときこえはいいが、実際は白人社会である事実そのものが問題であると指摘した。

2回目のフィールドトリップとして、UNHCRとホロコースト・ミュージアムを訪れた。

## 第48回日米学生会議

UNHCRでは、難民援助の使命と反して存在する国家間の政治的関係や経済状態による受け入れの差別や、国連の財政問題など、さまざまな現実を知った。ホロコースト・ミュージアムは、悲惨な過去をそのままの姿で展示しており、衝撃的な写真や遺品のかずかずに、思想につき動かされた人間の集団が犯した過ちを思い、立ちつくすばかりであった。

最後に西垣雄一郎は、民族間のコンフリクトの平和的解決こそが人類の未来のための建設的方向であるという見地に立って。それまでのディスカッションをまとめる意味で全員の意見を聞いた。Grace Hanは、きれいごとではなく実際に、互いに協力しあい認めあって生きるためには、それぞれの文化を学ぶだけではなくあるていどの妥協も必要だという指摘をした。北澤咲弥花が、学生会議の一ヵ月間を通して、国籍・言語・宗教などの明らかな差異は個人として深く交流すれば乗り越えられると確信したと述べると、庭瀬祐一郎も、日本人は均質、アメリカ人は多様というステレオタイプから離れて考えること、差異を見つけるよりも共通点を見つける方が難しくそして大切であることを述べた。同様にTomo Shibataも、「差異」と言われるものは見方を変えれば全て程度の違いにすぎないのではないかという可能性を示した。

しかし、現実としてエスニシティから生じる差別は存在するのであり、それを改善するのは長い時間をかけて教育から変える他にないと思われたが、せめて、感じることと頭で考えることのうち、頭で考えるほうから我々一人一人が一步步変わってゆけたら、という希望がうまれた。



新時代の「民族」分科会

## 国際秩序～法と機関の役割～ INTERNATIONAL LAW AND ORDER

テーマ：「世界政府は可能か」

目的：

現代における交通機関の発達と情報通信網の整備は人・モノ・情報の交流を活発化し、地理的な「国境」の概念を超えて国同士の距離を近づけた。近年のさまざまな分野におけるグローバル化の動きは、国家に他国との関係を強要と、グローバル・コミュニティの形成へと向かわせている。ゆえに自国の内側に目を向けるばかりでなく、いかにして「国際社会の一員」として生きていくかが、これからの時代の国家にとって最も重要な課題とされるであろう。

しかし、原則として何らかの上位権力も認めないはずの主権国家を統制して一つの共同体を形成することが現実に可能であるのか？そこにたどり着くためには、かねてから曖昧であるとされる国際法や国際機関の位置づけを確認することが必要であると思われる。この分科会では種々の国際法や国際機関の検証に基づき、現在の国際社会の構造を分析し、今後の展望を考えていくことを目的としている。

テーマ、目的に対する成果

「国際秩序」テーブルの原点ともいうべきは、実施要綱に記載されていた上記「目的」である。

その目的を達するためのアプローチとして取り上げられたのが、「世界政府は可能か」というテーマだ。このラディカルなテーマに仮託して、国際機関と法の現実と将来を突き詰めるのがこのテーブルの方法論だった。

結論としては「地域的機構と国際連合の適切な役割分担が不可欠」という点に落ち着く。

基本的な考え方は次の通りだ。

ある問題については、二国間関係、地域的機構が一義的に責任を負い、その相互の調整を国際連合や普遍的国際機関が行う。他方、地域に帰すべきでない問題については、国連や普遍的国際機関がコンセンサスを形成すべくイニシアチブをとる。

少し詳細に説明する。

まず一定の実効性、強制力を持ち、国家管轄権の滅殺に直ちにつながるような問題については、二国間関係の蓄積、あるいは地域的機構を通じての協力が必要である。

なぜなら、文化、地理などさまざまなバックグラウンド、あるいは国家としての利害を共有している国同士の協調を積み上げることが、普遍性のある枠組みを作る上での早道だからである。

具体的な分野としては、まず域内自由化が進む経済市場が挙げられる。EU、NAFTAなどはその代表である。また、より緩やかな統合体であり、国際機構の枠組みからはやや外れるが、APEC



も見逃せない。この他、数多くの経済ブロックが世界に現出している。

また、経済援助もその機動性からして、二国間援助が有効な側面が多く、そちらの比率が高い。平和維持活動は、地域間バランスの維持が派遣部隊編成時の重要な要素となる。そのため、必ずしも当事国の属する地域のみが活動での重要な主体になること少ない。だが、地域的国際機構との連携が、その活動の重要な部分を占めるケースが出てきている。(UNPROFORとNATOの協力、など)

他方、国連本体を始めとする普遍的国際機構でなくては扱えない課題も存在する。地域の枠組みを越えたよりグローバルな課題や、地域の独自性に帰する事のできない性質の問題である。

例えば、人権を巡る問題である。国際関心事項として位置づけられている性質からしても、地域ごとに異なる規範を設定して処理できる事案ではない。

そこで、人権に関する普遍的なルールづくり、それを実効あるものにする努力が、国連に求められる。事実、世界人権宣言を嚆矢とする人権関係の決議、諸条約が積み上げられてきた。その実効性はさておき、普遍的ルールが蓄積されつつある事実は軽視し得ない。

また、環境に関する問題も同様である。

国際環境に関わる法的関心の中心は、以前は隣国同士のトラブルだった。だが現代の環境問題は、国家や地域の枠組みを越え、世界全体を直ちにおびやかす。そこで、全世界を巻き込んだ普遍的な枠組みが必要になる。

事実、国連はさまざまな環境に関する会議を主催し、条約の採択、署名、批准を推進している。その内容が総花的なものになっているのは歪めないが、普遍的な枠組み作りが優先される現段階では、それもやむを得ない。

また、国際司法裁判所の今後についても注目する必要がある。国連等の要請に基づく勧告的意見で注目を集める機会が多いのが国際司法裁判所だが、強制管轄権の受諾国は少ない。紛争処理手段としては、発展途上だ。

### 〈メンバーと論文タイトル〉 (\*印はコーディネーター)

テーブルとして「国連を様々な角度から検証する」ことが大きなテーマであった。

佐藤朋範	Peace Keeping Operations
阿部美千栄	International Court of Justice
竹内大志	Environmental Issues
原田芳衣*	Human Right
Shelene Atanacio	Third World Nations
Kaj Trapp	Congress of US
Caul Watson	Diplomatic Policy of Japan
Helen Lee*	Wrap up : the future of U.N.

### 議論内容

国連平和維持活動については、創立の経緯と現在の運用上の問題がペーパーの主題だった。議

論で主な争点となったのは「他国の平和維持のために自国民が犠牲になることへの抵抗感」である。日米とも抵抗感を露にした。アメリカ側デリゲーションには「強制力を行使するのではなく単に現状を維持するために生命を賭する」という概念に抵抗感があるようだ。

犯罪人引き渡しに関する発表は、世界全般に注目するデリが多い日本側にとって、二国間関係が主体となる興味深い問題だった。犯罪人引き渡し制度の現状を概観した上で、二国間協力の積み重ねが制度を形成していくケース、と位置づけた。

国連と環境問題の関係に関する発表では、最近の環境問題の動向や、国連環境サミットの成果などを概観した上で、環境問題を巡る国連の役割に言及した。この中では、国連は環境問題解決のためのシステムを形成する政治的役割を担うべきであり、国連システム内の環境問題を所管する機関の具体的活動は加盟国にシフトすべきである、という提言がなされた。国連の財政難も踏まえた議論である。

日本の政治の意思決定に関する発表では、派閥制度、稟議書によるボトムアップの意思決定などが取り上げられ、意思決定が機動性を欠く、という欠点が指摘された。その解決のためには、情報に関する改革が必要、というのが提言であった。発表後には「改革」の内容に関して議論が行なわれた。そこでは、総理大臣への情報の集約化、官僚のセクショナリズムの打破による情報の流通、国民との関係では情報公開の促進が取り上げられた。

国際司法裁判所に関する発表では、その制度について概観した。今一つなじみのない制度のため戸惑う向きも多かった。が、その中でも裁判管轄権の受諾に関する問題と、勧告的意見という制度に注目が集まった。イラン大使館人質事件の際のICJの活動についても、検討が行なわれた。強制管轄権を全面的に受諾している国が少ないことなどから、扱う紛争件数が少ないことも指摘された。

開発政策に関する発表では、低成長国に関する援助、経済システムのありかたが検討された。産業目的でない高付加価値品の流入による貿易赤字、保護貿易や規制等による経済成長の確保などが発表では議論されていた。

当日は南北問題テーブルと合同でテーブルが行なわれた。南北問題テーブル側からは、日米の経済援助政策の比較検討が行なわれた。

国連と人権に関する発表では、人権問題が国際関心事項として位置づけられた経緯から、以後の世界人権宣言に始まる国連の規範形成への取り組み、そして人権問題が国連の下での制裁対象になったケースなどを概観した。

議論の中では、割礼などの文化風俗に根差した習慣を「人権」の名の下に否定できるか、一口に人権といっても、どこまでが普遍的なものとして認識されるのか、といった争点が現れた。

この時を含め数回は、「戦争と平和」所属メンバーも加わってのテーブルとなった。同メンバーから安全保障体系の総論的説明や憲法第9条に関する議論の提起があった。

最後の発表では、国連内部のシステム論が取り上げられた。

期間中は合計2回フィールドトリップを実施した。第一回はピリングスで行った。「『フリーマン』の籠城事件」の解決を指揮したモンタナ州の検事が事件の経緯について講演した。第二回はワシントンD.C.で行った。この時は、世界銀行を見学し、その活動の概要について説明を受け

## 第48回日米学生会議

た。

テーブル全般を振り返る。「世界政府は可能か」というテーマが伝わらず、一部アメリカ側デリゲーションの研究テーマがこれと噛み合わないケースが生じた。少々残念だ。

また、論文の配布をせず、口頭での簡単な説明だけにとどめた者がいた。事前のアグリーメントに対する違背は全体の士気を下げる。

議論の手順としては、まず各自の論文に関するプレゼンテーションを行い、後に「世界政府は可能か」という論題に挑戦することにした。

しかし、個々の各論的研究を統一テーマである「世界政府は可能か」に有機的に結合させ、総論的な世界システム論に昇華させるのは、ただでさえ難しい作業である。

その上、運営上の都合か相当数の時間が期間後半で中止になり、まとめのラップアップに十分な時間を割けなかった。枠組みを全員で急いで固めた後、それを担当者2人が大使館でのスピーチ用にまとめ、何とか形にした。だが、時間をかければより具体性に富んだ提言が誕生したのではないかという後悔は残る。

SOLUTION ORIENTEDという今年の目標に照らして我々がどうだったか。

稚拙でも学生なりのSOLUTIONが出せたのか、検証を要する。分科会にもよるが、我々同様の検証を求められる所もあろう。



国際秩序分科会

## 南北問題 North-South problem

テーマ：北と南の新しい関係を探る

### 目的：

「南北問題」という言葉は60年代から70年代にかけて使い古された感があり近年では南北問題も「南」の国々の多様化により、従来の単純な「北」と「南」という対立軸を崩しつつあるように見える。しかし、南北問題という言葉で呼ばれる諸問題がなくなったかという点、決してそうではない。依然として、富の極端な不平等分配やその結果として飢餓に苦しむ多数の人々が存在する。更に、近年注目を集めている環境問題や資源問題、難民問題などは、従来の南北問題を生みだしている構造から作り出されていることが多い。

このテーブルでは、こうした現状の確認から始め、最終的に南北問題や世界規模の問題群を作り出す構造を、いかなる手段でいかなる方向に変革してゆくかについて、我々のビジョンを描くことを目的に議論が進められた。

### メンバーと発表タイトル

原大介	“Proper Development”
渡辺洋子	“Development and Environment”
塩崎彰久	“Overproduction and Starvation”
岩根育子	“Foreign Assistance Re-examined”
Malik Rashi	“A Case Study of Socio-Economic Impact of Infrastrure on Development”
Steven Munger	“Economic Development Through Military Assistance”
Gakushi Nakamura	“International Democracy in the Current World System”
Nao Tase	“Human Rights and Development”

### 議論内容

テーブルセッションでは、各人が上記のテーマによるプレゼンテーションを行い、それをもとに全員で議論するという形式をとった。

#### (1) “Proper Development” 原 大介

現在アジアと呼ばれる地域には、産業基盤を持ち、自立的に生活を送っているコミュニティが多数存在する。こうしたコミュニティとそれらを自国領土内に抱える政府との関係、また、そうしたコミュニティに対し経済的に先進国である我々日米両国がいかなる援助をしていくことができるかについて問題提起がなされた。それに対して、教育の重要性を中心に活発な議論がなされた。

### (2) "Development and Environment"

渡辺 洋子

主に発展途上国での開発と、それにもなう環境汚染についてその対策を中心に議論が行なわれた。途上国における経済発展と環境保護を両立させるためにはどうすればいいのかという問いに対し、様々な案が出され、その可能性が話し合われた。

### (3) "Overproduction and Starvation"

塩崎 彰久

深刻化する食糧問題の解決には人口抑制と途上国における農業生産力の向上が不可欠であるが、農業生産の効率重視が環境破壊を招いている皮肉な現象が問題として提起され、議論された。それを通じて、途上国の経済発展と地球上の資源消費の最適バランスをみつけることが問題解決に重要であることが確認された。

### (4) "Foreign Assistance Re-examined"

岩根 育子

日米それぞれの対外援助のあり方の比較分析から、各々の問題点が指摘された。また、環境問題や人口問題など、国境を越えた大きな問題に対処するため、日米が対外援助の分野で新しい協力体制を築くことが提案され、それについて活発な議論がなされた。議論を通じて対外援助に対する日米の認識の差が浮き彫りになり、この分野における継続した必要性が確認された。

(このテーブルセッションは国際秩序テーブルと合同で行われた。)

### (5) "A Case Study of Socio-economic Impact of Infrastructure on Development"

Malik Rashid

バングラデシュにおけるアジア開発銀行及び世界銀行による経済援助プロジェクトについて雇用の増加や福祉の充実、社会構造の変化に関するケーススタディ。Infrastructureによる効果を長期的に研究して行う必要が確認された。また、途上国自身よりも援助する側が、もっと福祉や教育など総合的な発展が行われるよう監督すべきという結論が出された。

### (6) "Economic Development Through Military Assistance"

Steven Munger

発展途上国において軍事政権が果たした効果の実際例の提示から、アメリカによる発展途上国への軍事援助や、派遣部隊の民間活用を図ることで、その国のより迅速で効率的な発展に貢献できるのではないかという発表がなされ、その是非と可能性が議論された。

### (7) "International Democracy in the Current World System"

Gakushi Nakamura

各国平等の投票/発言権に基づいた真の国際民主主義確立こそ南北問題の根本であるという問題提起に対して議論が進められた。GATT・IMF体制がいかに発展途上国経済の特異性を無視した枠組みであるかという南側諸国の主張に対する理解を試みるとともに、南北問題の現局面の分析としてアジアNIEs出現の意義とその将来への展望が論じられた。

### (8) "Human Rights and Development"

Nao Tase

東西及び、先進国と途上国で異なる人権の扱いの事例を取り上げ、国際的に統一された人権規範を確立すべきでないかという問題提起がなされた。これに対し、先進国や西洋的基準に基づく人権規範を国際法のような形で制定することは、発展途上国の主権を侵害しないなどの意見が出された。

フィールドトリップ

テーブルセッションで様々な問題を確認した後、それらが現在解決にむけてどのように努力されているのか知るために、8月15日には世界銀行を訪問した。そこで、世界銀行が行っている活動内容をビデオや日本政府から出向なさっている篠山氏から直接伺うことができた。



南北問題分科会



会議中の1コマ

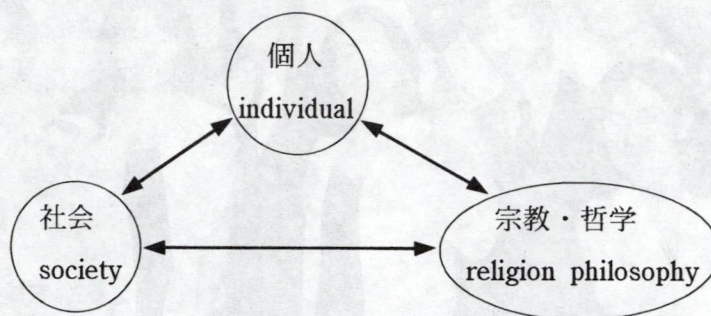


ジャスク・クラブ（会議伝統の手拍子）で1ヶ月をしめくくる

## 哲学と宗教～人間の可能性の追求～ Philosophy, Religion and Human Potential

テーマ：“The Relationship among Religion, Society and Individual”

我が哲学、宗教テーブルの共通のテーマは「宗教、哲学が人間におよぼす可能性の追求」である。一口に人間といっても、最小単位である“個人”、その集合体である“社会”。“民族”、と切り口は様々である。現代における宗教の意義、その将来、社会における影響力の大きさ、問題点などを我々は以下の図を用いて多様な観点から考えた。



メンバーと論文タイトル(\*印はコーディネーター)

Rachel Brunette *	“Encountering the World : Soka Gakkai”
森利彦	“What Japanese people have been believing and what Japanese will believe”
佐々木健至	“Aum Shinrikyou, provoking thought about religion in Japan”
西野水季	“The Power of Attitude”
Alex Millkey *	“Psychological Structures Within Religion”
Ron Quezon	“Religion and the Internet”
Keith L. Partney, II	“Agnosticism : belief and unbelief”
Micheal Brous	“If I am not for me, who will be ?”

### 議論内容

上記の図をもとに各人が行った発表の結果、社会と宗教の関係を扱ったもの、特にインターネットと宗教の関わり合いについてや、オウム真理教、さらには心理学と宗教の関係について、自分の民族性とその宗教の関わり合いについての議論など、毎回毎回幅広いものとなった。最初に提示した図を用いて説明すると、宗教、哲学と社会の関わりについて扱ったものが多く、議論も盛り上がった。

議論をすすめていく際で、非常に興味深かったものは信仰に対する意識の違いが日米間であっ

たということである。日本社会において信仰を持つということは、自分のアイデンティティーを考える上でそれほど重要視されていないが、米国社会においてはテーブルのメンバーを含めて自分のアイデンティティーを考える上で非常に大きいのだ。

宗教、哲学テーブルで行ったフィールドトリップは主に3ヵ所である。モンタナ州ビリングスのインディアンリザベーション博物館ではネイティブアメリカン(インディアン)の講師の方から現代社会において、いかに自分達の生活を守っていくかについての話を伺った。ワシントンDCではホロコースト博物館、ワシントン国立大聖堂に訪れた。

### 今後の展望

現在、信仰は二極分化の方向に向かっているとされている。伝統的な宗教であるカトリックや仏教から人々が離れていく一方で、ここ百年ぐらいで登場した新興宗教勢力が巨大化している。そうした流れとはまた別に、ユダヤ人やネイティブアメリカン、アイヌの人々のように自分達の民族のアイデンティティーをそれぞれの信仰と堅く結びつけている人もいる。さらにはインターネットに宗教のホームページがのっている時代でもある。世界各地では宗教を巡る紛争は依然として絶えない。

こうした現代で我々ができるのは各自の立場を尊重する態度を持つ以外ない。これは非常にきれいごとのような結論であるが、混沌とした人々の利害関係の中でこうした立場を持つことは容易ではない。こうした態度を持つことが人間の可能性、すなわちヒューマンポテンシャルを高めしていくことにつながるのではないか。



哲学と宗教分科会



## 社会参加 ～「個人」と「社会」の関係～ Social Activism

### 分科会のテーマと目的

巨大で複雑な現代社会というシステムの中に組み込まれている我々にとって、日々の生活の中で、その「社会」が抱える問題や矛盾、理想と現実にはしばしばきづくことがある。「社会」が持つ複雑さ・巨大さに圧倒され、問題の解決が一見不可能に思われることも多い。

しかしながら、問題を認識するだけにとどまり、問題の解決に背を向けるというのではなく、「社会」の最小構成単位である「個人」として、問題解決や現状変革に働きかけることはできないだろうか。

第48回会議の総合テーマ「Accepting Personal Responsibility to Strengthen Our Global Partnership」とは、個人レベルでの活動から、ひいてはグローバルなレベルでの目的現実へ、という認識を示している。

当分科会においても、国や政府が問題の解決にむけて何ができるのかという、いわば、「上から」の視点というよりも、むしろ、自らのよって立つ足元を冷静に見つめ、総合テーマにも相通じる「個人として、一学生として自分には何ができるか」という「下から」の視点に立って、「社会」の中で「個人」が果たし得る役割とその可能性(社会参加・社会参画)について考えることを目的とした。

### テーマ：目的に対する成果

今回48会議では、「アカデミックな分科会」が志向されていたので、なるべく各自のリサーチをもとにした論文重視の方向で分科会運営を考えていた。論文のトピック選定に関しては、普段あまり馴染みのないSocial Activismというテーマをより実感できるレベルまで近づけようという考えから、なるべく「ケーススタディー」を取り上げるように試みた。

しかし、分科会を振り返ると、「個人が社会に対して働きかける活動、その一形態としてのSocial Activism」というものの共通認識を作り上げる事に、結果的に多くの時間を費やすことになってしまった。このこと事態は決して無駄なことではなかったし、ともすると曖昧なSocial Activismという概念について明確にする事で、議論の方向性をしぼるというねらいもあった。しかしながら、多くの時間を割いて、画一的に共通認識・定義を作ることよりも、認識については、各自に任せて、もっと実感レベルでの概念の獲得に特化して、より多くの実践・実際的なフィールドトリップなどを通じて、最終的に、参加者が感じた事をまとめる作業の中で、『目的』であげたような「個人と社会の関わりを考える上で重要になってくる視点要因はなにか」「実際には我々には何ができるのか」「これからそれぞれが思い描く理想を実現していくためには、具体的に何が求められるのか」といった問いに対して考えていくアプローチも可能であったのではないかと考えられた。

## メンバーと論文タイトル(\*印はコーディネーター)

斉藤 名穂	"The Current Situation of NGO In Japan"
田尻 雅*	"The Approach to Social Activism"
鄭 平文	"Civil Activity and Foreigners"
中川美智子	"The Volunteer Education"
Meghan Murnion	"Evolution of Social Activism"
Akiko Yamagata	"Social Activism as Activity of the Checkbook?"
Akiko Inoguchi	"Social Activism in Modern Day Society"
Steve Kelly	"Re-thinking of Individualism"

## 議論内容

日本側には馴染みの薄いこのテーマに取り組むにあたって、私たちは準備期間中に、次のようなフィールドトリップをおこなった。その中で、漠然とした“Social Activity”の概念をつかんでいった。

- 5月17日 とうきょう学生ボランティアふぉーらむ(代表 鹿住貴之)
- 5月22日 大橋正明先生(恵泉女学園大学助教授)
- 6月18日 世田谷ボランティアセンター
- 6月21日 渡辺一雄氏(三菱電気株式会社 顧問)
- 6月25日 浦和市立本太小学校(埼玉県社会福祉協議会研究協力校)

分科会は始めから、アメリカと日本の状況の違いを直視することになった。まず、ソーシャルアクティビティやフィランソロピーという言葉の意味合いが英語と日本語では違い、両国間のボランティアやNGOの活動状況、認識の違いが明らかにされた。テーマ自体の新しさと扱う範囲の広さなどから、時には議論の方向性が見えにくくなることもあった。

しかし、各ペーパーが、リサーチと体験に基づいていたため、プレゼンテーションを一つのきっかけとしてメンバー間で色々意見が交わされ、また活発な議論が展開されていた。個人からのアプローチを促進するためにはボランティア教育が必要だという主張を出発点とし、各団体の活動を社会的にサポートすることの重要性とその方法、自分自身に社会に働きかける必要性をせられた体験などが話された。それは、正規の分科会の時間以外にもおよび、夜の自由時間を使って、civil right movementにまつわるビデオを有志で見るといった試みもあった。

本会議中のフィールドトリップは、息詰まった議論に新しい指針を与えてくれるものであった。8月6日に行われたfreeman(アメリカの無政府主義団体)に関する講演は、社会とは対峙するものではなく、自分も生きる「社会」をより良くするものだという根本を確認させた。15日には、Washington Univ. のKim教授が、日米の文化的側面からActionの起こし方の違いを示していただき、一か月にわたる議論のまとめにもなった。

具体的な成果を上げるまでには至らなかったものの、身近なところからまず実際に行動を起こしてみようではないかという意見が出され、会議中の我々にとっては最も身近なこの日米学生会

## 第48回日米学生会議

議という場における問題(会議における、英語と日本語の平等使用に向けての模索)についても話された。これらの議論を通じて、今回の総合テーマが掲げている理念、“Accepting Personal Responsibility”についてその意味を十分に理解することができたのではないと思われる。全く偶然の事ではあるが、この分科会8名のうち5名が、次回49回会議の実行委員になった。これも、内の問題を正面からとらえ外に働きかけていくという社会参画の姿勢の表れともいえよう。

最後になりましたが、準備期間中そして本会議中フィールドトリップの実施に際して、我々のご無理なお願いに、快くご協力していただいた関係者の皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。



社会参加 分科会



会議中の1コマ

## ビジネス～グローバルマーケットの中の企業～ Business Trade

### 分科会のテーマと目的

ともに世界をリードする日米両経済大国。しかし、両国企業の経営倫理・戦略は大きく異なり、それゆえに生じる軋轢や反目も多い。系列化された日本の企業群、公然と政府を操る米国の巨大企業、それぞれの方針には確かに難点が多い。しかし、日米が互いに批判しあうのは、決して建設的ではない。世界市場においてともに大きな力を誇る日米の企業、両者には必ず他にはない特長があると思われる。私たちは、この点に注目することにより多くを学ぶことができるのではないか。

こうした点を問題意識として持ち、私たちは、総合テーマに添って大きく4つの視点を持った。バブル後の閉塞感に悩む日本と、ベンチャー企業の勢い溢れる米国の、両国企業の比較対照・日米経済関係概観・そして高成長への期待とリスクが入り交じるアジア市場の概観である。

また、「ビジネス」を扱うという特徴上、文献を用いての発表・議論に留まることなく、実際の企業やビジネスマンに多く触れることを心掛けた。その結果、他の分科会から、「ビジネス分科会=フィールド・トリップが充実している(しすぎている?)分科会」との評判をいただくまでになった。

### メンバーと論文タイトル(\*印はコーディネーター)

大橋 英雄	「持ち株会社の日米比較」
横田 直正	「医療経済に見る日米両国の差異」
増田 剛	「ビジネスの精神性～松下幸之助に学ぶ経営者精神～」
村田 知子*	「ベンチャービジネスの勃興期分析」
Toshiaki Kameoka	“Car Trade”
Daniel McKelvey*	“Future Trend of Asian Market”
Gregory Caimi	“Prediction of US-Japan Economic Relation”

### 議論内容

「書を捨てよ、街へ出よう」私たちはこの言葉を実践した。それは、準備活動で非常に興味深い人物に出会ったことによっても触発されたことでもあった。企業投資を職業とするその方は、日米両国で年間に半分ずつ過ごしているのだという。彼は私たちに、「世の中に流れている情報に価値はない。直接人から得る情報にこそ価値がある」という言葉をくれた。そのために人脈を築くことに努力は惜しまない、と言う彼に、「ビジネスマン」の力強さを感じ、私たちの中で、アメリカのビジネスに触れる本会議への期待が膨らんだ。

7月25日。アメリカに渡り、6人の男性に対し、紅一点の日本側コーディネーターというメン

## 第48回日米学生会議

バーでの日々が始まった。セントルイスでフィールド・トリップのために訪れたフォードでは、労働組合の方から意外な言葉を聞いた。フォードでは、労使間関係が非常にうまくいっており、従業員によるストライキ等はないそうだ。それは、アメリカといえば、企業内の調和よりも労使双方が自己の権利を主張することが多いのだろう、という私たちのステレオタイプを打ち砕くに十分であった。

他にもマクドネル=ダグラス社、ピリングスの石油採掘ベンチャー企業等をも訪れたのだが、中でもワシントンでは訪問したUSTR(米国通商代表部)は、日米関係を考える意味でも大変興味深かった。何よりも私たちは、代表部内に中国・日本担当がたった3人しかいないという事実には驚かされた。(それ以前に、中国と日本担当がそれぞれ独立していないことが不思議でもあった。)案内をしてくださった方の話によると、USTRは、対外的な問題に対して米国の利益を声高に主張する旗振り役のように捉えられがちであるが、実際は外国と米国との「交渉役」としての意味合いが強いそうだ。それには与えられた予算や人員が少ないことが影響しているという。ちょうど注目されていたフジとコダックの問題にしても、そこにUSTRが関わったのはコダック側が交渉の下準備をほぼ請負ったため(つまり、USTRに手間をかけさせなかったため)という現実的な背景があったからのようだ。こうした話しを聞くにつれ、分科会のメンバーの間では、マスコミの報道を鵜呑みにする危うさを改めて認識する気運が高まっていた。

私たち学生のフィールドトリップの申込みを、快く受け入れてくれたアメリカの企業。キャリアプランを実現するために、転職を念頭においた就職活動をしている米国側参加者。この夏は、私たちに「実社会」を見せてくれた。最後に、私たちに力を貸してくださった全ての方に感謝を捧げたい。



ビジネス分科会

## ビジネス～グローバルマーケットの中の企業～ Business Trade

### 分科会のテーマ：世界経済における政府の役割

国の政府は国際経済の中でどのような役割を果たすことが必要とされているのだろうか？

アメリカの経済学者サミュエルソンによると、理論上は資本主義社会において政府の介入のない完全競争的な市場経済は一定の条件の下では世界全体に効用をもたらすとされている。しかし、実際の世界は、国境が存在し、各国の経済状況は異なるため、それぞれの国が自国の経済発展のために独自の国内政策を行っている。また、対外政策においても日米自動車交渉、G7による金融政策や途上国への産業政策等の政府の介入が経済システムの安定には不可欠とされている。それでは、政府はどの程度まで市場経済に介入すべきなのであろうか。

私たちは産業政策、海外援助、環境汚染、貿易への介入等に関する具体的事例に焦点を当て、日米の政府の役割について議論を繰り広げた。

### メンバーと発表タイトル

見市 礁	“The Analysis of US-JAPAN Aut Dispute”
吉野 次郎	“The Global Enviromental Issue -Greenhouse Emission-”
遠藤 範夫	“Cultural aspects of US-Japan Trade Conflict”
尺田 恵里子	“The US-Japan leadership in the global economic system”
Scotte Blacker	“Trade Friction And Culture In The Japan-US Economic Relationship”
Eleanor Clark	“The Global Enviromental Issue -Greenhouse Emission-”
Heidi Zhang	“Regional Partnership: The Creation of Asian Economic Network”
Kiayah Nikkita Cobb	“New Challenges to Successful Relationship”

### 議論内容

経済政策分科会の議論は以下の5点を中心に行われた。

- ①日米自動車交渉
- ②世界経済における日米のリーダーシップ
- ③環境と経済
- ④世界システムと日米(金融システム、覇権システム等)
- ⑤日米経済摩擦の文化的側面

以下、順に議論の経過を述べると、

1：日米自動車交渉

発表論文：見市 礁 “The Analysis of US-JAPAN Aut Dispute”

Eleanor Clark

前年の1995年日米間で大きな議論となった、日米自動車交渉は我々のテーブルにおいても強い関心が寄せられた。中でも大きく取り上げられる事となったのは、「自動車メーカーとMITI(通産省)との密接なつながり」、「アメリカ企業のロビー活動」、「労働組合(圧力団体)と政策決定との関係」など

日米間の政治構造の違いであり、このような違いや各国のおかれた状況などを更に認識することが、日米経済摩擦解決の第一歩となるのではないかという議論がなされた。

### 2：世界経済における日米のリーダーシップ

発表論文：尺田 恵里子 “The US-Japan leadership in the global economic system”

Heidi Zhang “Regional Partnership: The Creation of Asian Economic Network”

セッション2では主に外側から見た日米関係について話し合った。はじめに環太平洋地域における日米の役割、次に世界経済全体における日米の役割について議論は展開された。環太平洋地域についてはAPECに並んで情報・技術などの共有を目指すAEN(Asian Economic Network)など、新しい協力体制の提案をメインに話し合われ、そのような体制で多少の犠牲があろうと、日米はリーダーシップをとるべきだという結論に達した。ついで世界の中の日米については、主に協力関係を持つ二国としての役割という視点から、政治的安定の担い手や地域主義の暴走の歯止め役としての日米協力体制の重要性が確認された。

### 3：環境と経済

発表論文：吉野 次郎 “The Global Environmental Issue -Greenhouse Emission-”

ここでは世界環境と経済について、グリーンハウス効果などを例に日米に固執せず、大きく発展途上国と先進国の環境保護へ向けた役割や権利について話し合われた。その様な中で科学者の倫理の必要性、政治家の役割、そして個々人の自覚の必要性など、これからの世界環境の保護へ向けた幾つもの発言がなされた。

### 4：世界システムと日米(金融システム、覇権システム等)

発表論文：Kiayah Nikkita Cobb “New Challenges to Successful Relationship”

このセッションにおいては金融システム、覇権システム、国連等の世界の様々なシステムにおける日米の役割についての議論が行われた。そこで注目すべきは日米の学生間の相手国への認識のギャップである。米国の世界システムでの役割への認識は両国ともに深いのが、かたや日本の話となると米国学生は殆ど、情報をもっておらず、日本人学生による説明に多くの時間が費やされたのは印象的な出来事であった。

## 5：日米経済摩擦の文化的側面

発表論文：遠藤 範夫 “Cultural aspects of US-Japan Trade Conflict”

Scotte Blacker “Trade Friction And Culture In The Japan-US Economic Relationship”

最後のセッションでは、まず「文化とは何か」という基本的なことから、メンバー全員で話し合い、定義することより議論を始めた。最終的には文化的相違は日米経済摩擦においては政府間、非政府間での交渉でも大きな影響をもたらすという結論に達し、このような問題を解決するには、政府間はもちろんの事、たとえば、我々の日米学生会議などのような非政府間でのパーセプション・ギャップを埋めるためのアプローチが重要であるという共通認識を得ることとなった。



経済政策分科会



## 科学と人間 Science and Human

### 目的

科学と一人歩きをいかにして食い止めることができるか？我々はこのテーブルで科学と人間・社会のよりよい関係を追求することを目的とした。

昨今の著しい科学の進歩により、確かに、我々の生活は豊かになった。と同時に、科学の進歩ゆえに生じる問題も様々生じている。それは取り分け、医学、医療の分野で顕著である。このような問題意識をお互い高め合うことは重要である。

世界をリードしている科学技術をもつアメリカと日本。これらの国に住む学生が、実際に目で見、知り、感じた最先端の科学技術をどう運用すれば価値的であるか、人間的であるかを探り、21世紀の科学のあり方を模索した。

### 成果

#### a. 問題意識の高揚

倫理的側面、経済的側面、実利的側面など、様々な面から科学にまつわる諸問題をみることができ、それらを多角的に認識することができた。

#### b. 異文化の相互理解

日本の医療システム、アメリカの医療システムに対するそれぞれの文化的背景に根拠を置くステレオタイプがなくなった。

#### c. 社会性のある科学をめざして

社会の中の、一つの文化としての科学を科学に携わらない人々から遊離させないために、少なくともわれわれ科学に携わる者たちが科学の社会性を常に意識することの重要性を認識合った。

### メンバーとペーパータイトル

- |                   |  |
|-------------------|--|
| 北村 薫子             | ELSI and Gene Diagnosis<br>(遺伝子診断の倫理的・法的・社会的問題)  |
| 廣瀬 葉子*            | Challenge in Space Medicine: The Roles of Gravity<br>(宇宙医学-重力とその影響について-)   |
| 藤原 武男             | The Dignity of Life and Euthanasia (生命の尊厳と安楽死)   |
| Luigi Sal Cagnina | An Analysis of Medical Technology in the U. S. and its Impact on the Future of the American Health Care System<br>(アメリカにおける医療技術の分析とアメリカの医療システムの未来) |

## 会議進行の要約

## a. 準備活動中のフィールドトリップ

## 1) 養老孟司先生(元東京大学医学部教授(解剖学))

日本側の参加者だけで、会議前に、科学と人間テーブルを中心とした有志で養老先生のご自宅にうかがい、お話を聞かせてもらった。

テーマは多岐にわたり、自然と人工、唯脳論とは、人間とは、等々、皆自由に質問しこれ以後に書くペーパーの参考になった。

## 2) 村上陽一先生(国際基督教大学教授)

科学哲学がご専門の先生の講演会にお邪魔し、日米の医療システム、これからの医療経済等、お話をうかがった。

## b. 本会議における議論内容

## 1) 医療システムの日米比較

米学生のLouisが公衆衛生の専門性を生かしてアイリカの医療システムをわかりやすく説明。加入している保険によって病院を選ばなければならない問題となっていること、公立病院の医者は病気になって値段が決まっているので儲けられないが安定した収入であるのに対し私立病院の医者は値段を自由にきめれること、FDAの薬剤認可の厳密さ、などを語った。これをうけて日本学生も日本の医療システムを紹介。薬価差益で医者の収入が決まること、国民は全員保険に加入していること、薬害エイズに見る厚生省・製薬会社・医者の癒着を検証した。

結論としてどちらの医療システムが好ましいか答えは出なかったが、患者の中心の医療システムを、という点で意見の一致をみた。

## 3) 遺伝子診断の危険性

急速な医療問題技術の進歩により可能になった遺伝子診断。その問題点として診断方法のない遺伝子診断の問題、人権問題(遺伝情報をどう使うか、管理するか)、優性主義の問題、遺伝情報が障害を持つ人に与える影響、をあげ、それぞれ検証した。そのなかで、医療技術をきちんと民衆に教育する必要性、遺伝子カウンセラーといったサポートシステム確立の必要性を認識。それでも残る遺伝情報を誰が管理するかという問題で、アメリカではドクター、日本では病院で管理していることを踏まえ、将来国家が国民を管理してゆくために遺伝情報を利用する危険性に言及した。この中で、情報が漏れないように2重3重の方法で保護することが提案された。

## 4) 安楽死

人間の死に何処まで医療者が関わることができるのか。安楽死を様々な角度から検証し、その是非を考えた。なにが患者にとって「安楽」な死なのかはだれにも分らないという点で、結論的には、医療従事者として「安楽死」を行うことはできないという意見に一致をみた。

さらに、そのためにdeath educationの必要性、医学教育に哲学を導入すること、ペインクリニックの進歩の重要性を認識した。

### 5) 宇宙医学—重力とその影響について—

我々は、地球において活動をしているとき、あまり重力の存在を気にすることはない。人類が進化を遂げていく課程において、重力は最も当然のファクターとして身の周りに存在し、重力とともに我々は進化を遂げてきたといっても過言ではないだろう。それでは、果たして人間は無重力状態ではどのように生活をしえるのであろうか。人間は地球以外の惑星において生命を存続し得るのだろうか。それを究明するにあたって宇宙医学が1950年代後半より進歩することとなった。我々の身体のメカニズムは、無重力状態では大きく変化を遂げる。「宇宙酔い」は一般によく知られている現象であるが、早くより影響が現われる臓器は循環器系である。脳血流量が増加を示し、両肢の末端には血流量は減少を示す。このため、身体は逆三角形を示すように見える。さらに長時間無重力状態の環境におかれると筋肉は衰はじめ、骨も重力の影響を受けないためにもろくなりやすい。このように我々の身体は重力の影響を十分に受けて今のように形づけられた。

宇宙医学はこのように無重力状態をつくりだすことで人体のメカニズムを新しい視点により解明しようとする。当たり前前の環境条件であった重力の影響を考えることから更なる発展をめざそうとする。しかしながら、この宇宙医学の研究にはたくさんのコストが必要とされる。アメリカでは毎年数十億という単位で宇宙医学に予算が組み込まれている。これほどまでの予算を組んで研究する意義のある分野であるのだろうか。これが適切な医学における予算配分なのであろうか。即戦力を問うばかりがよいことではないが、研究の内容についての情報開示を期待していきたい。科学の研究は決して専門家のみで議論されるものではなく、社会一般にその成果が示され、受け入れられてこそ研究成果を出せたと言える。このつながりを担う科学者こそが21世紀に必要とされる科学者ではないだろうか。

### c. 本会議中のフィールドトリップ

#### 1) Monsanto社(セント・ルイス)

この会社は製薬会社というものの現在は農業開発に力を注いでおり、プラント等施設見学を中心に行った。また、企業とFDAの関係、研究の目的は企業利益だけなのか、等の話をうかがった。

#### 2) Cancer Center(ビルングス)

癌の研究・治療に関しては世界のトップをいくアメリカ医療の一端を垣間見た。患者一人ひとりに合わせた放射線カバーなど、患者中心の医療を感じた。

さらに遠隔医療(telemicine)のためのテレビシステムも視察。山岳地帯の土地柄ゆえに威力に対する期待は大きく、訪問者一同感嘆した。

#### 3) NIH(ワシントン・D.C.)

いわずと知れた世界有数の研究機関・NIH。施設の巨大さと巨額の研究費にアメリカの医学研究に対するパワーを肌で感じた。



科学と人間分科会

## 再考・「日米学生会議」

### ～第48回日米学生会議実施OBアンケート結果報告～

第48回日米学生会議では、準備活動における京都大学教養学部比較宗教学助教授のカール・ベッカー氏との意見交換を発端に、氏の御発案および参加者有志の企画により、OB全員を対象にアンケートを実施いたしました。ベッカー氏は第37回の会議に講師として御協力下さって以降、日米学生会議が抱える様々な問題点を指摘され、アンケートの実施による問題点の整理、その結果をもとにした会議の成長、および日米共同のOB会のシステム化を提唱して下さいました。会議開催第50回目を目前にしたこの機会にアンケートを実施し、これまでの会議の成果と実績をまとめることは、これからの会議のための有意義な指針になると期待しております。

御多忙中アンケートに御協力下さいましたOBの皆様には一同大変感謝しております。参加された当時の御感想、その後の御活躍、後輩に対するメッセージなどをこれからの活動に役立てていく所存であります。今後とも一層の御指導とお引き立ての程をお願い申し上げます。

期間：平成8年7月末より8月末日まで

対象：日米学生会議参加者（第1回より第47回まで）

目的：会議の抱える問題点の整理

応募者の広報や財務活動のための資料作成

アンケート実施責任者：西野水季(48)／湧永裕子(47、48)

アンケート集計責任者：湧永裕子(47、48)

有効解答数：126通

集計結果の表記：(1)・・・第1回から第9回までの参加者の御意見

(10)・・・第10回から第19回までの参加者の御意見

(20)・・・第20回から第29回までの参加者の御意見

(30)・・・第30回から第39回までの参加者の御意見

(40)・・・第40回から第47回までの参加者の御意見

原則として、参加回数の古い順に、年代順にまとめてあります。

集計結果は、重複する御意見をまとめ、文章の表現を改めている場合もあります。御理解を宜しくお願い申し上げます。

尚、解答されたアンケートは四谷の事務所にまとめて保存しております。研究目的等で閲覧を希望される方は、現行の実行委員にお問い合わせ下さい。

(1) 参加された当時、どのような動機で日米学生会議に応募、参加されましたか？

- ・日本国内におけるアメリカの外圧を不当に感じていたが、同時に日米の共存の方法を模索すべきと考えていたから (1)
- ・国際親善のため。当時ESSの活動はよく警察官の臨検を受けたが、日米学生会議への日本軍部の理解は深く、陸軍省と海軍省は毎年巨額の寄付をしてくれた背景もあった (1)
- ・日米の友好関係は若い世代によって維持されるべきだと思ったから (1)
- ・アメリカ人に日本を理解してもらうため (1)
- ・アメリカ人学生の日本に対する理解度を知りたかった (1)
- ・大学の推薦、ESSの代表として(1)(10)
- ・アメリカ人学生と英語で討論したかった (1) (10) (20) (30)
- ・アメリカに行きたかった (1) (10) (20) (30) (40)
- ・留学の準備、延長として (1) (30)
- ・外国人学生との意見交換 (1) (30)
- ・よりよい異文化理解のため (1) (30) (40)
- ・戦後直後の希少なチャンスだった (10)
- ・敗戦国と勝戦国の間のギャップをうめるため (10)
- ・軍国主義の重圧から逃れ、自由と文明の空気にふれるため。愚かな国に生まれた不幸を忘れるため (10)
- ・世界一の先進国であるアメリカの実状を見たかった (10)
- ・語学研修として (10)
- ・アメリカ人の知り合い、友人がほしかった (10) (30)
- ・国際関係論を専攻していたから(10) (30) (40)
- ・グローバルな視野を持てるようになるため (20) (30) (40)
- ・日米会話学院の生徒だった (20) (30) (40)
- ・楽しそうだから (20) (30) (40)
- ・英語力をのばしたかった (30)
- ・アメリカの考え方にふれたかった (30)
- ・参加者になることが一つのステータスだったから挑戦した(30)
- ・友人関係の幅を広げたかった (30) (40)
- ・会議の高い理想、理念に感動したから (30) (40)
- ・多様な価値、視野を持つ学生と出会うため (30) (40)
- ・経験の幅を広げたかった (30) (40)
- ・学生時代の記念、思い出作り (30) (40)
- ・同世代の学生と現代の諸問題について直接的な議論を試みたかった (40)

- ・難しい議題を英語で議論することがかっこよく見えた (40)
- ・歴史のある有名な会議なので (40)
- ・日米の相互理解の役に立ちたかった (40)

### (2) 日米学生会議で得た、もっとも大きなものは何でしたか？

- ・世界を見る視点が変わった (1)
- ・日米の学生の協力関係 (1)
- ・会議の準備のために真剣に勉強した (1)
- ・アメリカの「民主主義」信仰の強さに感動した (1)
- ・アメリカのプラグマティズムにふれた (1)
- ・女性の参加者として、男尊女卑のない自由な人間関係をもてたこと (1)
- ・女性の社会の社会的活躍への決意 (1)
- ・日米のライフスタイルの相違に驚き、カルチャーショックを受け、人生観が変わった (1)  
(10)
- ・世界平和はすべてに優先するということ (1) (10)
- ・アメリカ側の友人との友情 (1) (20) (30) (40)
- ・日本側の友人との友情 (1) (20) (30) (40)
- ・テレビ出演、記者会見など社会にアピールでき、自信がもてた (10)
- ・国際親善の実感 (10)
- ・コミュニケーションの大切さを知った (10)
- ・全盛期のアメリカの社会や文化にふれられた (10)
- ・自由の素晴らしさを味わった (10)
- ・民主主義の長所を認識 (10)
- ・戦争観の相違を認識。アメリカ側は民主主義を保持するために不可欠と主張、日本側は絶対反対と主張した (10)
- ・占領下の当時は、アメリカ側は大学卒の若い軍人が主な参加者だったが、対等に交流できてた (10)
- ・日本の国際社会での位置を確認 (10)
- ・マルチカルチャラルな視野を持つきっかけになった (10) (20) (40)
- ・国境、民族、イデオロギーを越えた人間としての相互理解 (10) (30)
- ・アメリカ側の学生に劣等感のない対等な立場で交流できた、自信がついた (10) (30)
- ・ベトナム戦争下、アメリカ側参加者の本音が聞けたこと。反戦の立場の者が多かった (20)
- ・日米の代表者としての討論上の対立などを経て生まれた協調と友情 (20)
- ・外国語で行う会議の難しさ (20)
- ・同じ興味、問題意識を持ち、別のアプローチを考えている向学心の旺盛な友達との出会い。共に成長し合える、文化を越えて育める友情を得たこと (20) (30) (40)

- ・生涯のパートナー、配偶者を得たこと (30)
- ・グローバルな視点やヴィジョンを持つ姿勢 (30)
- ・アメリカ側の学生の自己本位のライフプランの立て方に影響を受けた (30)
- ・多様な価値観にふれカルチャーショックをうけた (30)
- ・社会への問題意識をもつきっかけとなった (30) (40)
- ・著名な講師陣との意見交換 (30)
- ・学生の方ですべて企画運営した自信 (30)
- ・日本の大学生活では経験しがたい論争等の摩擦を伴う密度の濃い人間関係の中で、社会人として会議の企画運営ができたこと (30) (40)
- ・年齢、大学、専攻、地域、国籍等を越えた友情 (40)
- ・日米の文化の相違点と共通点を認識した (40)
- ・国民性よりも個人の環境による相違を認識した (40)
- ・コミュニケーション、意志伝達の大切さ (40)
- ・人生に目的意識を持つようになった (40)
- ・ひとつのイベントを実施することの困難を実感 (40)
- ・実行委員としての事務処理能力 (40)
- ・進路、就職先の選択に影響した (40)

**(3) 日米学生会議での経験は、その後に人生にどのような影響を与えたとお考えになりますか？**

- ・日米学生会議の経験なしでは現在の自分はなかった (1)
- ・考え方の相違はあっても世界人類の同一であること (1)
- ・欧米人への劣等感がなくなった (1)
- ・アメリカ文化の理解 (1)
- ・語学力、折衝能力がついた (1) (10)
- ・相手国を尊重し、社会人になってからも企業のエゴを食い止める態度をもてた (1)
- ・企業としての国際交流でも諸外国と対等に主張する自信をもてた (1) (10)
- ・日米学生会議参加者ということが、国際部担当等、会社でのキャリアにつながった (1) (10) (20)
- ・視野が広まった (1) (30) (40)
- ・留学を決意した (1) (30) (40)
- ・日本を外国の視点から見る姿勢 (10)
- ・人生観、人生に対する姿勢が変わった (10)
- ・短期のお祭りの会議ではあったが、人生を考える転機になった (10)
- ・異文化交流のオリエンテーションとして有効 (10)
- ・アメリカ的思考、分析力、スピーチ、ディスカッション、プレゼンテーション、コミュニケー



ションの方法を学んだ (10)

- ・職業選択、進路決定などに会議の体験と友人の影響が大きい (10) (30) (40)
- ・国際親善、草の根の国際交流 がライフワークになった(10) (40)
- ・国際関係に関心を持ち続ける態度が形成された (20)
- ・個人主義を学んだ (20)
- ・異文化、異民族に対する偏見がなくなり寛容になった (20) (30)
- ・多様かつ優秀な友人との出会い 。相互に刺激しあう友情、人間関係 (20) (30) (40)
- ・グローバルに人類の幸福、平和に貢献する事業や活動を行うパースペクティブや、仲間を得ようとする生きる方向性が自分の基本となった (30)
- ・準備期間に勉強したことが役立っている (30)
- ・自分自身の成長になった (30)
- ・日本人としてのアイデンティティーがしっかりした (30)
- ・日本人の考え方を理解してもらえた (30)
- ・外国人と気軽につきあえるようになった(30)
- ・現代日本においてはどのような職業でもアメリカと関係せずにはいられないので、アメリカを理解するよい機会になった (30)
- ・将来日米関係に貢献したいと考えるようになった (30)
- ・日米交流からあまり影響を受けなかった。その後の第三国との交流の方が印象深かった(30)
- ・話せばわかるとは限らないが、話さなくては何も始まらないということ (30)
- ・何事もなせばなるという自信 (30)
- ・異なる意見を尊重しつつ自分の主張をする姿勢、精神面の許容量が増えた (40)
- ・進路、就職先の決定に影響した(40)

**(4) 参加された当時、「日米学生会議」の意義をどのようにお考えになりましたか？**

- ・第二次世界大戦直前のほんの一時の民主的な時期に参加でき、日米の相互理解の役に立つと思った (1)
- ・日支事変が始まり、国際的に対日非難が厳しくなる中、日本の立場を理解してもらうこと。だが、今ふりかえると、当時の学生の意見は、政府や言論統制下の新聞の意見の受け売りにしかすぎなかった (1)
- ・日本人学生の国際感覚の欠如、無知の自覚の機会 (1)
- ・国粋主義の華やかな時代に、画期的な会議に参加できたことを誇りに思った (1)
- ・日米学生会議がもっと早期に発足していれば開戦の悲劇が防げたかもしれない (1)
- ・アメリカ側に日本を理解してもらえ、結果敗戦後の政策に大きな影響を与えた (1)
- ・英語力不足で十分な議論ができなかった (1)
- ・学生の学生による学生のための教育機関、多様性の理解の場 (1)

- ・すべてを「学生自身の手でつくった会議」を実行したこと自体意義深い (1) (30)
- ・ほとんどの参加者は興味本位であった。実行委員として、資金集め、準備活動、会議の企画運営をした経験は貴重だった (10)
- ・敗戦後に日本を民主主義国家へと導いてくれたアメリカとの関係は大切(10)
- ・アメリカ文化にふれられる希少な機会だった (10)
- ・反米思想、軍国主義下での真に勇氣ある偉業であった (10)
- ・戦勝国と敗戦国との意識の差、経済的格差のあった時代に対等に議論する機会が得られたこと (10)
- ・貿易立国日本にとってアメリカとの関係は最重要である (10)
- ・日米の代表者の会議 (10)
- ・先輩から会議の精神、伝統、熱意を引き継ぐことが大切 (10)
- ・日米の学生の友情、相互理解を培う場 (20) (30) (40)
- ・草の根レベルの国際交流の一環 (20) (30) (40)
- ・メディアや出版物ではなく実体験を通して学べる機会 (20) (40)
- ・「日米間の架け橋」になる (30)
- ・これからの日米の歴史をつくっていく自覚の確認 (30)
- ・「日米」で議論する必然性を感じなかった(30)
- ・「平和」という理想の継承(30)
- ・日米の学生の人脈作りの場 (30)
- ・全員が学生という対等な立場で本音で自由に語れる機会 (30)
- ・英語で会議ができる (30)
- ・留学体験よりも幅広い体験ができたこと (30)
- ・自分を見直すため、アイデンティティーを確立するため (30)
- ・社会勉強 (30)
- ・学業の息抜き(30)
- ・受験が終って余裕のある時期に、自分達の手で企画運営することはよい (30)
- ・一参加者にとって「会議の意義」についての議論はいつでもよかった (30)
- ・会議全体の意義を問うことに時間を割かなくてもよいと思った。個人的体験であればいいはず (30)
- ・各界で活躍されるOBに好影響を与える機会 (30)
- ・問題意識の高い日米の学生がアカデミックな議論をする場 (40)
- ・主義主張のことなる者同志が、相互理解を経て一つの会議を創りあげていく課程が大切(40)
- ・コミュニケーションギャップが異文化間の無関心や反目感情の原因であるから、それを埋める機会 (40)
- ・異文化理解のスタート (40)
- ・経験を共有することで長期的な友情を培う場 (40)
- ・日米の学生の多様な価値観にふれる機会 (40)

- ・ 将来を語り合い、未来を信じれるようになる場 (40)
- ・ 知的サークル (40)
- ・ モラトリアム (40)
- ・ 平和NGO (40)

(5) 学生が渡米し交流の場を持つこと自体が意義深かった時代と違って、国際化、情報化の時代といわれる今、「日米学生会議」の意義が問い直されつつあります。現在、社会の中での「日米学生会議」の存在意義とは何であるとお考えになりますか？

- ・ 学生レベルで政府や企業に影響されずに会議をもつこと自体意義がある (1)
- ・ 官僚の非国際性に対抗する力となる (1)
- ・ 時代と共に情報量は変化するが、問題意識や心の問題は変化しない (1)
- ・ 世界に蔓延する差別、矛盾の解決を語り合うこと (1)
- ・ 次世代の社会、政治、経済、文化の方向性を見いだすこと (1)
- ・ ソビエト連邦崩壊後のアメリカの覇道にブレーキをかけること (1)
- ・ 日本人学生の内向性、自己否定的な態度を改善すること (1)
- ・ 相手の人間性と生活環境を知ることが真の国際社会の構築の第一歩であるので、相互理解と生活体験を継続してほしい (1)
- ・ 友人をつくることの大切さは変わらない (1) (20)
- ・ 世界平和、環境問題や人権問題を真剣に議論し、社会に結果報告をすること (1) (20)
- ・ 現在の日米関係は必ずしも良好とはいえないので、学生レベルからの討議は不可欠 (10)
- ・ いつの時代も日本にとって日米関係は重要 (10)
- ・ 日米関係の将来を想定したテーマを設定すべき (10)
- ・ 利害関係なくアメリカ側と議論できる (10)
- ・ 外国人と意見交換する習慣付けの第一歩 (10)
- ・ 「他を知る前に己を知る」よい機会 (10)
- ・ 未来の指導者たる若者の教育機関。未成熟な学生にとって自分のエネルギーを何にぶつけるかを模索する場 (10)
- ・ 日米双方、全国的な組織の代表者を募ること (10)
- ・ 各界のリーダーと意見交換すれば社会的意義、インパクトがうまれる (10)
- ・ 年一回の会議にとどまらず絶えず議論を継続すること (10)
- ・ 時代と共に会議の目的意識が薄れて、お祭りの色彩が濃くなってきているのではと思う。外国に自由に行ける時代になったので意義が薄れてきていると思う (10)
- ・ 「対面」会議はなにものにもかえがたい。直接会話し、共同生活することでしか実感できない事を体験できる (10) (20) (30) (40)
- ・ 戦前や戦中ほどの意義はない (10) (40)

- ・「脱欧入亜」ではなく「親欧入亜」の担い手となること (20)
- ・都会の学生は国際交流の場に恵まれているが、地方の学生はそうではない。全国から応募者を募ることに意義がある (20)
- ・社会人になった時に日米間の交渉をするための練習 (20)
- ・メディアや出版物ではなく実体験を通して学べ、判断力を養える機会 (20) (30) (40)
- ・知日派、知米派の育成の場 (30)
- ・アメリカ側学生にとっては日本に来る機会自体が意義深い (30)
- ・アメリカにとってワンオブゼムでしかない日本にとって、日米理解の推進は利益になる。一方で、外国からの働きかけは、自己中心的になりがちなアメリカのためにもなる (30)
- ・政界経済界で活躍する傑出したOBの輩出の場 (30)
- ・エリートネットワークの組織化にすぎない (30)
- ・将来OBが成長し、社会に体験を還元するという結果が大切。存在意義を考えることよりも体験することに専念すること (30)
- ・社会的意義はない。歴史的意義、継続していく中で生まれる意義はあると思う (30)
- ・日米学生会議が世界を変えることはできないが、世界を変えられる人間を育てることはできる (30)
- ・あくまでも学生間の「勉強会」である (30)
- ・一国際交流の場。歴史があることが特徴である (40)
- ・会議の歴史やOBの存在が平和貢献への意識の薄い現代の学生を刺激する (40)
- ・学校教育のはたしていない社会教育をおこなう場 (40)
- ・そもそも学生会議自体が自己満足の域を出ないものである。個々人の体験の幅を広げることには意義があると考えた方がよい。個人的な体験としては意義深い社会的な貢献度が低い (40)
- ・日米間で会議をする意義は薄れつつあると思う。アジアをふまえた会議作りが必要 (40)
- ・もともと存在意義を感じる人達が参加しているのだから、無理して意義を設定することはない (40)
- ・個々人の存在意義を考えている若者が集まって会議を作ることが魅力である (40)

**(6) 前問の意義を十分全うする上で、日米学生会議が抱える問題点、今後改善すべき点とは何であるとお考えになりますか？**

- ・近年の参加者の選考方法の改善。会議の初期は、各大学を代表する優秀な学生が選ばれた。学長の推薦が必要だった (1)
- ・テレビやインターネットを用いた会議をすることによって、参加者を増やす (10)
- ・会議の内容を広く一般に発表する努力。単行本の出版等 (1)
- ・現在の社会の問題点を具体的に扱うこと (1)
- ・理想と信念に忠実であること (10)

- ・会議の社会性を問うこと (10) (40)
- ・日米関係を楽観視せず、踏み込んだ議論が必要 (10)
- ・複雑化する日米関係を毎年再考することは日本にとって重要であり、今日ほど日米関係が重要な時はない (10)
- ・会議後の交流の場をふやす (10)
- ・必ずしも日米交互に開催国にならなくてもよいのでは。予算を無理しないで開催できる国が担当すればよい (10)
- ・日米ともに地方での開催を心掛けてはどうであろう (10)
- ・アンケート実施等によって会議の改善をはかること (10) (20)
- ・準備活動期間に日米間で議題を絞る (20)
- ・国際社会での日本の重要性が変化したことを認識すべき (20)
- ・会議の継続が第一 (20)
- ・会議の機会を利用して失敗を恐れずにチャレンジすること (20)
- ・単なるディスカッションのレベルにとどまらず、具体的に社会に提言する。学生のフレッシュな意見を国際社会の変革に生かす提言をする (30) (40)
- ・グローバルな視点も重要だが、まず日米の二国間関係を討議すべき (30)
- ・日米の二国間にこだわらず、インターネットをもちいてハワイあたりで多国間学会議を開催してはどうだろう (30)
- ・あくまでも「会議」であることにこだわるべき (30)
- ・日本側参加者は意見の主張が下手すぎる点を改善する (20)
- ・開催地での公開企画により、地域の人々に会議の存在を知ってもらう (30)
- ・会議中の観光は最小限にすべき (30)
- ・営利団体でないのはわかるが理念だけでは会議は存続しないと思う。社会貢献をアピールする大型プロジェクトを企画してみてもどうだろう (30)
- ・第47回の「硫黄島訪問」などの企画はよいが、参加学生の知識が乏しいと思った (30)
- ・会議中にOBや社会人との意見交換の機会を設ける (30)
- ・OBによる各方面での広報活動 (30)
- ・OBによる協力体制の強化。参加費など、比較的裕福な家庭の学生の参加が多いと思う。参加費が出せなくて参加できない学生個人にOB会が援助金を出すなど、OB会のあり方を再考してほしい (30)
- ・OBや関係者に対する、学生であるからという甘え、身勝手な依頼が気になる (30)
- ・日米双方の充実した名簿、電子メールアドレス表の作成 (30)
- ・アメリカ側参加者との同窓会の開催 (30)
- ・分科会と全体会議のバランス。どちらがメインかわからない (30)
- ・もっと参加者を増やし、多くの学生に機会を与えてほしい (30)
- ・ESS所属者など参加者の背景が均一化していたので改善してほしい (30)
- ・安定した財源を確保すべき。そのためのマスコミ広報や有料講演会を開催してはどうだろう

- (30)
- ・いつまで続くのかと思っていたらまだ続いているということは、日米双方の学生にとって関心の高い行事なのだろう (30)
  - ・草の根の国際交流の先駆者である日米学生会議の独自性を考えるべき。企業・財団・公共団体からの賛助金がかえって会議の活動の展開を押しとどめているのではないかとの反省が必要 (40)
  - ・選考において、日米学生会議自体に熱意と関心のある学生を選ぶことが、会議全体の向上につながる (40)
  - ・密度の濃い議論のためには参加者人数を減らすこと (40)
  - ・参加者の幅を広げること (40)
  - ・会議後の生活に戻っても継続できる課題を持つこと。会議、OB会の常設会場としてのホームページの充実し、社会への提言を継続的に行うこと (40)
  - ・OB会内部に第三者的立場の諮問機関を設け、日米学生会議の再評価、自己批判、改善をしていくべき (40)
  - ・毎年の会議はその年の参加者が作るものであるから、OBは出しすべきではない (40)
  - ・資金援助等、OBが冷たすぎる。大学のサークルではもっと面倒見がよい (40)
  - ・かかげる理想はともかく、学生の限界を知り、地道で具体的なテーマを選ぶべき。学生としての立場をわきまえて質実な会議を運営すること (40)
  - ・会議の公開性をめざすことによって、逆にマスコミや政治に利用されない方針作り (40)
  - ・会議の場を地域に公開するのはいいが、一般の聴講者が興味を持つ議論をすることは難しかしい (40)
  - ・行事が多すぎて腹をわって話す機会がない (40)
  - ・日米学生会議を船で行いアジア各国をめぐるはどうだろう (40)
  - ・なぜ「日米」学生会議なのか再考し、他団体と差別化すべき。本会議前に会議の意義について参加者一人一人が自覚するように議論すること (40)
  - ・立派なことをするという気負いがいい方がよいと思う。あまりにも準備活動中の勉強会が多すぎた (40)
  - ・分科会のトピックをせばめ専門的な議論ができるようにする (40)
  - ・個々の分科会の議論の普遍的なテーマを会議全体でも議論する場を設ける (40)
  - ・日米の学生のコミュニケーションギャップの改善 (40)
  - ・英語と日本語両方を会議の公式言語にするべき (40)
  - ・実行委員の負担が大きすぎる。会議を立派にしようとするあまり、実行委員がビジネスマンのように働き、学業を犠牲にして、時間とエネルギーを費やすのはもったいない (40)
  - ・実行委員会がマニュアル主義から脱し、会議のオリジナリティを追求すること (40)
  - ・参加者と協賛者が満足する会議づくりをすることに意義がある (40)
  - ・伝統にこだわらない。歴史があるゆえに傲慢になりやすく、柔軟性を失いやすく、努力を怠り現状に安住しやすくなる (30) (40)

- ・会議の意義をアンケートで問う時間があるくらいなら、自分達で考えるべき (40)
- ・会議の改善は毎年くり返しあらわれては消える課題である。これまでの歴史において会議の改革が内部の手で遂行されたことはない (40)
- ・毎回の反省点が次の改良になかなかつなげていない (40)

### (7) 後輩へのメッセージをお願いいたします。

- ・「学生の学生による学生のための会議」としての独立性、純粋さを保つために、政府や財界に資金的依存をするようではいけない (1)
- ・外国の学生に対して受身ではなく、常に「ギブアンドテイク」の姿勢でいること。学生時代に日米で対等に話す経験をすることが、将来の日米関係を緊密にするはず。 (1)
- ・まずヒアリング力とディベート能力をつけること (1)
- ・国家としてでなく個人として世界平和を追求し、若いエネルギーを注いでほしい。相互理解は世界平和への第一歩である (1) (10)
- ・社交クラブではなく修養道場であることを自覚し、ハングリー精神をもってほしい。オリンピックの代表になったつもりで頑張してほしい (1) (10)
- ・日米間にとどまらずグローバルな視野を広げてほしい (1) (30)
- ・OBとはいっても戦前の参加者は現在は年金生活者なので、賛助や会費を求めないでほしい (10)
- ・企画の完璧を追求せずのびのびと頑張してほしい (10)
- ・アメリカ国内の広報を強化するようにJASCinc. に働きかける (10)
- ・日本国内の広報を強化するために広報キャラバン隊を派遣する (10)
- ・会議で刺激をえたことに興味を持ち、学び続けることが大切 (20)
- ・アメリカ人の民主主義、自由な発想力を学び、一方で日本人の心を伝えてほしい (20)
- ・環境問題を毎年の継続的テーマにしてほしい (20)
- ・子供から大人になるためのすばらしい機会である。自分の成長のためにしてほしい (20) (30)
- ・建前ではなく本音で話す習慣を身に付けてほしい (20)
- ・企画、運営への労力は大変なものだが、21世紀の創造者として自覚をもって、会議の継続の努力をしてほしい (30)
- ・学生の無限の力を信じ「学生の学生による人類のための会議」であることを心掛けてほしい (30)
- ・友人、人脈が財産になる (30)
- ・堅苦しくならず「遊び」の部分も大切に (30)
- ・社会人のOBから5千円から1万円程度の会費をとり、会議の充実をはかってもいいと思う (30)
- ・OBが権威主義に陥っていて驚いた (30)
- ・参加者全体で「会議の意義」を考える機会を持つこと (30)

## VI. 特別企画 OBからの声

- ・参加者一人一人が会議の中で自分の役割を見つけ、まわりに影響を与える存在となれば会議が活性化する (30)
- ・資金面で会議が行き詰まらないように、安定した財源をつくるべき (30)
- ・会議後、数十年たってから価値がわかる。会議が終って社会人になってからこそ本当友情のスタートである (30) (40)
- ・歴史や伝統をふまえつつも、若いからできることも多いので、その年その年でユニークな会議を創ってほしい (30) (40)
- ・IECとOB会の物理的協力をお願いして、実行委員こそ勉学をおろそかにしないようしてほしい。日本開催時の実行委員の負担が大きすぎる (30) (40)
- ・おごらず、学生ができる範囲をわきまえた方がよい (40)
- ・日米問題といった大きくなりがちな議論に終始せず、個人レベルに置き換えて議論することを忘れないでほしい (40)
- ・一生に一度しかないすばらしい機会 (40)



閉会式





## 第48回日米学生会議

### 主催・後援・協力

主催 財団法人 国際教育振興会  
後援 外務省  
国際教育交換協議会(CIEE)  
日米文化センター

### 会議開催協力

#### 第48回日米学生会議全般

財団法人 国際教育振興会

理事長 板橋 並二 様  
理事 事務局長 鈴木 堯 様  
事務局長 稲田 脩 様  
事業課 西部あゆみ 様  
町田 実奈 様

賛助会事務局長

日米文化センター日本代表

伊部 正信 様

株式会社 日本エアシステム

営業本部

石井 洋市 様

株式会社 実業公報社

常務取締役

古屋 繁 様

くにたち工房

大野 一男 様

国立オリンピック記念青少年総合センター

株式会社 千修

山田 英史 様

JASC Inc.

Mr. Jack Shellenberger

Ms. Gretchen Hobbs Donaldson

Ms. Akiko Clayton

### 連続講演会講師

ジャーナリスト

櫻井よしこ 様

慶應義塾大学

総合政策学部助教授

竹中 平蔵 様

ワシントンポスト紙

東京特派員

東郷 茂彦 様

## 準備活動

### 定例会講師

東京大学 教授	能登路 雅子 様
京都大学 総合人間学部助教授	カール=ベッカー 様
日米学生会議OB	田端 利夫 様
HIV人権センター	鮎川 いずみ 様
国連大学	

### フィールド・トリップ

防衛大学校 助教授	室園 信宏 様
防衛庁 陸上幕僚監部 二等陸佐	木上 英輔 様
とうきょう学生ボランティアふぉーらむ 代表	鹿住 貴之 様
恵泉女学園大学 助教授	大橋 正明 様
世田谷ボランティアセンター	
風の子会	
三菱電機株式会社 顧問	渡辺 一雄 様
わかたけサークル	

## セントルイス(ミズーリ州)開催協力

International Institute	Dr. Ann Rynearson
Channel 5	Ms. Ava Erlrah
Herbert Hoover Boys and Girls Club	Ms. Nancy Lammers
Cuisine D' Art	Ms. Beth Williams
McDonnel-Douglas	Mr. Jack Meagham
Morsanto Company	Mr. Jerone F. Crouley
日本総領事館 Consulate General of Japan Kansas City, MO	Hon. Tatsuo Tanaka
Honorary Consulate General St. Louis, MO	
Washington University	Hon. Bruce Buckland
	Dean James McLead
	Mr. Warren Davies
	Dr. Michele W. Shoresman
	Dr. Marvin Marcus
	Dr. Robert Morrell
	Ms. Phyllis Jackson

日米学生会議OB

Mr. Kari Givendel

Mr. Micah Averbach

## ピリンスグ(モンタナ州)開催

Rockey Mountain College

Rimrock Trailways

First Interstate Bank

Prestige Toyota

Crow族(Native American)のみなさん

Individuals

Mr. David Orser & Ossie Abrams

Mr. Robert & Julia Huebner

Mr. Jack Yost

Mr. Richard & Mary Goff

Ms. Ann Bowman

Mr. Iwao Nakatani

Dr. Arthur DeRosier

## ワシントンDC開催

American University

Center for Global Partnership

UNHCR

World Bank

Pentagon

Federal Deposit Insurance Corporation Chaiman

Mr. Ricki Helfer

United States Trade Representatives

National Institutes of Health

Asia Development Bank

Ms. Ronda Bresnick

日本経済新聞社

Mr. Hirotsugu Koike

シンガポール大使館

Ms. Serena Wong

School of International Service

Dr. Louis Goodman

日本大使館

斉藤邦彦大使・大使夫人

## 賛助財団・企業・団体名

### 後援：

外務省

日米文化センター

国際教育交換協議会

### 協力団体：

財団法人 石橋財団

財団法人 鹿島平和研究所

財団法人 国際教育財団

財団法人 日商岩井国際交流財団

財団法人 三菱銀行国際財団

大阪日米協会

神戸日米協会

財団法人 多山報恩会

財団法人 平和中島財団

財団法人 吉田茂国際基金

社団法人 証券投資信託協会

社団法人 日本自動車工業会

社団法人 信託協会

社団法人 日本歯科医師会

社団法人 日本証券業協会

株式会社 あさひ銀行

味の素株式会社

伊藤忠商事株式会社

エッソ石油株式会社

関西電力株式会社

九州電力株式会社

協栄生命保険株式会社

国際電信電話株式会社

三洋証券株式会社

株式会社 三和銀行

新日本製鐵株式会社

株式会社 住友銀行

住友スリーエム株式会社

積水ハウス株式会社

ゼネラル石油株式会社

株式会社 第一勸業銀行

大成建設株式会社

株式会社 大和銀行

タカキベーカリー株式会社

アサヒビール株式会社

株式会社 アンデルセン

株式会社 イトーヨーカ堂

オムロン株式会社

キッコーマン株式会社

キューピー株式会社

興和不動産株式会社

株式会社 さくら銀行

三洋電機株式会社

塩野義製薬株式会社

住友海上火災保険株式会社

住友信託銀行株式会社

住友不動産株式会社

セコム株式会社

ソニー株式会社

第一生命保険株式会社

株式会社 ダイナワード

大和証券株式会社

武田薬品工業株式会社

株式会社 竹中工務店  
堤清二  
株式会社 電通  
東京急行電鉄株式会社  
東京電力株式会社  
凸版印刷株式会社  
日興証券株式会社  
日本アイ・ビー・エム株式会社  
日本国際通信株式会社  
日本電気株式会社  
日本マクドナルド株式会社  
株式会社 日立製作所  
株式会社 富士銀行  
富士ゼロックス株式会社  
本田技研工業株式会社  
松下電器産業株式会社  
三井信託銀行株式会社  
三井不動産株式会社  
三菱自動車工業株式会社  
三菱商事株式会社  
宮沢 喜一  
安田火災海上保険株式会社  
山一証券株式会社  
UCC上島珈琲株式会社  
横河電機株式会社  
株式会社 ロイヤルホテル

中部電力株式会社  
デュポン株式会社  
東京海上火災保険株式会社  
株式会社 東京三菱銀行  
株式会社 東芝  
トヨタ自動車株式会社  
日産自動車株式会社  
株式会社 日本興業銀行  
日本生命保険相互株式会社  
日本電信電話株式会社  
野村証券株式会社  
日野自動車工業株式会社  
藤沢薬品工業株式会社  
富士通株式会社  
松尾橋梁株式会社  
三井海上火災保険株式会社  
三井物産株式会社  
三菱地所株式会社  
三菱重工業株式会社  
三菱信託銀行株式会社  
明治生命保険相互会社  
安田生命保険株式会社  
山崎製パン株式会社  
雪印乳業株式会社  
横山 勇  
湧永製菓株式会社

(50音順、敬称略)



斉藤邦彦駐米大使のお言葉：閉会式にて



大使御夫妻と日米の実行委員長：閉会式にて

●編集後記●

何度も何度も、立ち止まって考えることばかりを繰り返した会議だった。

アジアやヨーロッパの例を引くまでもなく、多国間関係が国際関係の主流となっている現在、私たちのような二国間学生会議にその存在意義はあるのか。アメリカが日本を「アジアの一国」としてしか見ていないのに、なぜ私たちは日米にこだわるのか。景気が後退する中で学生会議に賛助してくれる企業に、どのような成果で報いることができるというのか。悩み続けた一年だった。しかし、問い掛けることは止めなかった。

準備活動中、京都大学総合人間学部助教授のカール＝ベッカー氏に、日米学生会議の意義についてお話しを伺う機会があった。私自身は直接参加はできなかったのだが、後に伝え聞いたことは、私の悩みに対して示唆に富むものだった。日米学生会議で成果を出さなくては、という意見は多いが、一カ月の私たちの会議によって、ドラスティックに社会が変わることはありえないだろう。ならば、会議の意義を何に求めるのか、という話になる。私は、日米学生会議を「教育機関」だと捉えていたし、現在でもそれは変わりはない。少々陳腐な言い方になるが、参加者がその人生の中で、会議に学んだことを何らかの形で活かせれば、つまり、日米学生会議が「教育の場」になれば、それだけで大きな成果だと考えていた。しかし、ベッカー氏は、日米学生会議自体が48回という回を重ねているにも関わらず、社会的に成長していないことを疑問視していたのだ。合わせて、社会的な認知度の低さや、個人へのインプットを越えた成果を出せていないことの理由として、縦の繋がりが非常におろそかにされていることを挙げていた。もちろん、こうしたことは他の人によっても何度も指摘されたことではある。しかし、いままでの指摘と、今回のベッカー氏の声異なるのは、彼から対策が出され、それを私たちも(一部ではあるが)実行したことにある。それが、OBへのアンケート実施であり(詳細は別稿参照のこと)、この報告書について言えば、48回と49回両方の実行委員長に、「やり残したこと」と「次回会議への抱負」を書き残してもらったことである。もちろん、ほんのささいなことだとは思ふ。

会議も終わりに近づいた頃、次回の第49回会議実行委員を選出する機会を設けた。それに先だって、第49回を開催すべきかどうかを参加者に問うことから始めた。実行委員として正直に言えば、「もちろん開催すべきだ」と全会一致で答えが返ってくることしか期待していなかった。それが、数名だが、強く反対の意を表明した者があり、その場は混乱した雰囲気にも包まれた。彼らは、「現在、日米間で学生会議を持つことに設立時ほどの意義はない。」「交流会ムードに飽き飽きした。もっとアカデミックな会議でないかぎり夏の一月は無駄だ。」「実行委員の役割が明文化されていないため、リーダーシップに欠けていた。その結果、参加者として必要以上の迷惑を被った。」等の理由を挙げ、同じことが繰り返される限り、日米学生会議に存続の必要はない、と論じた。

なぜ今の時代に日米なのか？学生にできることの限度は？楽しい会議と意義のある会議の境目は？この報告書に、これらの問に対する一つの答えは書いていない。ただ、私たちの悩んだ軌跡があるだけだ。

最後に、原稿の執筆者を始め、報告書作成にご協力くださったすべての方々に、多大なる感謝を捧げる。

第48回日米学生会議実行委員会

日本側報告書編集責任者 大沢枝里子

**第48回日米学生会議日本側報告書**

発行日：1997年6月18日

〈編集〉 第48回日米学生会議実行委員会


大沢枝里子 北澤咲弥花 田尻 雅 原 大介 原田 芳衣  
廣瀬 葉子 見市 礁 村田 知子 Rachel Brunette 湧永 裕子

〈編集責任者〉 大沢枝里子

〈発行〉 〒160 東京都新宿区四谷1-21  
(財)国際教育振興会内 日米学生会議事務局  
☎03-3359-0563

〈印刷〉 株式会社 実業公報社



主催  財団法人国際教育振興会

企画・運営 第48回日米学生会議実行委員会